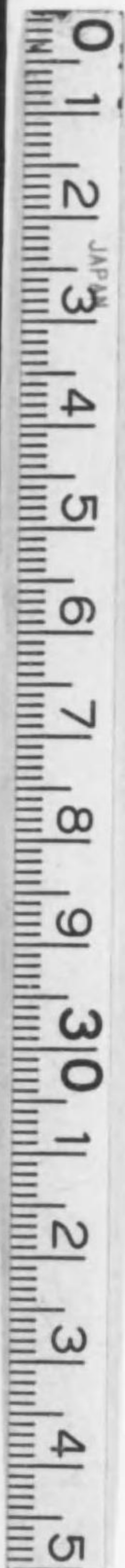


續國譯漢文大成

文學部 十八

309
65

映
入



始



續國譯漢文大成

文學部第十八册(第五帙の二)
杜少陵詩集 中の二

吉田徳郎氏 寄贈本



杜少陵詩集 卷八

蘇園雜英文大如

除架

架を除く

東薪已零落。瓠葉轉蕭疎。
幸結白花了。寧辭青蔓除。

東薪已に零落す、瓠葉轉た蕭疎たり。
幸に白花を結び了る。寧ぞ辭せむ青蔓の除かるを。

秋蟲聲不去。暮雀意何如。
寒事今年落。人生亦有初。

秋蟲、聲去らず、暮雀、意何如。
寒事今年落たり、人生も亦初有り。

【字解】(一) 架 たな。(二) 東薪 たべれたたきぎ、「たな」をつくるため材料として用ひしもの。(三) 瓠 ひきこ、ふくへ。

【七】 寒事 さむそらにあたりての事から、即ち「たな」をとり去る等の事をさす。【八】 年落 さびし。【九】 有初 詩經に靡不有初、鮮克有終とみゆ、ここの初めは架えしはじめをさす、初めありしといふはいま終りのふるはざるをいふなり。

【題義】 ひさごの「たな」をとり去るとしてよめり。以下「銅瓶」に至るまで、みな、秦州にての作なり。

除架

【詩意】ひさごの「たな」をつくるために用ひた薪のたばはもはや零落し、ひさごの葉もいよいよまばらになつた。幸にも白い花を結んでしまつたうへは、青いつるはのぞかれてもかまはない。が、秋の蟲はこの「たな」のあたりから去らず鳴いてゐるし、夕ぐれの雀もここへ集まつてくるそのころもちはどうだらう、(やはり「たな」に未練があるらしい。)秋枯れの仕事は今やさびしくなつた。人生もまた之と似たところがある。今は自分もふるはないのだが、これでもそのむかしさかえた初の時節も有つたのである。

廢畦

廢畦

秋蔬擁霜露。豈敢惜凋殘。
秋蔬、霜露に擁せらる、豈に敢て凋殘を惜まむや。

暮景數枝葉。天風吹汝寒。
暮景、數枝葉、天風、汝を吹いて寒し。

綠露泥滓盡。香與歲時闌。
綠は泥滓に霑されて盡き、香は歳時と闌なり。

生意春如昨。悲君白玉盤。
生意、春昨の如し、悲む君が白玉の盤。

【字解】【一】廢畦、すたれたる畠のうれ。【二】秋蔬、あきの野菜。【三】擁、かこまれる。【四】凋殘、しほみ、そこなはれる。【五】暮景、ゆふ日のひかりにあたり。【六】數、三四ばかりなるをいふ。【七】汝、蔬をさす。【八】綠露二句、蔬の衰容をいふ。

【一】泥滓、汚もまた「に」こるなり、雨のための泥濁の水。【二】盡、緑色がなくなるなり。【三】香、蔬のかり。【四】闌、たけなは、おとろふ、歳闌とはしのすがれをいふ、香蘭は香のおとろへるをいふ。【五】生意、蔬の生氣ありしこと。【六】悲、玉盤に盛らるるを得るの姿に非ざることにいつてかなしむなり。【七】君、仇氏は君王とみ、浦氏は一定の人をさすなれといへり。今仇氏に従ふ。【八】白玉盤、白玉にて作りたる大皿、唐にては立春の節に白玉盤を以て細き生菜を盛りて羣臣に頒ち賜ふ。生菜は血の菜なり。

【題義】すたれかかりしはたけのうねの野菜をみて、感をうつす。亦暗に自ら託するなるべし。

【詩意】秋の野菜が霜や露によりかこまれる様になつた。時節がきたのであるからそのためにしほみいたんだとて惜しいとおもはぬ。が日ぐれのころわづかに三四枚の枝葉があるばかりで、それから来る風がおまへを寒さうに吹いてをり、泥水にうるほされて緑の色はすつかり無くなり、歳がすかれとともに香氣もすがれになつてしまつた。春のころ生き生きとしたきもちをもつてゐたことが、つい昨日の如くおもはれるが、君の白玉盤上に盛られるほどの姿を失つたことは悲しいことである。

夕烽

夕烽

夕烽來不近。每日報平安。
夕烽來ること近からず、毎日、平安を報す。

塞上傳光小。雲邊落點殘。
塞上、光を傳ふること小に、雲邊、落點殘る。

廢畦 夕烽

照秦通警急。過隴自艱難。秦を照らして警急を通ず、隴を過ぐるは自ら艱難。
聞道蓬萊殿。千門立馬看。聞道らく蓬萊殿、千門、馬を立てて看ると。

【字解】「一」不近。遠方よりするをいふ。「二」報平安。唐の儀成にては毎月初夜に一炬の煙を放つ、之を平安火といふ、無事をしらすあひづなり。「三」落點。點は形小をいふ。「四」照秦。秦は關中、長安地方をいふ。「五」通。通報する。「六」警急。警戒、急迫。「七」過隴。烽火が隴西の地方を經過すること。「八」艱難。國事の艱難なるを報するをいふ、杜詩の「艱難愧深情」、「艱難揮長戟」、艱難はみな國難をいふ、こゝも同じ。浦氏の邊將照秦知警、則番兵過隴斯難、「杜陵」の失報有罪、誤報有罪、故曰過隴艱難は、艱難二字を過隴に關せしめてみる、其説是非す。「九」蓬萊殿。長安の殿名。

【題義】夕がた烽火のつたはるを見てよめり。
【詩意】夕方の烽火が遠方から傳へられて来て、毎日平安無事を報じてくれる。その烽火はとりでの上うへに小さく光を傳へ、雲のあたりに一點のせうくわう小光となつてきえのこる。この烽火が隴西の方から經過してくるときは國難の生ずるときであり、つぎつぎに東方へつたへられ關中の地方を照らして警急を通知するのである。であるから長安の蓬萊殿では、多くの門門に於て警備の士は馬を立ててこの烽火の様子いかにとみまもつてゐるといふことである。

秋笛

秋笛

清商欲盡奏。奏苦血霑衣。清商、盡く奏せむと欲す、奏苦にして、血、衣を霑す。
他日傷心極。征人白骨歸。他日、傷心の極、征人、白骨歸る。
相逢恐恨過。故作發聲微。相逢ふ、恨の過ぎむことを恐る、故に發聲の微なるを作す。
不見秋雲動。悲風稍稍飛。見すや秋雲動きて、悲風に稍稍に飛ぶを。

【字解】「一」清商。すめる商調の音。「二」盡奏。曲を奏しつくすをいふ。「三」奏苦。苦とは聽く者をして心の苦しきをおぼえしむる如くなるをいふ。「四」他日。昔日とよく解あり、取らず、將來の異日をいふ。「五」相逢。聽者この吹笛の音にてあふをいふ。「六」恨過。過は過度、極度なり。「七」故作。故意。「八」不見。君不見に同じ。「九」稍稍。しだいに、すこしづつ。「一〇」飛。秋雲の飛ぶをいふ、風飛ぶとの解あるも取らず。

【題義】秋の笛のねをききてそのかなしきさまをよめり。

【詩意】笛が清商の曲調をすつかり奏せんとしてゐる、その奏しかたはききてを心苦しくおもはせるほどであり血の涙かながれて衣をうるはすばかりである。異日出征者の白骨がかへるころにこの音をきいたらそれこそ傷心の極みであらう。この笛吹きはききてが之にであうたときに極度の恨みの情を催しはせぬかを氣遣うて、わざと微かな聲を出させてゐるのかとおもふが、見よ、この音に感じて悲風のために秋の雲もしだいに飛びつつあるではないか。

日暮

日暮

日暮風亦起。城頭烏尾訛。

日暮れて風亦起る、城頭、烏尾訛く。

黃雲高未動。白水已揚波。

黃雲高くして未だ動かさず、白水已に波を揚ぐ。

羌婦語還笑。胡兒行且歌。

羌婦語り還笑ふ、胡兒行くゆく且歌ふ。

將軍別換馬。夜出擁雕戈。

將軍、別に馬を換へ、夜出でて雕戈を擁す。

【字解】【一】訛、動く、一にいふ訛なりと。【二】羌婦、胡兒、降虜中の男女をいふ。【三】換馬、敵にみしられぬ機にと毛色のめだため馬にのりかふるなり。【四】擁、持つをいふ。【五】雕戈、ほりものをしたほこ。

【題義】日ぐれに事件ありて將軍の警戒にいでゆくことをよめり。

【詩意】日ぐれに風が吹き起つて、城のうへにとまつてゐる烏の尾がうごいてゐる。黄ばんだ雲は高いところにゐてまだ動きださぬが、ひくい方では白く川水がはやくも波をあげてゐる。蠻人の女ははなしをしたり笑つたり、をとこはあるきながら歌をうたつたり、事も無げであるが、將軍は馬をのりかへて、りつばなほこをもつて夜でかける。(なにごとかおこつたのだ。)

野望

野望

清秋望不極。迢遞起層陰。

清秋、望み極まらず、迢遞、層陰起る。

遠水兼天淨。孤城隱霧深。

遠水を兼ねて天淨く、孤城隠れて霧深し。

葉稀風更落。山迴日初沈。

葉稀なるに風更に落ち、山迴に日初めて沈む。

獨鶴歸何晚。昏鴉已滿林。

獨鶴、歸る何ぞ晩き、昏鴉、已に林に滿つ。

【字解】【一】望不極、仇注に不能極遠也といへり。恐らくは非なり、仇氏によれば視界がゆきつまる義とするなり、それにては「遠水」の句をいかにするや、望不極は望無際の際の義、ながめのはてしなきをいふ。【二】迢遞、地に高低ありて且はるかなる貌。【三】層陰、いくへものくもり。【四】遠水二句、この二句は上三字下二字の句法を用ふ、遠水、天の淨きを兼ね、孤城、霧の深きに隱る、とよむも可なるも、遠水を兼ねて天淨く、孤城隠れて霧深しとよむの簡明なるに如かず。他の例をあぐれば「樓雪風城濕、宮雲去殿低」七言句にては、「畫省香爐遠伏枕、山城粉堞隱悲笳」の如き同句法なり。【五】葉稀、ひとりてに葉のすくなくなりしをいふ。【六】風更落、「風更に落す」と「落」の字を他動によむも可なれども葉を主とし落を自動とみたり。

【題義】野らの夕ぐれのながめをのべたり。

【詩意】すみきつた秋の遠望ははてしがないが、高低の地勢にはいくへかの夕ぐもりがおこりはじめた。それで遠方の水面とともに天もすつきりしてゐるが、この一つ城はだんだんかくれて霧がふかくたちこめた。それからたださへ稀になつた木の葉が風のためにいつそうふるはれて落ち、はるかなる山のかなたには太陽がやつと沈んでしまつた。このときひぐれのからすは、もはや林に一ぱいとまつ

たのに、どうして一匹の鶴だけは、こんなにおそくかへるのであらうか。(鶴は蓋し自己を比していふ。)

空囊

空囊

翠柏苦猶食。明霞高可餐。翠柏苦きも猶食す、明霞高きも餐す可し。
世人共鹵莽。吾道屬艱難。世人共に鹵莽なり、吾が道、艱難に屬す。
不爨井晨凍。無衣牀夜寒。爨せずして井晨に凍り、衣無うして牀夜寒し。
囊空恐羞澀。留得一錢看。囊空しくば恐らくは羞澀ならむ、一錢を留め得て看る。

【字解】(一) 翠柏、みどり葉の柏、柏は「カヤシ」、こは「カヤ」の實をいふ。(二) 明霞、あさの赤色のかすみ、仙人は之をたべる。(三) 鹵莽、新作の仕方のよいかげんなるをいふ、かりて人事につきいふ。(四) 吾道、自己の理想とする道をいふ。(五) 艱難、世路の險難。(六) 爨、かしく、飯をつくるためかまどに火をたく。(七) 牀、れたい。(八) 囊、さいふ。(九) 羞澀、人に對しはにかむさま。(一〇) 看、みまもる。

【題義】さいふのからにならんとするをよめり。

【詩意】苦くとも「かや」のみをたべる。手にとどきにくい朝霞もまたとつてたべることができ。自分の食物はそんなものだ。世間の人の行ふ所はみなよいかげんのことをしてをるが、自分はこの世

路なんぎの時にあたつて自己の道を守らねばならぬことになつてをる。自分ほめしをたかぬから井の水はあさこほつてゐるし、衣がないからねたいは夜さむい。さいふもからつぽであるが、まるきりからつぽでは人前もはづかしいから、一錢だけはのこしておいてみてゐるのである。

病馬

病馬

乘爾亦已久。天寒關塞深。爾に乗るも亦已に久し、天寒くして關塞深し。
塵中老盡力。歲晚病傷心。塵中に老いて力を盡くす、歲晚病みて心を傷ふ。
毛骨豈殊衆。馴良猶至今。毛骨豈に衆に殊ならむや、馴良猶今に至れり。
物微意不淺。感動一沈吟。物微なるも意淺からず、感動して一に沈吟す。

【字解】(一) 爾、馬をさす。(二) 深、おくまりたるをいふ。(三) 塵中老盡力、馬につきいていふ、上三下二の句法なり、盡力塵中老と同意。(四) 歲晚病傷心、馬につきいていふ、上三下二の句法、傷心は心臓を傷害せるをいふ。(五) 豈、反語、多數の凡馬とあまりちがはぬ、特にすぐれた材力あるにはあらぬをいふ。(六) 馴良、ならされてすなほなり、馬の徳をいふ。(七) 猶至今、昔からさやうであるが今日に至るもまたしかり。(八) 物微、物は馬をさす、一病馬の如きは物としては微小言ふに足らぬほどのものなり。(九) 意不淺、馬に對しての作者のこころもちはふかい。(一〇) 沈吟、ためいきつく。

【題義】病める老馬をかなしみてよめり、暗に自己を比す。

【詩意】 さむざらにあたつて、せきしよとりでの奥まつたこの地方。自分がおまへに乗つたことも久しいものだ。おまへはせい一ばいはたらいて風塵中に年よりになり、このとしのくれに心臓の病氣をしてゐる。おまへの毛なみや骨格が特別他の多くの凡馬とちがつてゐるのではないが、おまへのおとなしさは昔から今日までつづいてゐる。一病馬のこと故たいしたものではないが、自分のこの馬に對するところもちは淺くはないのであつて、この馬のために感動してもつばらためいきつくしだいでゐる。

蕃劍

蕃劍

致此自僻遠。又非珠玉裝。

此を致すは僻遠よりす、又珠玉の裝に非ず。

如何有奇怪。每夜吐光芒。

如何ぞ奇怪有りて、毎夜、光芒を吐く。

虎氣必騰上。龍身寧久藏。

虎氣必ず騰上せむ、龍身寧ぞ久しく藏せむや。

風塵苦未息。持汝奉明王。

風塵未だ息まざるに苦しむ、汝を持して明王に奉せむ。

【字解】 〔一〕 致此 此は劍をさす、致すとはこちらへもちきたせしむ。〔二〕 僻遠 遠きなな。〔三〕 奇怪 あやしきこと。

【詩意】 芒はひかりのほさき。〔一〕 虎氣 劍氣をいふ、「吳越春秋」に吳王闔閭死して劍とともに家に葬りたるに、三日にして白虎がそのうへにうづくまりあたるにより、その地を虎邱と曰ふとの話あり。〔二〕 龍身 劍身をいふ、晉の雷煥が劍、龍に化したる話

「東坡記」にみゆ。〔七〕 昔 作者がこまるをいふ。〔八〕 汝 劍をさす。〔九〕 奉 獻する。〔一〇〕 明王 明德ある君。

【題義】 吐蕃よりつたはりし劍をみてよめり。

【詩意】 このつるぎは、之をもつてきたのはゐなかの遠いところからであるし、また眞珠や玉のよそほひがしてゐるものではない。しかるになんでもふしぎなことがあつて、まればんこれが光を吐きだすのか。必ずや劍氣はうへの方へとたちのぼりあらはれるであらう。劍身はどうしていつまでもかくされてゐようぞ。自分は兵亂の塵のまだやまぬのにこまつてをるから、おまへを明君にささげ亂塵をしづめていただきたいとおもふ。

銅瓶

銅瓶

亂後碧井廢。時清瑤殿深。

亂後、碧井廢す、時清かりしとき瑤殿深かりき。

銅瓶未失水。百丈有哀音。

銅瓶未だ水を失はず、百丈、哀音ありき。

側想美人意。應悲寒螿沈。

側に想ふ美人の意、應に寒螿の沈めるを悲しむなるべし。

蛟龍半缺落。猶得折黃金。

蛟龍半ば缺落す、猶得、折黃金。

【字解】 〔一〕 銅瓶 あかがねにて作りしつるべ。〔二〕 碧井 みどりの水をたたへし井。〔三〕 廢 つぶれしこと。〔四〕 時清

世の治まりしとき。【三】 瘡殿。うつくしきごてん。【六】 深。おくまりたるをいふ。【七】 失水。水と別れること。【八】 百丈。つるべなほ。【九】 哀音。ろくろ仕掛のなほにて水をつりあぐるおと。【一〇】 御想。がはのものからおもふ。【一一】 美人。宮女をいふ。【一二】 寒甃沈。井の沈埋せるをいふ。甃はいたたみの瓦をいふ。【一三】 蛟龍。つるべの雕刻物。【一四】 折黄金。折は「なれる」。黄金は蛟龍の材料として用ひたるもの。師民瞻の注に折を準折（わりびきして賣る）の義とし、楊慎の注に「折」は「當」（實におくこと）なりとせり。今従はず。

【題義】 故宮の井に用ひられし銅のつるべをみてよめり。

【詩意】 兵亂が起つてからこのかた水のいい宮中の井がつかれてしまった。世が太平であつたときにはその井はごてんのおくふかいところにあつたのだ。そのころはこのつるべはまだ水とはわかれず、つるべなほはでくみあげらるるときあはれなおとをたててゐた。それが一朝井がなくなつたことだから自分が想像するにもと宮仕へした女官などのころもちでは、さだめし寒石のいしだたみがうもれてしまつたことを悲んでゐることであらう。つるべの表面に黄金でこしらへた蛟龍の雕刻があるがそれは今は半分はおちこぼれ、その折れた破片だけはなほ得らるる。（別説によれば、しちにおけば金錢にかへうる。）

送遠

送遠

帶甲滿天地。胡爲君遠行。帶甲天地に滿つ、胡爲れぞ君遠く行く。

親朋盡一哭。鞍馬去孤城。親朋盡く一哭す、鞍馬孤城より去る。

草木歲月晚。關河霜雪清。草木歲月晩れ、關河霜雪清し。

別離已昨日。因見古人情。別離已に昨日、因つて見る古人の情。

【字解】 【一】 送遠。遠くにゆくものを送る。【二】 帶甲。よろひを身につけたるもの、武裝者。【三】 胡爲。何爲に同じ、なんすれぞ、どうして。【四】 君。行者をさす。【五】 親朋。親戚朋友。【六】 鞍馬。行者のくら、うま。【七】 孤城。秦州の城をさす。【八】 歲月晚。年末に近きないふ、秋以後はみな歳晚といふ、必ずしも十二月をいふに非ず。【九】 古人情。むかしの人の厚い人情。

【題義】 遠方にゆくべき人を送る詩なり。ただしこの詩は他人を送るに非ず、作者が自己を他人視して我と自己を送るために作りしものなり、而して詩意より推せば秦州出發の翌日、昨日の別れを回顧してつくりしものなり。乾元二年十月の作。此篇より以後の詩は編纂の次第に前後あり。

【詩意】 世がみだれて武裝したものが天地に充滿してをる、こんなときおまへはなんで遠方へゆくのであるか。親戚や朋友が別れを惜しんでみな一たび慟哭する、その聲のなかにたびゆく人の鞍馬はひとつのはなれじろから立ち去つてしまつた。今や草木も歳のくれにむかつてゐるときであり、せきしよの河には霜や雪がきよくおいてゐるときだ。かんがへるとあのやうにしてわかれたのはきのふのことである。それにつけて昨日別れを惜しんでくれた人人の厚いなさけごころがしのばれるのである。

送人從軍【原注】時有吐蕃之役

人の軍に従ふを送る【原注】時に吐蕃の役あり。

弱水應無地。陽關已近天。弱水應に地なかるべし、陽關已に天に近し。

今君度砂磧。累月斷人煙。今君砂磧を渡る、累月、人煙斷ゆ。

好武寧論命。封侯不計年。好武、寧ぞ命を論せむ、封侯、年を計らず。

馬寒防失道。雪沒錦鞍韉。馬寒うして失道を防ぎ、雪は沒せむ錦鞍韉。

【字解】(一) 弱水 甘肅省甘州の山丹縣の西に發源し北流して縣西に運し、又西北して張掖縣の北に運し、又西北して肅州の高臺縣界に入る。(二) 無地 舊注に「地の盡くる處ないふ」となせるも、恐らくは然らず、文字どほりに土地の無きところとみるべし、弱水とは沙地にて水が流れ來りて消えうせてしまふより起りし名なればなり。(三) 陽關 甘肅省安西州治の西南百三十里にありし關の名。(四) 近天 支那人は西北地勢高きゆみに西北にゆくほど天に近しとかんがふ。(五) 度 わたる。(六) 砂磧 沙漠。(七) 累月 いくつきも。(八) 斷人煙 人里まれに炊煙なし。(九) 好武 勇武を好む。(一〇) 寧論命 生死ながへりみざるをいふ。(一一) 封侯 軍功により侯爵に封ぜらるる。(一二) 不計年 その運きとはやきとを計較せざるをいふ。(一三) 防 豫防する、しかせむ様にする。(一四) 失道 みちをあやまつ、みちふみまよふ。(一五) 雪沒 雪のふかきをいふ。(一六) 韉 うまのしとれ。

【題義】吐蕃のいくさありてそこへ從軍する人を送れる詩。乾元二年秦州にての作。

【詩意】弱水のあたりは沙ばかりで土地もないことだらうし、陽關のあたりは高くて天にも近いところ

ろであらう。そんなところをこえて君は沙漠地方をわたつてゆくのだが、そこへらは幾箇月も人里の煙がとだえてゐるであらう。君の如く武を好んでは生命のあるなしなどは論ずるところであるまいし、功をたてて侯に封せらるる時節にもとんちやくはなからう。ただ時はさむざらで雪は深く君ののつてゐる馬の錦の鞍のしきものをも沒せんばかりであらうから、馬の脚もさむくて道をまちがへてしまふかもしれない、そんなことの無い様に氣をつけらるるがよいとおもふ。

示姪佐【原注】佐草堂在東柯谷

姪佐に示す【原注】佐が草堂は東柯谷に在り。

多病秋風落。君來慰眼前。多病にして秋風落つ、君來りて眼前に慰す。

自聞茅屋趣。只想竹林眠。茅屋の趣を聞きしより、只だ想ふ竹林に眠らむことを。

滿谷山雲起。侵籬澗水懸。谷に滿ちて山雲起り、籬を侵して澗水懸る。

嗣宗諸子姪。早覺仲容賢。嗣宗が諸子姪、早く仲容が賢なるを覺ゆ。

【字解】(一) 姪佐 作者の姪、名は佐、襄陽杜氏の系にして殿中侍御史暉の子、官は大理正に終る。(二) 東柯谷 卷七秦州雜詩に見えたり。(三) 秋風落 卷五送楊六判官使西蕃詩にも送秋風落の句あり、落の字につき余は搖落の義か、高處より吹きおろす義かと疑を存しおけり。師氏の舊注に、七月秋風起、八月風高、九月風落といひ、落を衰滅の意とせり。果して然るや。(四) 君來慰

眼前君來慰と同義。君は佐なます。【三】茅屋趣。佐が草堂のおもむき。【六】竹林。魏の嵇康、阮籍・阮咸・山濤・向秀・王戎、劉伶と親し、世に之を竹林の七賢といふ、この竹林は佐が家の竹林をさす。【七】滿谷二句。即ち茅屋の趣なるものなり。【八】應。高處にあるをいふ。【九】嗣宗。阮籍が字、作者籍を以て自ら比す。【一〇】仲容。阮咸が字、以て佐に比す。

【題義】東柯谷にある姪佐の草堂のおもしろさをきき、且つ佐が來訪して自分を慰めてくれることをうれしくおもひて作れる詩なり。乾元二年九月の作。

【詩意】秋風搖落の節に自分は病氣がちであるが、幸におまへは眼前に來て自分をなぐさめてくれる。自分はおまへの東柯谷の茅屋のさまがおもしろいと聞いてからは、おまへの家の竹林で眠りたいとばかりかんがへてゐる。おまへの家では谷いつばいに山の雲がわきおこつたり、まがきの上を侵してまつさかさまに岩間の水が落ちてくるさうだ、さぞおもしろいことであらう。自分にはいろいろ姪どももゐるが、なかではまづ阮咸（即ち佐を意味す）が賢いとおもはるるのである。

佐還山後寄三首

佐、山に還りて後寄す 三首

山晚黃雲合。歸時恐路迷。

山晩れて黃雲合す、歸る時路迷はむことを恐る。一べし。

澗寒人欲到。林黑鳥應棲。

澗寒くして人到らむと欲す、林黒くして鳥應に棲むなる。

野客茅茨小。田家樹木低。

野客、茅茨小に、田家、樹木低し。

舊諳疎懶叔。須汝故相攜。

舊しく諳んず疎懶の叔が、汝が故らに相攜ふるを須つこ。

【字解】【一】歸時。佐がかへるとき。【二】恐。作者がおそれる。【三】路迷。佐が路にまよふ。【四】人。佐なます。【五】林。黒。もりがまつくらになる。【六】棲。れぐらにすむ。【七】野客。作者自らいふ。【八】茅茨。かやぶきのいへ。【九】田家。農家、作者自己の家をさす。【一〇】舊諳。久しく熟知す、佐がこころえてなるをいふ。【一一】疎懶。ぶしやうなをささん、佐に對して作者みづからいふ。【一二】須。必要とする。【一三】汝。佐なます。

【題義】佐がその山居にかへりしのち、作者之に寄せたる詩なり。蓋し前篇示姪佐と同時の作ならん。

【詩意】山がくれがたになつて黄ばんだ雲がとざした。おまへがかへるときに自分はおまへがみちにまよひはせぬかと恐れた。岩間の水の寒く流るところへおまへがやがてつかうとする、そのときもりはまつくろにくらくなつて鳥はみなねぐらにすんだことであらう。自分のかやぶきの家は小さく、まはりの樹木はせがひくい。おまへはそこにすんでゐるこのぶしやうものをむが、おまへがきをつけて手をひいてくれる必要のあるものだといふことをすつと以前からよくこころえてゐる。（それはこのをちの心づよくおもふ點であるとの意。）

【一】

【二】

白露黃梁熟。分張素有期。

白露に黃梁熟す、分張、素期あり。

已應春得細。頗覺寄來遲。

已に應に春き得て細なるなるべし、頗る寄せ來るの遲き。

味豈同金菊。香宜配綠葵。

味豈に金菊に同じからむや、香は宜しく綠葵に配すべし。

老人他日愛。正想滑流匙。

老人、他日愛す、正に想ふ、滑匙に流るるを。を覺ゆ。

【字解】 〔一〕白露 白露の降るときをいふ。〔二〕黃粟 米の美なる種類。〔三〕分張 もと人の分別離居する義なり。原義はしかれども、こゝはそれにては通ぜず、作者は分配の義として用ひたるなるべし。黃粟を自分にわけてくれることはいふ。〔四〕葉 ふだんから。〔五〕期 期限、約束。〔六〕金菊 黄色の菊。〔七〕綠葵 野菜の種類。〔八〕老人 自己をさす。〔九〕他日 平生をいふ。〔一〇〕正想 今日まさにおもふ。〔一一〕滑流匙 米のなめらかさがさじにながれつたはる。

【題義】 黃粟を早くわけてくれぬかといひやる詩なり。

【詩意】 しらつゆがおりる頃となつて黃粟がみのつた。それをわけてくれるとの約束はふだんから有つたのだ。もはや細かに白でついたことだらうとおもふのに、たいへんよこしてくれるのがおそいやうにおもはれる。黃粟の味はとても菊などと同じくはないし、その香は綠葵に配合して煮るにふさはしい。自分はふだんからそれをすきこのんでゐるのだから、いまや待ちきれずあのぬめりが匙の尖から流れるのをおもひうかべてゐる。

〔三二〕

〔三三〕

幾道泉澆圃。交橫落幔坡。

幾道泉圃に澆ぐ、交横はる落幔の坡に。

葳蕤秋葉少。隱映野雲多。

葳蕤、秋葉少に、隱映して野雲多し。

隔沼連香芰。通林帶女蘿。

沼を隔てて香芰に連り、林に通じて女蘿を帶ぶ。

甚聞霜薤白。重惠意如何。

甚だ聞く霜薤の白きを、重ねて惠む意如何。

【字解】 〔一〕幾道 いくすぢか。〔二〕交橫落幔坡 諸説あり。先づ邸説をあぐ。交横とは流泉がこもごもこたはること、落幔の落は給に同じ、落幔とは幔幕をからめ設けたるをかなり、幕をはるは日光をよけたり、鳥雀を防ぐ用に供するなり。落幔坡とよむ説あり、それにては横の字と落の字と相侵す。幔落坡とよみ、幔影が坡上におつるとなす説あり、對句よりすればこれも一説なり。また幔は實物に非ずして坡上の青翠の色なりととくあり。今皆取らず。〔三〕葳蕤 諸家多く司馬相如の封禪書により委頓(しなだれる)の義にみる。今從はず、予は盛なる貌とする説をとる。〔四〕秋葉少 秋葉は諸家多く木葉とみる、取らず、蔬菜の葉すなはち蔬菜とみるべきなり。少の字は王涑本に小に作る、從ふべし、秋葉小とは薤の葉の小ききないふ、葉小なるは根大なるなり。〔五〕隱映 うつろひはゆる。〔六〕野雲 諸家多く實物とみる、余は蔬菜の叢生したるさまをたとへし辭とみる。〔七〕連香芰、帶女蘿 連帶の二字、上の雲多の意より來る、薤がつらなり、薤がおぶるないふ。芰は三角、四角をもつ「ひし」、女蘿は「ひめかつら」。〔八〕薤 ヲツキヤワ。〔九〕重惠 重ねてとは上の黃粟に對していふなり。〔一〇〕意 佐の意。

【題義】 「らつきやう」をねだる詩なり。

【詩意】 はたけに幾すぢかの泉水がそそがれ、その水が「まく」を張つたをかにもごもながれる。それで「らつきやう」の葉は元氣よく盛であるがその形は小さく、地面にうつろうてゐる様子は野のもの雲が多くひろがつたやうである。従つて沼をへだてては香ばしい芰につらなり、林を通じてはひ

めかつらの色にもつながつてをる。霜を経た「らつきやう」の根がまつ白にできたときよくきいてゐるが、黄檗のほかささらにそれをも恵まれるおぼしめしはあるまいか。

從人覓小胡孫許寄

人に從つて小胡孫を覓む、寄することを許さる

人説南州路。山猿樹樹懸。

人説く南州の路、山猿、樹樹懸ると。小拳の如くなるを。

舉家聞若咳。爲寄小如拳。

舉家、咳(効)するが若くなるを聞かむとす、爲めに寄せよ

預晒愁胡面。初調見馬鞭。

預め晒ふ愁胡の面、初調、馬鞭を見む。

許求聰慧者。童稚捧應癩。

聰慧の者を求むるを許す、童稚捧げて應に癩するなるべし。

【字解】【一】覓、もとむ。【二】小胡孫、まめざる。【三】南州、秦州の南方の州。【四】山猿、猿は手長ざるなり、猿は猿の誤なるべしとの説あり。【五】舉家、一家全體。【六】若咳、咳は王洙本に誤に作る、從ふべし。秋はしはぶく、せきをすること。さるのなきこゝろ之に似たり。【七】爲、わがためにの意。【八】拳、にぎりこぶし。【九】預、兼に同じ。【一〇】愁胡面、うれへをおびたる胡人のかほ。【一一】初調、はじめてならず。【一二】見馬鞭、見はさるがみるなり、さるをならすにむちをあてることもあるなり。【一三】許求、許は先方がゆるす、求はこちらがもとむるなり。【一四】聰慧者、りかうなかし、いさる。【一五】童稚、作者のこともらは【一六】癩、よろこんで氣もくるふばかり。

【題義】人のところから豆ざるをもらはうとしたところ、先方はよこしてくれることを承知した。

【詩意】人のはなしによると、南方の州への道路には山ざるが樹ごとにぶらさがつてゐるといふことだ。我が家のものはみなそのさるのせきばらひする様ななきこゝろを聞きたいものだとおもつてゐる、どうかわれわれのためににぎりこぶしほどの小さいさるをよこしてもらひたい。あの澀面のさるがかひならされる當初には馬鞭をあてられるだらうとおもふと、いまからはやをかくし感ぜらる。こちらはなるべく伶俐なやつをほしいといふのにあなたはそれを許諾してくださつた。うちのこどもらはさだめしさをもつてくるほしきまでよろこぶことでありませう。

秋日阮隱居致蓮三十束

【原注】隱居、名叻、秦州人。

秋日、阮隱居、蓮三十束を致す

【原注】隱居、名は叻、秦州の人。

隱者柴門内。畦蔬遠舍秋。

隱者、柴門の内、畦蔬、舍を遠りて秋なり。

盈筐承露薤。不待致書求。

盈筐、露薤を承く、書を致して求むるを待たず。

東比青芻色。圓齊玉筋頭。

東は比す青芻の色に、圓は齊し玉筋の頭に。

衰年關鬲冷。味暖併無憂。

衰年關鬲冷なり、味暖併せて憂無し。

【字解】【一】隱者、隱居の人、阮叻をさす。【二】畦蔬、はたけのやさい。【三】舍、叻が屋舎。【四】盈筐、かごいっぱい。【五】承、うけてささげる。【六】露薤、つゆをおびた「にら」。【七】致書、作者から叻のかたへ手紙をやる。【八】東比一句、詩意

從人覓小胡孫許寄 秋日阮隱居致蓮三十束

に生舞一東、其人如玉とみゆ。芻はほしたる草、青芻は刈りたての草をいふ。【二】「にら」の根のまろきこと。【三】玉節玉にてつくりし「はし」。【二】衰年 老衰の年。【三】關兩 關は關節、兩は關の假借字ならん、關は胸膈、心臓と脾臟の間をいふ。【三】味暖 あぢはひとあたかさと、「にら」はその性、人の體温をますものなりといふ。

【題義】秋の日に隱居の士阮昉といふ者が三十束の薤をよこしてくれたについておれいをいひやりし詩なり。阮昉は秦州の人なり。

【詩意】隱居の阮昉は柴のそばそのうちにひつこんでゐるが、そのいへのめぐりにははたけの手づくりの野菜が秋の色を呈してゐる。自分はいま露ながらの薤を盛つたかごをもらつて之を手にささげることができた。これは自分が手紙を彼にやつて求めたわけではなく彼自身が親切にもよこしてくれたのである。「にら」の東はかりたての青草の色にもくらぶべく生々しいし、にらの根のまんなさは白玉の箸の頭とおなじ様である。自分は老衰の年にあたつて關節だの胸膈だのが冷えるのだが、このにらがあれば食味のうへも保温のうへもともに心配が無い。

秦州見勅目薛三璩據授司議郎畢四曜除監察與二子有故遠喜遷官兼述索居凡三十韻

秦州にて勅目を見るに、薛三璩據は據に、司議郎を授けられ、畢四曜は監察に

除せらる。二子と故あり、遠く遷官を喜び、兼ねて索居を述ぶ。凡そ三十韻なり

大雅何寥瀟、斯人尙典型。
交期余潦倒、材力爾精靈。
二子聲同日、諸生困一經。
文章開突奧、遷擢潤朝廷。
舊好何由展、新詩更憶聽。
別來頭併白、相見眼終青。
伊昔貧皆甚、同憂歲不寧。
栖遑分半菽、浩蕩逐流萍。
俗態猶猜忌、妖氛忽杳冥。
獨慚投漢閣、俱議哭秦庭。
還蜀祗無補、囚梁亦固局。

秦州見勅目薛三璩授司議郎

大雅何ぞ寥瀟なる、斯の人尙典型。
交期余潦倒、材力爾精靈。
二子、同日に聲あり、諸生、一經に困す。
文章、突奥を開く、遷擢、朝廷より潤さる。
舊好何に由りてか展べむ、新詩更に聽かむことを憶ふ。
別來頭併せて白し、相見ば眼終に青ならむ。
伊れ昔貧皆同じ、同じく憂ふ歳の寧からざるを。
栖遑、半菽を分つ、浩蕩、流萍を逐ふ。
俗態猶猜忌、妖氛忽ち杳冥。
獨り慚づ漢閣より投するを、俱に議す秦庭に哭するを。
蜀に還る祇補ひ無く、梁に囚はる亦固より局さる。

華夷相混合。宇宙一羶腥。
 帝力收三統。天威總四溟。
 舊都俄望幸。清廟肅惟馨。
 雜種雖高壘。長驅甚建瓴。
 焚香淑景殿。漲水望雲亭。
 法駕初還日。羣公若會星。
 宮臣仍點染。柱史正零丁。
 官忝趨棲鳳。朝回歎聚螢。
 喚人看駭裏。不嫁惜娉婷。
 掘獄知埋劍。提刀見發硎。
 侏儒應共飽。漁父忌偏醒。
 旅泊窮清渭。長吟望濁溼。
 羽書還似急。烽火未全停。

華夷、相混合す、宇宙、一に羶腥なり。
 帝力、三統を收め、天威、四溟を總ぶ。
 舊都俄に幸を望む、清廟、惟馨を肅しむ。
 雜種、壘を高くすと雖も、長驅、瓴を建つるよりも甚し。
 香を焚く淑景殿、水を漲らす望雲亭。
 法駕初めて還る日、羣公、會星の若し。
 宮臣仍點染す、柱史正に零丁たり。
 官は忝うす棲鳳に趨するを、朝より回りて聚螢を歎す。
 人を喚びて駭裏を看せしむ、嫁せざるに娉婷を惜む。
 獄を掘りて埋劍を知り、刀を提げて發硎を見る。
 侏儒應に共に飽くなるべし、漁父、偏醒を忌む。
 旅泊、清渭を窮む、長吟、濁溼を望む。
 羽書還急なるに似たり。烽火未だ全く停らず。

師老資殘寇。戎生及近坰。
 忠臣詞憤激。烈士涕飄零。
 上將盈邊鄙。元勳溢鼎銘。
 仰思調玉燭。誰定握青萍。
 隴俗輕鸚鵡。原情類鵲鶴。
 秋風動關塞。高臥想儀形。

師老いて殘寇に資す、戎生じて近坰に及ぶ。
 忠臣、詞憤激、烈士、涕飄零。
 上將、邊鄙に盈つ、元勳、鼎銘に溢る。
 仰いで思ふ玉燭調はむことを、誰か定めて青萍を握らむ。
 隴俗、鸚鵡を輕んず、原情、鵲鶴に類す。
 秋風、關塞に動く、高臥、儀形を想ふ。

【字解】 勅日 勅命による任官の目次。 薛三 薛據は作者の友、上卷(一〇〇頁)を見よ。 司議郎 東宮の官屬にして侍從規諫し、啓奏を駁正し、東宮の記注を録することを掌る。 畢四 畢曜は作者の友、上卷(五五九頁、五六三頁)を見よ。 監察 監察御史なり、百僚を分察し、州縣を巡按することを掌る。 二子 薛據・畢曜。 七 故、ふるき交り。 八 選官 官職なうつされしこと。 九 素居 朋友とはなれさびしくくらしなること。 一〇 大雅 文章雅正の道。 一一 夢 夢寐をいふ。 一二 斯人 薛舉をいふ。 一三 典型 てほんとするべきかた。 詩經に雖無老成人、尙有典型とみゆ。 一四 交期 交際契合のこと。 一五 激倒 おちぶれる貌。 一六 材力 人物力量。 一七 爾 薛舉二人。 一八 精靈 人力以上のものあるをいふ。 一九 聲同日 聲は世間に名聲あること、このたびの任官をいふ。 二〇 諸生 仕官せざる多くの學者ども、暗に自己をいふ。 二一 困一 ひとつの經典を修學しつつそれがために困窮してなる。 二二 突與 室の西南隅を突といひ、室の東南隅を突といふ、こゝは文章の奥かき道をたとへいふ。 二三 憑欄 うつしぬきんでられる。 二四 調朝廷 朝廷の恩澤にうるほさるるをいふ。 二五 舊好 これまでのなかのよき。 二六 併白 彼も我もともに白し。 二七 眼終青 眼青は魏の阮籍が

故事、籍は佳客を見れば青眼(くろめ)をなし、俗客を見れば白眼(にらみめ)をなしたりといふ。【二〇】昔・彼我をこめていふ。【二〇】同憂・同とは彼我をこめていふ。【二〇】歳不寧・安らかなる歳とては無し。【二一】栖遯・栖遯遯の略、せはしき貌。【二二】分牛菽・分とはわけてくらふこと、牛菽とは野菜に半分菽(まめ)をまぜること、貧しくして食物に乏しき故なり。【二三】清濁・とりとめなき貌。【三四】逐流萍・萍はうきくさ、漂泊生活をいふ。【三五】俗態・世俗の人情のさま。【三六】猜忌・それみいむ、これは李林甫が賢人を退くるをさすといへり。【三七】妖氛・不吉の悪氣、安祿山の兵亂をさす。【三八】杳冥・とほくくらし。【三九】獨慚・作者自らはづる。【四〇】投漢關・漢の揚雄が故事、雄は賢豊といふ者の連累にて罪せられんとす、偶ま書を天祿閣の上に投ず、獄吏の至るを見て關上より身を投じほとんど死せんとす、これは作者賊軍の中に陥りしことをさしていふ。【四一】俱議・薛・畢等とともに相談する。【四二】哭秦庭・吳の軍が楚の都の郢に攻めこみしとき楚の忠臣に申包胥といふ者あり、秦の國にゆきて援兵を乞ひ七日のあひだ哭して遂にその援を得たり、これは或は援兵を回紇に求むるをさすとし、或は兵を諸節度使より徵すことをさすとし、孰れにても通じうべし。【四三】還蜀無補・作者自己につきていふ、還蜀は漢の司馬相如が故事、相如は蜀の人、志を立てて郷を出て富貴を得て還る、これ蓋し作者拾遺の官を授けられて羌村に歸りし當時の事をさしていへり、無補とは何等朝廷の事に補益なかりしをいふ。【四四】因梁亦因周・因梁は漢の鄧陽が故事、陽は梁の孝王の爲めに獄に下され、獄中より上書す、此句薛・畢の二人がかつて賊軍のため洛陽に拘禁されしことを指すものならん、事實は不明なり。【四五】局・戸のくわんのきなり、戸をしめてそとへださぬ様にする。【四六】華夷・中土の人とえびす。【四七】一難難・專一になまくさし。【四八】帝力・肅宗皇帝の力。【四九】三統・天地人の三統、周・殷・夏の三層をいふ、古來曆數は天子の掌る所とせらる。【五〇】天威・天子の威光。【五一】四溟・四海。【五二】舊都・長安。【五三】望幸・行幸をのぞむ、これは乾元元年十月に肅宗長安にかへりしことをさす。【五四】清廟・唐の祖先の廟をさす。【五五】肅・嚴肅にすること。【五六】惟馨・祭供をいふ、書經に黍稷非馨、明德惟馨とみゆ、祭に供ふる「きび」「あは」よりも、その祭りをする人の明德がかんばしといふなり。【五七】雜種・安慶緒・史思明等をいふ。【五八】高壘・とりてを高くきづいてまもる。【五九】長驅・官軍がながみちをかけること。【六〇】其建瓴・漢書「漢書」の高帝紀に高き地形に居てひくき諸侯の地にもか

つて兵を下すことをたとへて若居・高屋之上・建瓴水といへり、瓴水とは屋上の瓦溝の水をいふ、之を建つれば水は急流をなして下におつべし。【六一】焚香・天子を迎ふる用意なり。【六二】椒殿殿・長安の西内(西の御所)安仁殿の後(北)に椒殿あり、院の西に椒殿ありと。【六三】漲水・池水のみなざる様にする。一説に漲は漚の誤字かといへり、漚水ならば水をそそぎてほこりをしづめることにて天子を迎ふる用意をなすなり。【六四】望雲亭・上卷(九三頁)にみゆ、この亭も西内にありといふ。【六五】法駕・法式による天子の車駕。【六六】羣公・すぐれし地位の諸官。【六七】會星・あつまれるほし、多きないふ。【六八】宮臣・これは今の東宮の官屬たる司議郎薛據を現官によりてさす、還駕の當時宮臣たるをいふにあらず。【六九】仍點染・點染とは賊塵にけがれしとみなされしをいふ、「因梁」の句と同事實をさす。【七〇】柱史・柱下史の略、御史の官をいひ、畢曜をさす、これも現官によりて畢曜をさすものにて還駕の當時御史たりしをいふにはあらず、誤解する勿れ。【七一】零丁・おちぶれるさま。【七二】官委一句・作者自己をいふ、應は還走すること、棲鳳は關の名、合元殿の南に龍尾道をはさんで左右に棲鳳閣・翔鸞閣あり、これは作者拾遺の官たりしことをいふ。【七三】朝回一句・薛・畢二子について歎するなり、朝回は作者朝廷より退きかへること、衆發は管の車馬家貧しく燈火なきゆゑ夏は螢をあつめてそのあかりにより書を読みたりとの事に本づく、薛・畢重く用ひられずなほ不遇の地にあるをいふ。【七四】喚人・他の人人をよびおこす。【七五】揮麩・日に千里をゆく神馬、薛・畢をたとへいふ。【七六】不嫁・よめいりせぬ。【七七】娉婷・女子のうつくしき貌、薛・畢を美人にたとへ、美しくありながらよめいり口なきを惜む。【七八】無獄二句・此の二句現在はじめて二子任官されて材力あらはれしことをいふ、獨獄埋劍は管の雷煥が故事、吳の未だ亡びざりしときつれに雲氣ありて牛斗の間に見ゆ、雷華、これを雷煥(孔章)に問ふ、煥いふ、寶物の精、豫章の豐城(縣の名)にありと、遂に煥を以て豐城の令となす、煥縣に至り獄を刺り二劍を得たり、その夕、牛斗の氣復た見えす、煥乃ち其一を留め、他の一を張華に進む。後ち華書に遇ふ、此の劍飛びて襄城の水の中に入る、煥死なんとするや其の子を戒めつれに劍を以て自ら隨へしむ、後ち其の子建安の從事となりて凌瀾を經たるに、劍忽ち腰間より躍り出づ、二龍の相隨つて逝くを見るといふ、二子のあらはるること獄中の埋劍のほりいだされしが如し。【七九】提刀見發明・「莊子」(養生主)に庖丁が十九年の間に數千の牛を解くにその刀刃若し新發・於礪とあり、礪は磨石なり、提刀の二字も同篇にみゆ、二子をとぎたての刀にたと

【六〇】 侏儒共飽 二子の身のうへを想像していふ、「漢書」東方朔傳に侏儒飽欲死、匡衡飢欲死とみゆ、君主の玩弄物たる侏儒(一寸法師)は食物にたべあきて死なんとするに自己は飢えて死なんとすといふなり、此句二子にいふ、二子用ひらると雖もわづかに侏儒の腹と共に飽食するならん。【六一】 漁父忌偏醒 此句自己にいふ、漁父の事は屈原の「漁父辭」に本づく、屈原、衆人皆醉而獨醒といへるに漁父は何ぞそのかすなくらひそのしるをすらすらざるといへり、偏醒は獨醒なり、作者自己直諫して容れられざるを偏醒といへり。【六二】 旅泊二句 自己にいふ。【六三】 窮清渭 渭水の源をさほむ、秦州にあるをいふ。【六四】 望濁渾 渾水にこりて長安に向つて流る、これ長安の方をのぞむをいふ。【六五】 羽書 危急を報じ兵を徵すための檄文、長さ一尺二寸の木簡に鳥の羽を附す。【六六】 師老 師は官軍、老とは駐屯日久しきをいふ。【六七】 資殘寇 資とは相手にもとてを與へ力をそへるをいふ、殘寇は賊軍ののこりをいふ。【六八】 戎生 いくさごとおこる。【六九】 近垠 都の近郊をいふ。【七〇】 上將 將軍の上級なるもの。【七一】 邊鄙 かなへにかたよりし地方。【七二】 元勳 大なるいさをし。【七三】 溢 あふれる、ありあまるほど書きしるされる。【七四】 鼎銘 かなへにほりつける銘文。【七五】 調玉燭 「爾雅」に四時調、謂之玉燭とみゆ、陰陽の調和して氣候宜しきを得るをいふ。【七六】 握青萍 青萍は劍の名、これ必ずしも寶物の劍をささず、材能の利器をたとへていふ。【七七】 離俗 離西地方の習俗、秦州をさすなり。【七八】 騷騷 騷騷とは騷騷の賦を作る人才をさす、魏の關雎といふもの騷騷賦を作れり、自己を比す。【七九】 原情類鶴鶴 詩經(常棣篇)に鶴鶴在野、兄弟急難とみゆ、せきれいは水鳥なるに原野にありつれの居どころを失へば飛鳴してその同じたぐひを求む、その如く人その兄弟に對しては急難の場合には力をだして相授けあふ、原情とは在原の情をいふ、此句、作者の二子に於けるその情兄弟に於けるがごときものあるをいふ、但し彼よりたすけを求めんと欲するをいふなり。【八〇】 動 吹きいだしたるをいふ。【八一】 高臥 枕をたかくしてふす。【八二】 偵形 二子のすがたかたち。

【題義】 作者秦州にて任官の目次を見たるに、薛據は司議郎を授けられ、畢曜は監察御史に除せられしことを知れり。しかるにこの二人は作者と舊交あるものなるを以て遠方ながら彼等が轉任せしを喜び、また兼ねて自己のさびしき生活をなしをすることをのべ、つひに凡そ三十韻六十句のこの篇をなしたり。

【詩意】 文章の正道はどうしてかくもさびしくなつたものか、それでもまだ吾が薛・畢二子の如きものあるために古來の法則とすべき型が存在してゐるといふべきものだ。諸君と交際はあるとはいへ自分はいまおちぶれてゐる、而して諸君はその材力に於て人力以上のものをもつてをられる。だから自分如きは諸生として一經に困窮してをるが、二子は同日に除任せられて聲名がなりひびく。二子は文章に於ては奥そこを開き、朝廷の恩澤にうるほうて他人よりもぬきんでて官を遷された。むかしながらのよしみを何に由つてのべることができようか、どうにかしてもつと諸君の近作でもあるなら聴きたいとおもふのだ。別れてからお互に頭は白くなつたが、面會がかなふなら以前にははらす青眼を以て相對することであらう。昔はお互に非常に貧乏であり、天下の安らかな歳のないのをともども心配した。さうしてせはしく奔走しながら豆の半分まざつた食物をわけてくらひ、とりとめもなく浮草のまにまに漂泊生活をした。そのうち世俗人情の常態として奸人にはそねみ忌まれ、兵亂の惡氣が忽ちはるかにとほく起る様になつた。自分は漢の揚雄が閣上から身を投げて生命をたすからうとした様に賊軍中を逃げまはつたことをはづかしくおもふが、どうにかして官軍のために援兵を得ようとしてもろともに相談して楚の申包胥が秦庭に哭した様なことをしようとした。自分は司馬相如が官を得て蜀にかへつた様に故郷にもどつたが朝廷の事に對しては何等の補益とてはなく、諸君も漢の鄒陽が梁

に囚はれた様に賊軍のためにかたく一室にとちこめられた。かかる際に本土人とえびすどもはたがひにまじりあひ、天地の間全くなまなくさ味のみとなつてしまつた。このときわが肅宗皇帝は三統の歴數を手中にお收めになり、御威光は四海をおすべになることになり、長安の舊都では俄に行幸をおまちし、宗廟には祭祀のお供へ物を嚴肅にせられ、混血の夷種どもがいくらとりでを高くして防禦しても、官軍が長驅して攻めくだす勢は屋根のうへのとひの水をまつすぐにおとすよりもまだひどく、都の淑景殿では香をたき、望雲亭では池水をみなぎらせて還幸をお迎へする準備をした。かくの如くして正式の御行列がはじめて都へおかへりになつたときは、もろもろの高官たちはあだかもあつまれる星のやうに多くあつた。そのうちで今の東宮の臣たる薛君は嘗て賊軍にとらはれてその垢に染められ汚されてゐるものとみなされて榮達せず、今の御史たる畢君もそのときはちやうどおちぶれてをつた。自分はそのとき官は拾遺を忝くして棲鳳閣に趨走することができたが、朝廷からもどつていつも諸君が書生の頃の様に螢を聚めて本を讀んでゐる如き困窮な境遇について歎息した。だから他人を喚起して千里の神馬とも稱すべき諸君を看せしめようとし、また諸君が娉婷たる美貌のもちぬしでありながら他へ嫁いらすにゐることを惜しくおもつてゐた。今や諸君ははじめてとりたてて官に任せられたから、あだかもかの豊城の獄を掘つて埋められてゐた劍が知らるるに至つたごとく、また刀を提げて見ればそれはといしからみがきたてのところをとりだしたかのごときものがあるのであ

る。しかし諸君としてはまだ用ひられ方が十分ではない、定めし諸君は侏儒の徒とともに飽食してゐるぐらゐのことであらう。自分は依然として獨り醒めてゐるので、昔の屈原の如く漁父から忌まれてゐる。さうして自分はたびちに漂泊しつづつ清き涓水の源までもきはめてここの秦州へながれて來、長吟しながら諸君のゐる濁れる涇水のある長安の方をながめやる。今や兵亂のため徵兵の檄文は急である様であり、危難を報ずるのろし火もまだすつかりやむにはいたらぬ。官軍は駐屯久しきにわたつて力がよわり賊の殘部に力をそへてやる結果となり、都の近郊にまでいくさごとがおこつてゐる。それで忠臣は憤激の辭をいだし、烈士は慷慨の涙をおとす。邊鄙の地には上將がたくさんをり、その大功は鼎の銘文にあふれるほどほめたたへられてゐるにはゐるが、自分は天を仰いでどうか四時陰陽調和して天下泰平である様にとかんがへてゐる、たれが材能の利器をにぎつて亂をさめてくれるのであらうか。自分のゐる隴西の習俗では鸚鵡の賦を作る彌衡の才あるものでもそれを輕蔑してゐる、古人は鶴鶴は原に在るときたがひに難に赴いてたすけるといふてゐるが、我我お互の情はそれに類してゐるとおもふ。このとりでにも秋風が動きそめた、それで自分は高臥しつづはるかに諸君のすがたを想望してゐるのである。』

寄彭州高三十五使君適虢州岑二十七長史參三十韻

【原注】時患瘧病。彭州の高三十五使君適・虢州の岑二十七長史參に寄す。三十韻

【原注】時に瘧病を患ふ。

故人何寂寞。今我獨淒涼。
 老去才雖盡。秋來興甚長。
 物情尤可見。詞客未能忘。
 海內知名士。雲端各異方。
 高岑殊緩步。沈鮑得同行。
 意愜關飛動。篇終接混茫。
 舉天富駱。近代惜盧王。
 似爾官仍貴。前賢命可傷。
 諸侯非棄擲。半刺已翱翔。

故人、何ぞ寂寞たる、今我、獨り淒涼。
 老い去つて才盡くと雖も、秋來、興甚だ長し。
 物情、尤も見る可し、詞客、未だ忘るる能はず。
 海内、知名の士、雲端、各異方。
 高岑、殊に緩歩す、沈鮑、同行を得。
 意愜ひて飛動に關し、篇終つて混茫たるに接す。
 舉天富駱を悲む、近代、盧王を惜む。
 爾が似きは官仍貴し、前賢、命、傷む可し。
 諸侯は棄擲せらるるに非ず、半刺、已に翱翔す。

詩好幾時見。書成無信將。
 男兒行處是。客子鬪身強。
 羈旅推賢聖。沈綿抵咎殃。
 三年猶瘧疾。一鬼不銷亡。
 隔日搜脂髓。增寒抱雪霜。
 徒然潛隙地。有視屢鮮粧。
 何太龍鍾極。於今出處妨。
 無錢居帝里。盡室在邊疆。
 劉表雖遺恨。龐公至死藏。
 心微傍魚鳥。肉瘦怯豺狼。
 隴草蕭蕭白。洮雲片片黃。
 彭門劍閣外。虢略鼎湖旁。
 荆玉簪頭冷。巴綫染翰光。

詩好きも幾時か見む、書成つて信の將あるなし。
 男兒、行く處是なり、客子、身強を鬪はす。
 羈旅、賢聖を推す、沈綿、咎殃に抵る。
 三年、猶瘧疾、一鬼、銷亡せず。
 隔日、脂髓を搜る、増寒、雪霜を抱く。
 徒然、隙地に潜む、有視、屢鮮粧。
 何ぞ太だ龍鍾極まる、今に於て出處妨げらる。
 無の帝里に居るべき無く、室を盡くして邊疆に在り。
 劉表、恨を遺すと雖も、龐公、死に至るも藏す。
 心微にして魚鳥に傍ひ、肉瘦せて豺狼を怯る。
 隴草、蕭蕭として白く、洮雲、片片黄なり。
 彭門、劍閣の外、虢略、鼎湖の旁。
 荆玉、頭に簪して冷に、巴綫、翰を染めて光る。

寄彭州高三十五使君適虢州岑二十七長史參三十韻

烏麻蒸續曬。丹橘露應嘗。烏麻、蒸して曬を續ぎ、丹橘、露に應に嘗むべし。
 豈異神仙宅。俱兼山水鄉。豈に神仙の宅に異ならむや、俱に兼ぬ山水の郷。
 竹齋燒藥竈。花嶼讀書床。竹齋、燒藥の竈、花嶼、讀書の床。
 更得清新否。遙知對屬忙。更に清新を得るや否や、遙に知る對屬の忙しきを。
 舊官寧改漢。淳俗本歸唐。舊官寧ぞ漢を改めむや、淳俗本唐に歸す。
 濟世宜公等。安貧亦士常。世を濟ふは公等に宜し、貧に安んずる亦士の常なり。
 蚩尤終戮辱。胡羯漫猖狂。蚩尤、終に戮辱せられむ、胡羯、漫に猖狂なり。
 會待妖氛靜。論文暫裹糧。會す妖氛の靜なるを待ち、文を論ずるに暫く糧を裹まむ。

【字解】 〔一〕 彭州、四川省の成都府彭縣。 〔二〕 高三十五使君題、使君は刺史の尊稱、高適は作者の親友已に屢、見ゆ、適は蓋し乾元元年五月に彭州の刺史となる。 〔三〕 魏州、魏州は河南省陳州の靈寶縣なり。 〔四〕 岑二十七長史參、岑參は作者の親友、已に見ゆ、參は乾元二年四月に魏州の長史となる。 〔五〕 故人、舊友。 〔六〕 何寂寞、寂寞は我と吾信の稀なるをいふ、仇注に何嘗寂寞乎といひ反語と解し、官城の寂寞ならざる義となせるは余之を取らず。 〔七〕 淒涼、ものがなしさま。 〔八〕 才、文才をいふ。 〔九〕 物情、人情勢力あるものにつき勢力なきものを去る輕薄のさまをいふ。 〔一〇〕 詞客、文辭をよくする人ないふ、高適岑參をさす。 〔一一〕 知名士、廣く文學の士をさす。 〔一二〕 雲騎、天のはしをいふ。 〔一三〕 異方、方位をことにする。 〔一四〕 緩步、文場に於てゆつたりとあゆむ。 〔一五〕 沈鮪、宋の鮪照、梁の沈約、並に著名の文學者なり。 〔一六〕 同行、行は行列。 〔一七〕 意慙、意慙とは作

者その意のままになりしときをいふ、飛動は文章の勢をいふ、關とはそれにあづかるをいふ。 〔一八〕 篇終、一篇できをばはること。 〔一九〕 接混茫、接は接續すること、混茫は元氣のさま。 〔二〇〕 舉天、天下みな。 〔二一〕 富贍、富は富饒、武功の人、進士に擧げらる、その文章、經術に本く、人争うて之を慕ふ、賈賈賈賈王、義烏の人、唐初四傑の一人なり。 〔二二〕 盧王、盧は盧照那、范陽の人、王は王勃、龍門の人、並に四傑中の人、富贍盧王みな初唐時代の名家。 〔二三〕 似爾、似は如の義、爾は高岑をさす。 〔二四〕 前賢、富贍等四人。 〔二五〕 諸侯、刺史の官をさす、刺史は州郡の長官にしてむかしの諸侯にあたる、これは高適についていふ。 〔二六〕 棄擲、天子からうちすておかれる。 〔二七〕 半刺、長史の官をさす、刺史の屬官には別駕、長史、司馬、あり、通じて之を上佐といふ、長史の任は刺史の半に居るといふ處より之を半刺といふ、これは岑參についていふ。 〔二八〕 朝翔、鳥の空に飛ぶごとく出世したことをいふ。 〔二九〕 詩、高岑の詩をいふ。 〔三〇〕 書、高岑が作者へ寄せる手紙をいふ。 〔三一〕 信將、信は信使にて手紙を持參する飛脚をいふ、將はもつてくることをいふ。 〔三二〕 男兒四句、この四句は連讀して見るべし、男兒の句は擲旅の句に接し、客子の句は沈鮪の句に接す。 〔三三〕 行處是、此語は不完全句なり、蓋し「是」の字の下に「擲旅」の如き語あるものと假定して見るべし、男兒たるもの生れおつるより四方の志を抱き、その行くところ皆是れ旅途ならざるは無きの意。 〔三四〕 客子、たびびと、旅途に在る者をさす。 〔三五〕 圓身強、身體の強健を説ふべきものなるをいふ。 〔三六〕 羈旅、たびに在ること。 〔三七〕 賢聖、孔子墨子の徒をさす。 〔三八〕 沈鮪、鮪にしづむこと。 〔三九〕 抵舛殊、抵は至なり、舛殊は「とが」、「わざはひ」、……は病をさす。 〔四〇〕 瘵疾、おこり。 〔四一〕 一鬼、瘵鬼をいふ。 〔四二〕 銷亡、きえてなくなる。 〔四三〕 隔日、一日おき。 〔四四〕 搜脂髓、これは鬼が人體のあぶら、すぬ、なまぐるをいふ。 〔四五〕 增寒、さむけなます。 〔四六〕 抱雪霜、これは人がかく感ずるをいふ。 〔四七〕 徒然、いたづらに。 〔四八〕 潛隙地、瘵を避くる方法なりといへり、だれも居らぬあき地につそりかくれる。 〔四九〕 有顧、面目といふ代りにこの二字を古典より切り取りて用ふ。詩經に爲鬼爲域、有顧面目とみゆ、顧は面目のみにくさま、これは作者自己の面目のさまをいふ、或は云ふ、顧は慙づるさまにて上の徒然と對し、鮮粧するも効なきゆみ之をばづるをいふと。 〔五〇〕 鮮粧、あざやかによそほふ、これ亦瘵を避くる方法にして顔面に畫きて、その容貌を易ふといへり。 〔五一〕 龍鍾、おちぶれる、しほれる、さまなり。 〔五二〕 田處妨、出仕、退處、ともに

さしつかへる。【五三】無錢居帝里。錢の下に「可」の字をはぶきていへり、帝里は都、長安をいふ。【五四】盡室一家全體。【五五】連鐘。くにさがへ、秦州をさす。【五六】劉表、庸公。七卷遺興五首の第二首を見よ。【五七】心微。微は衰微をいふ。【五八】傍ちかく居り親しむをいふ。【五九】豺狼。實物と盜賊のたとへと兼用す。【六〇】隨草。隨地のくさ、秦州の草をいふ。【六一】洗雲。洗は洗水、秦州と近し。【六二】彭門。彭縣の西北三十里にある山の名、この句高についていふ。【六三】劍閣。四川省保寧府劍州の北にある山の名。【六四】魏略。左傳に東盡魏略と見え、注に從河内而東盡魏界也とあり、これ魏略を地名とせざるなり、後漢郡國志に、陸渾西有魏略地とあるは地名とせるなり、杜詩之に本くか。陸渾は嵩縣の東北に在れば、地名の魏略にては地理にあはず作者はただ魏の地の意義として用ひしならん、再案、李兆洛は魏略の地は、靈寶縣南四十里にありとせり。此句は岑についていふ。【六五】那湖。河南省陝州の閿鄉縣にある黃帝鑄鼎の處をいふ、閿鄉縣南三十五里に荆山あり、「史記」封禪書に黃帝採首山之銅、鑄鼎於荆山下、故名其處曰那湖とあるはその處なりとつたふ。古代或は山下に湖ありしならんか。これにより閿鄉縣は漢以來湖縣湖城縣等と稱せられしことあり。【六六】荆玉。資字記によれば荆山には美玉をいだすといへり、冠の簪のかざりに用ふと見えたり、この句岑をいふ。【六七】巴陵。巴は國名、蜀の東南、今の重慶府は周代の巴國なり、蜀の地方にてつくる紙を巴陵といへり、此句は高をいふ。【六八】輪。ふて。【六九】鳥。くろいこま、魏州についていふ。【七〇】續。しばしばさらすこと、ごまはたびたびむしてはさらすがよしといへり。【七一】丹。あかいかん、此句は高の地についていふ。【七二】露。つゆの降るときをいふ。【七三】豈異。以下の六句は高岑を併せていふ。【七四】神仙宅。宅は住む所をいふ。【七五】俱。高岑の居る兩地をいふ。【七六】山水鄉。佳山水のある地。【七七】竹簾。竹林にある書齋。【七八】燒藥爐。丹藥をにる火をたくかまど。【七九】花。花のさきたる池中の小じま。【八〇】讀書床。木をよむれたい。【八一】清新。詩題の清らかにあたらしきこと。【八二】對。對は字句を相對してならべつくること、屬は文字をつづりあはすこと、唐人の詩、對句を重んずるによりかくいふ。【八三】舊官。もとの官、刺史をさす、漢の武帝の元封五年に郡の刺史十三人を置く、これ刺史の起原なり、此句は高をさす。【八四】淳俗本歸唐。此句は岑をさす、淳俗は淳良の風俗、唐は帝堯及び唐叔虞の唐をいふ、唐は今山西省平陽府翼城縣西にありし地、周の成王、叔虞を其地に封す、後ち曲沃に遷りて晉と稱す、詩經には晉の詩のことを唐風と稱し、唐(即ち晉)には堯の遺風ありといへり。魏州はむかし晉の領地なりしを以て、まかのぼりて之を唐といへり。【八五】歸。そこへおちつくといふこと。【八六】公等。高岑をさす。【八七】世尤。黃帝の時のわるもの、今以て賊軍に比す。【八八】胡羯。夷種、安祿山・史思明等の黨をいふ。【八九】猖狂。みだらなる貌。【九〇】會。俗語「必ず」【九一】妖氛。兵亂の惡氣。【九二】論文。文章を論評する。【九三】糞糧。食物をふくろにつつむ、旅行の用意なり。

【題義】彭州の刺史たる高適と、魏州の長史たる岑參とに寄せた詩。作者はこの時瘧疾にかかりゐたり。乾元二年秋の作。

【詩意】わが舊友はなせにさつぱりたよりをしてくれぬか。自分はいま獨りものがなしき思ひをしてをる。自分は年が老いかかつて文才は盡きてしまつたが、秋からかけて秋に對する興味はすゐぶんである。世間の人情の輕薄さはこの際尤もうかがはれるが、文辭を善くするものは今に忘れられぬ。今や海内の知名の人人は、雲の端に於てそれぞれ方位を異にしてゐる。そのうちで高適と岑參とは殊に文場にゆつたりとあゆみ、むかしの鮑照や沈約とも同列たることができる。その意のままに作りなしたときはその作品は飛動の勢をもち、一篇成就しをへたときはそれを見るときはそれを見るときは宇宙の元氣に接續してゐるかの看がある。近代滿天下のものは富嘉謨・駱賓王・盧照鄰・王勃についてその不遇を悲み惜んでをるが、彼等にくらべると諸君はやはりその官は貴いのである、彼等前代の賢人の運命はきのどくなものである。高君は刺史であるから諸侯の身分で決して天子からうちすてられてゐ

るわけではなく、岑君は長史であるから刺史の半役ともいふべくすでに羽翼をなして天がけりつつあるものといへる。諸君はさだめしよい詩があるであらうがいつそれが見られよう、諸君は手紙をかくてくれるのであらうがそれをもつて来てくれる使は無い。男兒たるものは到るところこれ旅路の身うへであるが、たび人としてはむかしから聖人賢人さへもをらるのである。また旅途に在るものは身體の強健を競はねばならぬものであるが、不幸にして自分はとがわざはひにぶつつかつて重き病にしづんでゐる。三年もたつのにまだ瘡疾であり、瘡の鬼がどうしてもきえてなくならぬ。その鬼めは一日おきに自分のからだのあぶらやすみをさぐりだしてなめでもする様であり、自分はさむけがましてがたがたふるへて雪か霜をだいてゐるかの感じがする。人のゐない處にかくれてゐると、なほるといふからやつてみるがむだである。また人のいふとほりこのみにくいかほにたびたび色彩をほどこしてもみるが効能はない。なんで自分はおちぶれの極點までなつたのであらう。今では出でて仕へることとならず、退いてじつとしてゐることもならぬ。都に生活してをられるほどの錢はなく、一家こぞつてかかるくにざかひへ來てゐるのである。劉表ともいふべき州の長官はのこりをしくおもふであらうが、龐徳公を以て任ずる自分は決して出でて仕へず死ぬまでも藏れてゐるつもりである。壯心すでに衰へたから魚鳥を友としてそれにちかづき、肉のやせたからだであるから豺狼の害を受けはせぬかとおびえてゐる。ここでは秋の草は蕭蕭として枯れて白く、雲の色は一ひら一ひら黄ばんだ色を

呈してきた。諸君のゐるところはどうであらうか。かんがへてみるに、高君の居る所の彭門は劍閣の外にあり、岑君の居る虢略（虢の地の義）は鼎湖のかたはらにある。岑君は頭上に簪するとき荆山の玉冷かなるべく、高君は筆を染むるとき蜀地の紙上光あることであらう。岑君の地では黒胡麻を蒸してたびたびさらしてたべられるだらう。高君の地ではあかいみかんが露のおりる節にうまく熟してそれをたべられることであらう。兩君の居るところは神仙の住む所とちがひはない、その地はともに佳山水の場所を兼ね有してゐる。竹林の書齋には丹藥を煮るかまどをすゑ、花さく小島には讀書の床をよこたへてをらるるであらう。以前にまして清新な詩を得られたかどうか。自分ははるかに諸君が對句をつくるに忙しいことだらうと想像してをる。高君は漢代以後改易なき刺史の官を辱くしてをられる。岑君は本來聖賢の居た唐國の官となつてをられる、淳良の俗は本來當然そこにおこるべきである。時世をすくふの一事は諸君にふさはしきことである、貧賤に安んじてをることは士たるものの常であつて自分はそれである。いま胡羯の夷種は漫にみだらなふるまひをしてゐるが、豈尤にも比すべき彼等は結局戮辱せらるるであらう。自分がかならず兵亂の惡氣が靜になるのを待つて、諸君と文辭を細論するために、しばらく食糧持參ででかけるであらう。

寄岳州賈司馬六丈巴州嚴八使君兩閣老五十韻

岳州の賈司馬六丈・巴州の嚴八使君・兩閣老に寄す。五十韻

衡岳啼猿裏。巴州鳥道邊。
 故人俱不利。謫宦兩悠然。
 開闢乾坤正。榮枯雨露偏。
 長沙才子遠。釣瀨客星懸。
 憶昨趨行殿。殷憂捧御筵。
 討胡愁李廣。奉使待張騫。
 無復雲臺仗。虛修水戰船。
 蒼茫城七十。流落劍三千。
 畫角吹秦晉。旄頭俯澗瀧。
 小儒輕董卓。有識笑苻堅。
 浪作禽填海。那將血射天。

衡岳は啼猿の裏、巴州は鳥道の邊。
 故人俱に利あらず、謫宦兩ながら悠然たり。
 開闢、乾坤正しく、榮枯、雨露偏なり。
 長沙、才子遠く、釣瀨、客星懸る。
 憶ふ昨、行殿に趨し、殷憂、御筵を捧げしを。
 討胡、李廣愁へ、奉使、張騫を待つ。
 復た雲臺の仗なし、虚しく修む水戰の船。
 蒼茫、城七十、流落、劍三千。
 畫角、秦晉に吹かる、旄頭、澗瀧に俯す。
 小儒、董卓を輕んず、有識、苻堅を笑ふ。
 浪りに禽の海を填するを作す、那ぞ血を將て天を射るや。

萬方思助順。一鼓氣無前。
 陰散陳倉北。晴曛太白巔。
 亂麻屍積衛。破竹勢臨燕。
 法駕還雙闕。王師下八川。
 此時霑奉引。佳氣拂周旋。
 貔虎開金甲。麒麟受玉鞭。
 侍臣諳入仗。廐馬解登仙。
 花動朱樓雪。城凝碧樹煙。
 衣冠心慘愴。故老淚潺湲。
 哭廟悲風急。朝正霽景鮮。
 月分梁漢米。春給水衡錢。
 內藥繁於纈。宮莎軟勝綿。
 恩榮同拜手。出入最隨肩。

萬方、助順を思ふ、一鼓、氣、前を無みす。
 陰は散す陳倉の北、晴は曛す太白の巔。
 亂麻、屍、衛に積み、破竹、勢、燕に臨む。
 法駕、雙闕に還り、王師、八川に下る。
 此時、奉引に霑ふ、佳氣、拂うて周旋す。
 貔虎、金甲開き、麒麟、玉鞭を受く。
 侍臣、入仗を諳んじ、廐馬、登仙を解す。
 花は動く朱樓の雪、城には凝る碧樹の煙。
 衣冠、心、慘愴、故老、涙、潺湲たり。
 哭廟、悲風急に、朝正、霽景鮮なり。
 月に分つ梁漢の米、春には給す水衡の錢。
 内藥は纈よりも繁く、宮莎は軟くして綿に勝れり。
 恩榮同じく拜手す、出入最も肩を隨ふ。

晚著華堂醉。寒重繡被眠。
 轡齊兼秉燭。書枉滿懷牋。
 每覺昇元輔。深期列大賢。
 秉鈞方咫尺。鍛翻再聯翩。
 禁掖朋從改。微班性命全。
 青蒲甘受戮。白髮竟誰憐。
 弟子貧原憲。諸生老伏虔。
 師資謙未達。鄉黨敬何先。
 舊好腸堪斷。新愁眼欲穿。
 翠乾危棧竹。紅膩小湖蓮。
 買筆論孤憤。嚴詩賦幾篇。
 定知深意苦。莫使衆人傳。
 貝錦無停織。朱絲有斷絃。

晩には著す華堂の醉、寒には繡被を重ねて眠る。
 轡齊しくして兼ねて燭を秉り、書は枉ぐ滿懷の牋。
 毎に覺ゆ元輔に昇らむことを、深く期す大賢に列せられ
 秉鈞方に咫尺、鍛翻再び聯翩たり。
 禁掖、朋從改まり、微班、性命全し。
 青蒲甘んじて戮を受く、白髮竟に誰か憐まむ。
 弟子、原憲貧しく、諸生、伏(服)虔老ゆ。
 師資、謙して未だ達せずとす、郷黨敬すること何ぞ先き
 舊好、腸、斷ゆるに堪へたり、新愁、眼、穿たれむと欲す。
 翠は乾く危棧の竹、紅は膩なり小湖の蓮。
 買筆、孤憤を論ず、嚴詩、賦すること幾篇ぞ。
 定めて知る深意の苦しめるを、衆人をして傳へしむるこ
 貝錦、停織無く、朱絲、斷絃あり。
 「と莫れ。」
 「むと。」

浦鷗防碎首。霜鶴不空拳。
 地僻昏炎瘴。山稠隘石泉。
 且將棋度日。應用酒爲年。
 典郡終微眇。治中實棄捐。
 安排求傲吏。比興展歸田。
 去去才難得。蒼蒼理又玄。
 古人稱逝矣。吾道卜終焉。
 隴外翻投跡。漁陽復控弦。
 笑爲妻子累。甘與歲時遷。
 親故行稀少。兵戈動接連。
 他鄉饒夢寐。失侶自迤邐。
 多病加淹泊。長吟阻靜便。
 如公盡雄俊。志在必騰鶩。

浦鷗、碎首を防ぐ、霜鶴、空拳あらず。
 地僻にして炎瘴昏く、山稠くして石泉隘し。
 且棋を將て日を度るならむ、應に酒を用ひて年を爲すな
 典郡、移に微眇なり、治中、實に棄捐せらる。
 安排、傲吏を求め、比興、歸田を展ぶ。
 去去、才、得難し、蒼蒼、理又玄なり。
 古人、逝矣を稱す、吾が道、終焉を卜す。
 隴外、翻つて跡を投ず、漁陽、復た弦を控く。
 笑ふ、妻子に累せらるるを爲すを、甘んじて歳時と遷る。
 親故行くゆく稀少なり、兵戈動もすれば接連す。
 他郷、夢寐饒し、侶を失して、自ら迤邐なり。
 多病、淹泊を加ふ、長吟、靜便を阻せらる。
 公が如きは、盡く雄俊なり、志、必ず騰鶩(鶩)するに
 「在らむ。」

【字解】(一) 岳州買馬六丈 岳州は今の湖南岳州府、買馬は買至なり、作者至が汝州にゆくを送る時あり、(卷六の五二九頁) 乾元二年三月九節度の邠相州に敗るるや至は汝州より襄鄆に奔れり、その罪によりて岳州の司馬に貶せられたり、六は排行、丈は年長者に對する敬稱、丈人の略語。(二) 巴州嚴八使君 巴州は四川の重慶府、嚴八使君は嚴武なり、八は排行、使君は刺史の敬稱、武は房琯が事に坐せられ乾元元年六月に巴州の刺史に貶せられたり。(三) 閬老 買は中書舍人、嚴は給事中、之を敬して稱す(上卷卷五、四五四頁をみよ)。(四) 衡岳 湖南省衡州府衡陽縣にある名山、名山をあげて買至の居る岳州を表す。(五) 啼猿 猿聲をいふ。(六) 巴州 嚴武の居る地をいふ。(七) 鳥道 鳥のかよふみち、山の高き處をさす、巴州は山地なればかくいふ。(八) 故人 舊友買嚴をさす。(九) 不利 身に利福なきこと。(一〇) 讀宜 つみせられて官途に仕へてなる。(一一) 爾 二人ともに。(一二) 然 然るかなる貌、我とは遠くへだたりてなるをいふ。(一三) 開關乾坤正 肅宗が天下を整頓されしことをいふ、開關はくらやみをひらくこと、正とは今まで賊亂ありて天地ゆがみまがれるなとのへてまつすぐになほすをいふ。(一四) 榮枯雨露偏 偏はかたよる、一方へ多くかかるをいふ、榮枯は人の身のうへの二面をいふ、寵をさまりてのち人によりて榮えるものあり、枯れてしほむものあり、榮ゆるは雨露を多くうくるに由り、枯るるは雨露をすこしくうくるに由る、買嚴の二人が官を貶せらるるは枯の側なり。(一五) 長沙才子遠 漢の買嚴が故事、買嚴は洛陽の才子と稱せられしが文帝に罪せられて遠く長沙へながされたり、今同姓の故事を借りて買至がことをいふ。(一六) 釣瀨客星懸 後漢の嚴光、字は子陵が故事、光は光武帝の友人にて一夜帝と共に臥し足を帝の腹に加ふ、太史、客星・帝座を犯すこと甚だ急なりと奏せりと、光は天上にては客星に當る人なり、光は帝に仕へず浙江嚴州府桐廬縣の富春山に隠れて釣を垂れたり、其の釣りし處を嚴瀨湖といふ、釣瀨は嚴瀨湖をさす、此句また同姓の故事を借りて嚴武がことをいふ。(一七) 憶昨 作者往年のこゝとを追憶す。(一八) 越行殿 越は朝廷に於ける歩容なり、すこしくあゆみをはやめ、またにあるく、行殿は天子の御旅の御所、これは肅宗の鳳翔の行在所をさしていふ。(一九) 股愛 さかんなるうれひ。(二〇) 捧御筵 むしろをささぐといふは拾遺の官となりおそば近く仕へしことをいふ。(二一) 討胡愁李廣 胡は安祿山の賊軍をさす、李廣は漢の武帝の時の名将、今借りて哥舒翰にあつ、愁とは輸賊のために敗れしを以てしがいへり。(二二) 奉使持張雲 張雲は漢の武帝の時使者となりて始て西域諸國との交通を開きし人、奉使と

は使命を奉するをいふ、此句は唐より回紇吐蕃へ使者をやりて授兵を求めしをいふ。(二三) 無復雲臺仗 雲臺は宮中の高き臺殿をさしていふ、仗は儀仗、儀式にあたりてたてならぶるははたの類、仗無しとは或は云ふ、行在所のことなれば昔日の盛なる仗なきをいふと、又或は云ふ、玄宗の用弁せしをいふと、今前説に従ふ。(二四) 虛修水戰船 漢の武帝雲南地方を伐たんとして其地に瀾池ありとき長安に昆明池をうがちて水戰を習はす、虚修とはむだに船の用意をなせしをいふ、此の句或は云ふ、長安に兵備をしながら賊軍に破られしをいふと、又或はいふ、修船は吐蕃にそなるなりと、今前説に従ふ。(二五) 蒼茫 茫漠たる貌、ひろく見さかひのつかぬさま。(二六) 城七十 戰國の時、燕が齊を攻めて七十餘城を取りしこと、借りて祿山が河北二十餘郡を陥れしことに充つ。(二七) 波落 ちりぢりになること。(二八) 劍三千 趙の文王、劍を喜び、劍客の來る者三千餘人ありしといふこと、莊子に見ゆ、借りて官軍の武士にあつ、或は云ふ、此句「越絕書」に見えたる吳王闔閭が故事を用ふ、闔閭虎邱に葬らる、扁諸の劍三千あり、波落は散落の義、三千の劍が散落すとは長安の陵墓が發掘され土中の劍が人間にいづるをいふなりと、これも一説なれども今從はず。(二九) 畫角 彩色したるつづえ、官軍のふきならすもの。(三〇) 秦晉 陝西省、山西省の地。(三一) 旋頭 星の名、また昂といふ、妖星にして兵亂の象ありといふ。(三二) 俯澗源 俯とは俯して下を照らすをいふ、澗源は洛陽附近にありて洛水にそそぐ二つの川の名、澗水は新安縣の南白石山より出で東南流して洛に入り、澗水は穀城縣の北山より出で東して偃師縣を過ぎて洛に入る。(三三) 小儲 作者自らいふ。(三四) 董卓 後漢末長安に入りて暴行をなせし者、卓のち呂布に殺さる。(三五) 有識 識見あるもの、作者暗に自ら比す。(三六) 苻堅 東晉の時長安地方に據りし夷種、堅はのちに姚萇に殺さる、董卓・苻堅は安祿山・史思明に比す。(三七) 浪作 みだりになす、作者謙遜してかくいふ。(三八) 禽嶺海 赤帝の女、東海に溺れて死す、化して鳥となる、精衛と名づく、この鳥西山の木石を取りて海なうづめんとす、事は「山海經」に見ゆ、蓋し鳥の意は海をうづむることによりて自己を溺らしたるものを絶滅せんとするなり、此句は作者賊軍を絶滅せんとを念を抱きしかもその實效なきをいふ。(三九) 那將血射天 那は「何ぞ」なり、とがむる言葉なり、將血は「血囊をもち」の義、むかし殷の天子に帝乙といふものあり、個人をつくりて天神といひ、之と博し天神に代りて之を爲す、天神勝たざれば革の囊に血を盛り仰いで之を射、之を天を射ると稱せしといふ、事は「史記」殷本紀に見ゆ、此句は賊軍が無法にも唐の天子に向て弓をひくこと

をあてていふ。【四〇】萬方 諸地方の人々。【四一】助順 順は義理にしたがふもの、即ち官軍をさす、賊軍は逆なり。【四二】一鼓氣無
 前「左傳」に夫戰勇氣也 一鼓作氣 とみゆ、一鼓とはひとたび進軍の太鼓をうちならすこと、氣は勇氣、無前は眼中に前敵を無視
 すること。【四三】陰散 陰は陰氣。【四四】陳倉北 陳倉は陝西鳳翔府寶雞縣の古名、陳倉の北とは鳳翔の地方をさす。【四五】晴暉
 太陽の晴れたる光りのにほふをいふ。【四六】太白 山の名、鳳翔府郿縣に屬す、武功縣の南にあたる、鳳翔近地の名山をあぐ。【四七】
 亂麻 多きさま。【四八】昆嶺 昆は賊軍のしかげれ、嶺は衛州、乾元元年郭子儀兵を引いて河をわたり、東して獲嘉に至り賊將安太
 清を破り、更に衛州を圍み、衛州に來投せる賊將安慶緒が軍七萬を破る。【四九】破竹勢 洗兵行（上卷卷六、六三一頁）を見よ、官軍
 の猛勢をいふ。【五〇】燕 嶽山の根據地范陽地方をさす、むかしの燕國の地なり。【五一】法駕 天子の正式のおのりもの、肅宗の長
 安への還幸は至德二載十二月にあり。【五二】雙闕 宮城正門の左右の小門。【五三】王師 官軍。【五四】下八川 下とは八川の流る
 る地方へ降りてきたことをいふ、行在所は鳳翔にありてその地形高し、故に「下る」といふ、八川は國中の八つの川、（上卷卷五、五〇
 六頁を見よ）。【五五】常 君のめぐみの露にうるほふ。【五六】奉引 前導して車を引くこと、作者拾遺として肅宗に扈從して長安にか
 へれり。【五七】佳氣 めでたき氣、帝王勃興の氣をいふ。【五八】拂 ちちらが佳氣を拂ふなり。【五九】周旋 立ちながら身體を一回
 轉せしむること、（體操の「まはれ右」のごとし）、朝廷に於ける動作の様子なり、或は云ふ、氣がめぐりて散ぜざるなりと、又、買敵
 とともに同仕回翔する義ともみらるべし、今並に取らず。【六〇】健虎 猛獸の名、護衛の武士をいふ、詩經に如虎如龍の句あり。
 【六一】開金甲 開は蓋し耀光のあらはれいづるをいふ、金はかたにて作りしよろひ、或は云ふ、開は解きはなつことにて此句は將士休
 息するをいふと。今從はず。【六二】麒麟 天子の御馬をいふ。【六三】受 むちをあてらるること。【六四】玉鞭 玉にてがざりしむ
 ち。【六五】侍臣 おそばの臣。【六六】騎入仗 騎はそらでおぼえてあること、入仗は儀仗の列内にはひること。【六七】駉馬 おうま
 やのうま。【六八】解登仙 舊注に黃帝が飛黃といふ馬に乗じて仙となりさりしとの「淮南子」にある話を引き、玄宗の舞馬が回復され
 しことととけり、（玄宗百匹の馬に舞を教へ杯をくはへて舞をたてまつらしめたり、その馬嶽山の軍に奪はれ洛陽にもちゆかれしが二
 京をとりもどせし後また復舊せり、）しからは「登りて仙たらしむることを解す」と訓すべく、また登仙二字は天子の事に屬す、これ上

句八仗二字が直に侍臣の事に屬すると異なり、鄙見は登仙二字は駉馬に直屬するものとおもふ、しからは黃帝・舞馬等のことをいふ
 に非ずして、今まで他所にありし馬がこのたび宮城に入りこみ來ることそのことをさして登仙といへるものと考ふ、宮城を人間に對
 して天上と看做していふなり。【六八】花動 花枝のゆるるさまならん。【六九】朱樓雪 雪は花をたへていふ。【七〇】衣冠 諸臣
 をさす、此句より「朝正」の句まで四句連讀してみれば、衣冠二句は笑廟の句についていひ、朝正の句の賓として用ふ。【七一】慘愴
 ものがなくいたむ。【七二】故老 人民の老者をいふ。【七三】滌浚 水の流るるおと。【七四】笑廟 唐の太廟は賊軍に焚かれたり、郭
 子儀長安を回復するや神主（ぬはい）を大内の長安殿に移す、肅宗は古禮に従ひ素衣素履を三日間廟に向ひて哭されたり。【七五】朝正
 正月元日に參朝すること、乾元元年正月元日戊寅の日に玄宗（時に上皇たり）は宣政殿に出御ありて肅宗に受命傳國の寶（印）を授けら
 れたり。【七六】舞景 ばれたる日光。【七七】月分 毎月分給。【七八】梁漢米 四川・湖北の地方の年貢米、餘米としてたまはるなり。
 【七九】水衡錢 水衡は官名、税を主どる、漢の時、財用を司るものに司農・少府・水衡の三あり、少府・水衡は天子の私藏をつかさどる。
 【八〇】内廩 宮苑内のはな。【八一】綉 彩繡をくくりて織物のかざりとする仕方なり。【八二】宮莎 莎は一に香附子ともいひ莖は三
 稜に似、根のぐるりに毛多き草なりといふ。【八三】恩榮 恩寵榮譽。【八四】同拜手 買敵と同じく敬禮拜受する、買至は時に中書舍
 人、嚴武は給事中たり。【八五】出入 朝廷へではひりする。【八六】隨肩 一步おくれについてゆくこと。【八七】著辭 辭をおびる
 こと。【八八】華堂 宮中のうつくしき堂。【八九】綉被 ぬひとりのかいまき。【九〇】綉齊 たづなをそろへて馬をすする。【九一】
 乘燭 ひるより遊びつづけて夜になりてともし火をとる。【九二】書柱 書は手紙、柱とはこちへよこしてくれりこと。【九三】滿懷
 賤 賤は手紙の文をかきたる紙をいふ、懷に滿つとは多きをいふ。【九四】每覺 覺は知るといふほどの意。【九五】昇元輔 買敵が大
 臣宰相の地位にのぼること。【九六】列大賢 賢人の居るべき位に列する、これも買敵についていふ。浦氏は「每覺」四句を買敵を指
 すとするの誤なるをいひ、之を房琯をいふとなせり、今從はず。【九七】乘鈞 詩經に乘國之鈞とみゆ、宰相は國中の均衡をたもつ
 ものなり、ここは宰相の地位をさしていへり。【九八】咫尺 まぢかくにあること。【九九】銀繩 ちたばれをさなはれる、買敵の罪
 により罰せられしを鳥にたとへいふ。【一〇〇】駉 ともに羽をつられてとよ。【一〇一】禁掖 宮禁の掖門、ここは諱官等の出入する

寄岳州賈司馬六丈巴州嚴八使君兩閣老五十韻

門なり。【一〇三】朋從改。ともだちがかはる。【一〇四】微匪。微小な位、作者その左拾遺の地位をさしていふ。【一〇五】性命全。無事にいきる。【一〇六】青蒲甘受職。青蒲は青色の蒲席をいふ、これは天子の臥床の下敷きにするもの、むかし漢の元帝が太子を易へんとせしとき史丹といふもの直ちに天子の臥内に入り青蒲のうへに伏して泣陳せしと、此句は作者房琯が事について強諫せしことをいふ、數は誅殺。【一〇七】白髮。自己の老容。【一〇八】弟子二句。自己を比していふ、弟子は孔子の弟子なるをいふ。【一〇九】原憲。貧を以て有名なり。【一一〇】諸生。書生。【一一一】老伏處。伏は服字の音訛なるべし、服處は後漢の儒者、左氏傳の解を作りしを以て知らる、顧炎武の説に、漢に向書を傳へたる濟南の伏生あり、伏生名は勝なり、伏處は伏勝の誤用ならんと、余按するに杜甫何ぞ此誤をなさん、後人傳寫にあたり、服が伏に訛せしならんのみ。【一一二】師資。師となり、もとでとなるもの、老子に善人不善人之師、不善人善人之資、とみゆ。【一一三】謙未達。作者自らなほ師資あるの地に至らずと謙遜す。【一一四】鄉黨。周圍の人人をさす。【一一五】數何先。鄉に於ては年長者を敬して先きとす、此句作者學徳なくして先づ敬せらるるを怪むなり。【一一六】舊好。舊好。ふるき時のなかのよき、此句舊好を憶ひてはの意。【一一七】新愁。今日のうれひ、新愁をいだいてはの意。【一一八】眼欲穿。眼に穴があきさう、賈賈の居る地を見つめるをいふ。【一一九】翠乾。みどりの色かわいて生色うすし。【一二〇】危樓竹。あぶなげなかけはしの竹、書説に蜀道の樓は竹を編みてつくる、この竹は編竹をいふと。余は樓道の通路に叢生せる竹をさすものと考ふ、此句賈の居地についていふ。【一二一】紅膩。膩はあぶらぎること、此句賈の居地についていふ。【一二二】買筆。筆は文章をいふ。【一二三】孤憤。一人のいかり、韓非は孤憤の篇を著す。【一二四】定知二句。賈賈二人についていふ。【一二五】深意。詩文にふくめたるおくふかきころ。【一二六】傳。傳播せしむること。【一二七】貝錦四句。傳播せしむることの危険なるわけをいふ、貝錦は詩經(巷伯篇)に萋兮斐兮、成是貝錦とあるに本く、萋は文章ある貌、貝錦は貝の錦紋なり、女工彩色の絲を集めて錦文を織成す、讒人が他人の過ちをよせあつめて罪を構成することそれと似たり。【一二八】無停織。織ることとどむるなし、断えず織るをいふ。【一二九】朱絲有斷絃。宋の鮑照が句に直如朱絲絃とあり、朱絲絃は琴絃なり、杜句は之を借用して、絃直なれば断絶することあるをいふ。【一三〇】浦鴨二句。連關してみるべし。【一三一】防碎首。猛鳥に首をくだかれぬ襟にふせぐ必要あり。【一三二】霜鬢。霜おくるの鬢、法を執る官吏をたとへていふ。【一三三】不效拳。む

だなこぶしなし、必ず他の鳥を搏撃するをいふ。【一三四】地僻。此句賈の地をいふ、僻はかたよりたること。【一三五】昏炎瘴。炎熱の氣、蒸しき水蒸氣におほはれてくらし。【一三六】潤。おほし。【一三七】陞石泉。石や泉のためにその地形せばまりたるをいふ。【一三八】且將棋二句。二人に通じていふ、將棋は棋をうつことによりての意。【一三九】度日。時日を経過する。【一四〇】爲年。一年をわたること。【一四一】典郡。郡をつかさどるもの、刺史の官をいふ、これ賈をさす。【一四二】微眇。地位の小なること。【一四三】治中。官職の名、晉の時、州に別駕・治中・從事あり、隋唐以後治中を改めて司馬といふ、賈をさす。【一四四】棄捐。朝廷からすておかるるをいふ。【一四五】安排。『莊子』(大宗師)に安排而去化、乃至於天とあり、排に安んずるとは造物の推移(かはる)がはるおしのけること、を甘んじておちついてなることなり、安排二句は二人を通じていふ。【一四六】求微史。微史たるを求むるなり、微史は人に屈せざるべつてゐる史なり、莊周嘗て漆園の史となる、楚の威王を聘して丞相となさんとす、周、使者に謂つて曰くすみやかに去て我を汚すことなかれ、と。晉の郭璞の時に漆園有微史とあり。【一四七】比興。たとへを以て景物に托して思ひをのぶる方法をいふ。【一四八】展歸田。田園に歸らんとの情をのぶる、後漢の張衡に歸田の賦あり。【一四九】去去。其人去て留まらざらんとするをいふ。【一五〇】才難得。人才は得ることかたし。【一五一】蒼蒼。蒼蒼。天の色をいひ、天をさす。【一五二】理又玄。玄はおくふかきをいふ、老子に玄之又玄、衆妙之門とあり。【一五三】古人二句。此二句、上句は賈賈についていひ、下句は自己についていふ、上を結び下を起す。【一五四】稱述矣。穆生が故事。漢の高祖の時、楚の元王、穆生を敬禮し常に生がために醴を設く、次に王戊が位に即くや醴を設くることを忘る。生曰く、可_レ以_レ逝_レ矣と、遂に病と謝して去る。【一五五】吾道。無形の道を云ふ。【一五六】卜終焉。身を終るの地を卜す。【一五七】隴外。秦州をさす。【一五八】翻。反つて。【一五九】投跡。あしあとをいれる、ふみこんで来りしをいふ。【一六〇】漁關。范陽なり、史思明その地に反す。【一六一】控弦。ゆみづるをひく、弓をいれるをいふ。【一六二】笑。作者みづからわらふ。【一六三】爲妻子累。爲_レ妻子所_レ累の義、妻子の係累を受くること。【一六四】興歲時。時は四時、一歳四時のうつるままにうつる。【一六五】親故。親戚故舊。【一六六】行。ゆくゆく、だんだん。【一六七】兵戈。武器、兵亂をいふ。【一六八】接連。場所的につづくをいふ。【一六九】他鄉。秦州をいふ。【一七〇】難夢寐。親故を憶ふゆゑにゆめみること多し、寐はいぬること。【一七一】失侶。ながまを失ふ。【一七二】連連。行いて進まざる貌、失

意のさま。【一七五】 港泊 一處にひきしくとまつてゐる。【一七六】 長吟 聲をながくひきて吟ずる、歎息の詩をうたふなり。【一七七】 阻礙 謝靈運の始寧墅詩に、荆疾相倚薄、遺得靜者便とあり、靜便は幽靜を好む者の都合よきことをいふ、阻はじやまされること。【一七八】 如公 公は賈嚴二人をさす。【一七九】 雄俊 名をしくすぐれたり。【一八〇】 志 二人の志。【一八一】 驚寒 寒の字前に驚寒の語を用ひ一たび押韻せり、ここに再び用ふ可からず、蓋し作者は驚を用ひしならん、驚は鳥のあがることなり、驚は馬のあがることなり。

【題義】 岳州の司馬賈至と巴州の刺史嚴武とに寄せたる詩なり。乾元二年秦州にての作。

【詩意】 賈君の居る衡岳のある地方は猿のなきごろのうちにあり、嚴君の居る巴州は高く鳥の通ひ路のあたりにある。我が舊友たる兩君はともにしあはせが無くしてはるかなる地方にながされて役人をしてをられる。今や兵亂後、天地がたてなほされたのに朝廷のめぐみの露のかりぐあひによつて榮枯のちがひができ、才子たる賈君は賈誼の如く長沙の遠きに居られ、嚴君は嚴光が客星たりし如く釣瀬の上に高くひかりをはなつてをられる。おもふに前年自分は肅宗皇帝の行在所にでむいて出仕し、國事について心配しながら御筵をささげておそばかしく仕へまつた。その頃は胡賊を討伐して結果のよからぬため李廣（哥舒翰）の如き名將もうれへ、外國に對しては援兵を乞ふの使命をもちゆく張翥が待たるることであつた。儀式の際にもとても以前のやうな儀仗をこてんにならべることとは無く、舟いくさの用意はしたもののそれはむだにをはつて都は攻めおとさる様になつた。茫漠たる地方にわたつて味方の城は七十も賊にうばはれ、三千の劍士もちりぢりに散じ、角ぶえは秦晉の地方に吹き

ならされ、旄頭は澗瀧の水の上を俯して照らしてゐる。我我小儒若くは有識のものは、董卓・苻堅の徒（安・史に比す）がいかに亂暴をなさうともたかがしれたものだど輕蔑し嘲笑しつ、及ばずながら精衛の鳥が海水をうづめんとする誠忠のまねをなし、なんで彼等逆賊が血囊を作つて天神を射る如きことをするのかとあやしんだ。果して各地方は官軍を助けんことをおもひ、一たび鼓をうつや味方の勇氣ふるひおこつて前面に敵あるをみとめぬほどであり、陳倉の北には陰氣消散し、太白山のいただきは晴れ晴れしい日色がにはふ様になり、衛では賊軍敗北して屍はみだれし麻のごとく積もり、味方は破竹の勢を以て燕にさしかるるに至つた。かくて吾が君（肅宗）の正式の車駕は長安の宮闕に還幸になり、官軍は關中八水の流域に下つてきた。自分はこのときありがたくも車駕の御先導の任にくははり、おめでたい勅興の氣のただようてゐるなかをうちはらひつつ起居ふるまうた。また魏虎の如くつよい警護の武士はよろひのひかりを日光にかがやかせ、麒麟の御馬は玉鞭をあてられてすむ。近侍の諸臣は心得て儀仗にはひり、多くのお馬のむれもお伴をして宮城へとのりこんできた。朱樓のあたりに動く花をみれば雪のごとく、城邊の碧樹にはあを煙がじつとうかんでゐる。吾が君は先づ宗廟に對して哭禮を行はせられたがそこにはものがない風が急に吹き、百官は心かなしみ、父老はたきつせのごとく涙をながしたが、元日の參朝にははれわたつた日の光があざやかにかがやいて、いかにも太平の象があらはれた。官吏に對して毎月梁漢の地からたてまつつた米を分けてください、

春にあたつては水衡の内帑金を支給しくだされる。御苑の花薬は縷紋よりもしげくうるはしく、莎草は綿よりもやはらかさうに生えてゐる。そこへ我等は同じ様の恩榮を荷うて、肩さがりに伴行して出入りし、晩には華堂で酔にひたり、寒ければともに繡のかいまきを重ねて眠つた。また日中は馬をならべたづなをそろへてあそんで、さらに夜まで燭をとつてあそびつづけ、懐に一ぱいになるほどの手紙さへももらつて諸君と親しく交はつた。自分のかんがへでは諸君は大臣宰相の地位にのぼるであらうとおもひ、必ず諸君は大賢の居るべき地位に列するだらうとまちまうけた。しかるに國鈞をとる宰相の地位にもうすこしといふ距離の處で、諸君は鳥のたちばねをそがれてふたたび一しよに飛び出すことになつた。自分は禁中の掖門のそばでまつたく友達がかはつてしまひ、つまらぬ官位に於て無事にいのちをとりとめた。吾が君をお諫め申したときは青蒲の席に於て満足して誅戮を受けるつもりであつたのだ、いきのこつてはみたがだれがこのしらが首を氣の毒がつてくれるものがあらうか。自分分は孔子の弟子原憲のごとく貧しく、後漢の諸生服虔のごとく老いてゐる。他人の師資となるほどの地に達したものでないと謙遜してゐるのに、何故か郷黨の人人は自分を先きに敬うてくる、これは愧ぢいる次第である。諸君とのむかしのよしみをおもふと腸がちぎれる様であり、このごろの愁のころでは、眼に孔があくほど諸君の方のみながめやられる。嚴君の地にある棧道では竹も翠に生色が無くはえてゐるだらう。賈君の地にある小湖では蓮花がさいて紅色があぶらぎつてゐるであらう。賈

君は文章をつくつて孤憤を論じ、嚴君また幾篇の詩をつくりなしたか。兩君ともそれを作るにおくその意をいためたこととおもふが、さやうなものは決して一般の人人に傳播せしめたまふなよ。識人は文工のやうにたえず貝錦の紋を織りつつあるものであり、朱き琴絲もまつすぐなれば断ちきれぬものである。秋の鶉は他の餌物をうつにむだの拳をつかはぬものだ、だから水上の鷗は首をうちくだけぬ様に用心することが大切だ。賈君の處は炎瘴の氣がもやもやしてゐるだらう。嚴君の處は山だらけで石泉のみで地面が窮屈であらう。兩君は棋や酒で日や年をすごしてゐることだらう。一郡の長官ではつまりちつぽけなものだ。一治中の職ではすてられてあると同じだ。それになるがままに運命に身をまかせ莊周の様な傲吏の生活を求め、比興の辭に託して歸田の思をのべられる。諸君の如き者が去つてはふたたび諸君の如き才は得ることがむつかしい、じつに天道といふものはその理が深くてわからぬものだ。むかし漢の穆生は可_二以_一逝_二矣_一というた。諸君はそれだ。自分はいまや此に終焉の地を卜しつある。因つて隴外のこんなところまではひりこんできたが、漁陽の地方ではまた弓矢るをひいて逆賊がおこりだした。自分は妻子にはだされつつあることををかしくおもひながら時間の経過するままにおしうつつてゐる。親戚故舊はだんだんすくなくなるし、兵亂のみはともすれば地つづきにつらなつてゆく。他郷のそらで夢みばかり多く、友だちなしでは失意のさまであるのもあたりまへのことだ。おまけに多病のためますますこんなところにながとうりうをするし、いたづらに長吟

しつづ樂隱居の生活をじやまされてをる。しかしながら諸君等はともに雄俊の人たちであるから、諸君の志は必ず猛鳥駿馬のごとくまひあがりをどりあがるに在ることであらう、自分などはお話にならぬ。

寄張十二山人彪三十韻 張十二山人彪に寄す 三十韻

獨臥嵩陽客。三違潁水春。獨り臥す嵩陽の客、三たび違ふ潁水の春。
艱難隨老母。慘澹向時人。艱難、老母に隨ひ、慘澹、時人に向ふ。
謝氏尋山屐。陶公漉酒巾。謝氏、山を尋ぬる屐、陶公、酒を漉する巾。
羣凶彌宇宙。此物在風塵。羣凶、宇宙に彌る、此の物、風塵に在り。
歷下辭姜被。關西得孟隣。歷下、姜被を辭す、關西、孟隣を得。
早通交契密。晚接道流新。早く交契を通すること密に、晩に道流に接する新なり。
靜者心多妙。先生藝絕倫。靜者、心、妙多し、先生、藝、絶倫なり。
草書何太古。詩興不無神。草書、何ぞ太古なる、詩興、神無くんばあらず。

曹植休前輩。張芝更後身。曹植、前輩休む、張芝、更に後身あり。
數篇吟可老。一字賣堪貧。數篇、吟じて老す可し、一字、賣(買)へば貧なるに堪へたり。
將恐曾防寇。深潛託所親。將恐、曾て寇を防ぐ、深く潛みて所親に託す。
寧聞倚門夕。盡力潔殮晨。寧ぞ聞かむや倚門の夕、力を盡す潔殮の晨。
疎懶爲名誤。驅馳喪我真。疎懶、名に誤らるるを爲す、驅馳、我が真を喪ふ。
索居尤寂寞。相遇益愁辛。索居尤も寂寞、相遇うて益、愁辛。
流轉依邊徼。逢迎念席珍。流轉、邊徼に依る、逢迎、席珍を念ふ。
時來故舊少。亂後別離頻。時來つて故舊少く、亂後、別離頻なり。
世祖修高廟。文公賞從臣。世祖、高廟を修む、文公、從臣を賞す。
商山猶入楚。渭水不離秦。商山、猶楚に入る、渭水、秦を離れず。
存想青龍秘。騎行白鹿馴。想を存す青龍の秘なるに、騎行す白鹿の馴るるに。
耕巖非谷口。結草卽河濱。巖に耕すは谷口に非ず、草を結ぶは卽ち河濱。
肘後符應驗。囊中藥未陳。肘後、符、應に驗あるなるべし、囊中、藥、未だ陳ならず。

旅懷殊不愜。良覲眇無因。旅懷、殊に愜はず、良覲、眇として因無し。

自古皆悲恨。浮生有屈伸。古自り皆悲恨あり、浮生、屈伸あり。

此邦今尙武。何處且依仁。此の邦、今武を尙ぶ、何の處にか且仁に依らむ。

鼓角凌天籟。關山倚月輪。鼓角、天籟を凌ぐ、關山、月輪に倚る。

官壕羅鎮磧。賊火近洮岷。官壕、鎮磧に羅る、賊火、洮岷に近し。

蕭瑟論兵地。蒼茫鬪將辰。蕭瑟たり論兵の地、蒼茫たり鬪將の辰。

大軍多處所。餘孽尙紛紛。大軍、處所多し、餘孽(孽)尙紛紛たり。

高興知籠鳥。斯文起獲麟。高興、籠鳥なるを知る、斯文、獲麟に起らむ。

窮秋正搖落。回首望松筠。窮秋、正に搖落す、首を回らして松筠を望む。

【字解】 一 張十二山人題。山人は仕へざる人ないふ、「唐詩紀事」によれば、張彪は蓋し涇水洛水の間(河南登封縣の地方)に生れし隱者にして、天寶の末に母を奉じて亂を避けたりと。彪が北遊遠適、孟雲卿詩にいふ、善道居貧賤、瀟風蒙塵埃、行行無定心、塚坎難歸來、慈母憂疾疹、家室念酒酒、と。又神仙の詩にいふ、長老思榮壽、後生笑寂寞、五穀非長年、四氣乃靈藥と。以て其の人となりを知るべし。二 調隊。世人とはなれてひとり退き居ること。三 嵩陽客。彪をさす、嵩陽は嵩山の南なり、嵩山は河南登封縣治の東北にあり、東峰を太室、西峰を少室といふ、相去ること十七里、五岳の一にしてその中岳なり。四 三邊。邊は

そむきて邊はざるないふ、三たびたがふは三年を經るないふ。五 涇水春。涇水は少室山に出で東南して淮水に入る、涇水春は彪の故郷の春をいふ。六 艱難。國難、世難。七 老母。彪の母。八 慘澹。ものがなしさま。九 時人。世間の人人。一〇 謝氏。宋の謝靈運。一一 尋山屐。靈運は登山を好み特別の木屐を製し、上るときはその前齒を去り、下るときはその後齒を去りしといふ。一二 陶公。陶淵明。一三 漉酒巾。にこりさけをこす頭巾、淵明は頭巾で酒をこしまたそれを平氣でかぶり居たりと。一四 羣四。安祿山・史思明等多くのわるもの。一五 彌字宙。天地間いつばいにひろがる。一六 此物。上句の辰と巾とをうけていふ、但し實際は彪其人を意味す。一七 風塵。世上のちりほこり、山から俗界へでてきたことないふ。一八 歷下。山東省濟南府。一九 財妻被。後漢の姜詠、繼母に事へて孝、兄弟四人、同一布被に寝ぬ、被は「かいまき」、姜詠を彪に比す、姜被を辭すとはいふ、彪にいとまをつけ別れしないふ、蓋し作者、往年歷下に在りて彪を識り、そこに別れしものとみゆ。二〇 關西。補注には潼關以西とし華州を指すなるべしといへり。余は朱注により潼關以西とし、秦州をさすものとみる。「兵車行」の未休關西卒の關西と同じ、(上卷卷二、一六頁を見よ)。二一 得五隣。孟隣は孟氏のとなりなり、孟子の母、その子を教育せんために三たび居を遷して隣をえらべり、彪、母を奉ずるにより之を孟子に比す、孟隣は彪のとなりあひないふ、此句蓋し秦州にてまた彪と隣居するに至りしといふ。二二 早通。「唐詩紀事」に引けるは早を且に作れり。二三 交契。彪とのまじはり、ちぎり。二四 密。親密。二五 晚。あとには、おそく。二六 接。接近。二七 道流。道家の教を奉ずる人人。二八 新。接の字へかかる、最近にはの意。二九 靜者。幽靜を好む人、彪をさす。多妙。藝道の奥妙に通達する所多し。三〇 先生。彪をさす。三一 草書。はしりがきの書體。三二 古。ふるめかし。三三 詩興。詩の興趣。三四 神。人間わざとおもへぬ力。三五 曹植。建安時代魏の第一流の詩人。三六 休。そのことのやまつてしまふないふ。三七 前輩。先輩と同じ。三八 張芝。後漢時代、弘農の人にして草聖と稱せられし人。三九 後身。生れかはり。四〇 數篇。彪が作れる詩四五篇。四一 吟可老。他人之を吟じ樂しみて以て老を致るに足るべきないふ。四二 一字。彪が草書の一文字。四三 賈堪貧。賈は古本及び「唐詩紀事」に引けるにはみな賈に作る、従ふべし。彪が草書は一字千金といふべくいと貴きものなれば、他人もし之を買ふときはその人は貧なるに十分なり、との意。「賈りて貧なるに堪

へたり」にては義をなます。【四四】 將恐 詩經（小雅谷風）に將恐將懼、維予與女とあり、恐懼は厄難勤苦の事に違ふをいふ、こゝは上の「將恐」二字を切り取りて借用せるまでなり、賊難にあひて恐懼するなり。【四五】 曾 かつて、まへかた。【四六】 防寇 逆賊の難を豫防するをいふ。【四七】 託 身をよせる。【四八】 所親 したしむ所のもの、親類縁者のたぐひ。【四九】 寧聞 「なんぞきかんや」反語なり、きいたことがない。【五〇】 倚門夕 夕倚門を造にいへるなり、齊の王孫買の母、その子が家を出でて晩に来るときは門に倚りて望むといへり、戰國策にみゆ、此句は母にかく心配をかけしことなきをいふ。【五一】 盡力 ほれをなすこと。【五二】 潔瑣 これも韻字の都合にて潔瑣を置きかへていへり、晉の東野が補亡詩の「南陵」に孝子が親につかふることをのべて、潔瑣爾夕膳、潔瑣晨餐といへり、瑣は餐と通ず、食事のこと、潔は清潔にすること。【五三】 疎懶 ぶしやう、以下作者自らいふ。【五四】 爲名誤 爲名所誤の略、名聲のため世間へひきだされ一身の處置をあやまる。【五五】 驅馳 東西にかけめぐる。【五六】 喪我眞 おのれの本性、ありのままのところをうしなふ、虚偽の生活をせればなくなりしをいふ。【五七】 索居 親友とちりちりになつてゐる。【五八】 相遇 處とであふ。【五九】 悉辛 うれはしくまたつらし。【六〇】 流轉 處處を轉轉してうつる。【六一】 依邊微 微は木欄にてつくれる界、邊微は邊境をいふ、秦州の地をさす、依は依託。【六二】 遙迎 むかへて逢ふこと、邊はそのへ字にて義かるし。【六三】 席珍 禮記（備行篇）の語、（上卷卷三、二五四頁をみよ）、「席上の珍」なり、瑋璋の如き美玉をさす、これを處をたとへていふ。【六四】 時來 昇平の時節の到來してから、下の亂後に對し辭をあやなしていへるなり。【六五】 故舊 ふるなじみの人人。【六六】 別離 別の離、このわかれのなかに今回の處とのわかれをふくめていへり。【六七】 世祖 後漢の光武帝の廟號。【六八】 修飾。【六九】 高廟 漢の高祖の廟、光武は建武二年正月に高祖の廟を洛陽に立てたり、此一句は肅宗が乾元元年四月に九廟落成して神主を迎へて新廟に入れしことをいへり。【七〇】 文公賞從臣 左傳（僖公廿四年）にみゆ、晉の文公本國を出で諸國をさまよひ國にかへるに及びて從者を賞す。肅宗の至德二載十二月、玄宗に蜀に從ひしもの及び肅宗に靈武に從ひし諸臣に封爵を加へしことをいふ。【七一】 南山猶入楚、渭水不離秦二句 諸家定説なし、余は處が身のうへについていへるものと考ふ、南山は陝西商州治の東南九十里にあり、漢の四皓の隠れし地、渭水は周の太公望が釣りを垂れし水、この二隱者の事を以て處にあてていふ、入楚、不離秦、の楚、秦は唐にあてていふ、二句の意は君（處）が隱るるにふさはしき南山も渭水もふたたび我が唐の手に歸したりとの義ならんか、（又案、南山一句は處についていひ、入楚とは山の秦に屬せざるをいひ、處が帝力を享けざるをいへるか、また渭水の句の秦は長安をさし、作者が長安を慕ふの意を寓せるか、かく見るときは南山・渭水の句にて彼我を分統し、後の旅懷・良觀の句に至りまた收束せりとも考へ得べし、暫く疑を存す。【七二】 存想青龍 雲笈七籤の「老君存思圖」なる道書に、凡行道時所存、清且、思青雲之氣、巨滿齊室、青龍獅子備守前後といへり。存想は思想をそゝにとむること、青龍とは青龍が齊室の前後をまもりなるものと考ふるなどの神秘的なることをいふ。【七三】 騎行 のりてあるく。【七四】 白鹿 調は「なれる」、白鹿は仙人ののるものなり。【七五】 耕巖非谷口 上卷（卷一、四四頁の郷谷の解をみよ）、漢の郷樓字は子眞、長安の南、谷口に居り、巖石の下に耕す、「揚子法言」にみゆ。此句は處の隱る地長安近くに非るをいふ。【七六】 結草即河濱 神仙傳に、河上公は其の姓氏を知らず、漢の文帝の時、公草を結びて處を河濱に爲くり、老子を讀む、文帝駕して往て之に詣る、と。無論道家者流のつくりばなしなれどもかく言ひつたへらる。河は黄河、此句は處の隱るるところ洛陽近くなるをいふ。【七七】 肘後符應驗 晉の葛洪、金匱藥方一百卷・肘後要急方四卷を著す、肘後は手許をいふ、符は醫療のまじなひのふだ、驗はききめのしるし。【七八】 陳 ふるびる。【七九】 旅懷 作者客中のおもひ。【八〇】 懷 かなふ、きにあふ。【八一】 良觀 親友と相見るは良觀なり。【八二】 渺無因 是るかにしてあふによしなし、浦氏は此語あるによつて秦州にて過ふと爲すことの都合なることを論ぜらる、これは別後の將來をさしていふことなれば毫も不都合なし。【八三】 屈伸 一身のかがむとのびると、なほ窮通といはんがごとし、こゝは衆散を主とし、衆を伸、散を屈とみる。【八四】 此邦 秦州をさす。【八五】 依仁 仁人にたよりにて生活すること、仁人は處をさす、この依仁は「論語」の里仁の意のごとし。【八六】 凌天鎖 そらふくからかぜをもしのぐ、高木のぼるをいふ。【八七】 倚月輪 仇氏は倚人を人がよることとし、「月を仰ぎて鄉關を望む」の義とせり、楊注に「地勢の高きを言ふ」といへるは關山が倚るとみるなり、秦州雜詩に不夜月臨關とあれば楊説可ならん。【八八】 官操 官軍が防禦のためにほりたる「ほり」。【八九】 羅 羅列。鎮城 鎮は戌兵の屯所、磧は沙漠。【九〇】 賊火 吐蕃の賊のあぐる焚掠の兵火。【九一】 洗城 洮州、岷州、並に隴西の地。【九二】 蕭瑟 さびしきさま。【九三】 論兵地 用兵を論ずる地方、いづれの地をさすやば明かならず、疑

ふらくは關西秦州の近地をさす、浦氏は華州以東とし、作者等がかつて秦州に居りて處をさすといへり、余はしか信ぜず。【六】 蒼茫はつきりせぬ貌。【七】 關將辰辰は時、韻字の都合にて辰の字を用ひしも時といふも處といふも殆ど大差なし、關將は諸將敵味方にてあひたたかふをいふ。【八】 大軍 官軍をいふ。【九】 多處所 その居る場所多くあり、これはひろく遠方の諸地へかけていふ。【一〇】 餘孽 蟲豸の妖を孽といふ、凶賊ののこりのものをいふ。【一一】 紛綸 みだれたる貌、多くあるをいふ。【一二】 高興 知蒲鳥、斯文起獲麟二句 諸家定説なし、鄭見をいはん、高興は杜甫が心中におこす高興、「北征」の青雲動高興の高興、(上巻卷五四八二頁) 知蒲鳥とは、作者邊地に屈促しなるは籠中の鳥に似たることを知るをいふなり、斯文の句は處につけていふ、斯文は處が著述をさす、起は筆をそこからおこしはじむるをいふ、獲麟は孔子春秋を著すに西狩獲麟にて筆を止めしことをさす、杜預の左傳の序に、孔子が筆を獲麟の句に絶ちしは感じて起りし所なるも、固より終りを爲す所以なり、といへり、孔子が獲麟に感ぜしは、麟が其の出づべき時に非ずして出でたるを傷めるなりといはる、故に孔子は獲麟に感じて筆を起せしも亦そこに止めたり、處も必ずや孔子のごとく獲麟に感じて筆を起すならん、此二句或は二句ともに張についていふとし、或は二句ともに作者自らいふとし、或は上句を張をいひ下句は自己をいふとするなど諸説あり。【一三】 窮秋 秋のすみ。【一四】 搖落 木の葉ゆられおつ。【一五】 望松筠 處が隱居をのぞむなり、筠は竹色なるも竹をいふ、松筠即ち松竹の意、裡面には晚節を保つとの比意をもふくむ。

【題義】 河南地方の隱遁者で、また孝子である張彪にやつた詩である。作者は張彪とは以前山東省の濟南府であうたことのあるのであるが、さらに之と秦州でおちあひ、しばらく隣りすまひをし、さてまた彼が河南の方へかへつたので、それにこの詩を寄せたのである。乾元二年の秋、秦州に於て別後まもなき時の作であらう。

【詩意】 君は嵩山の陽にひとり臥して起たず隱居してゐた人であるが、郷里にある潁水の春にはすでに三たびあはずにゐる。さうして國難の際に老いたる母のおともをして孝養をなし、世間の人に對してはものがなしきおもひを抱いてをる。本來君は謝靈運の山のぼりの足駄をつけ、陶淵明のどぶろくをこす頭巾でもかぶつてゐるべき人なのだが、いかにせん逆賊どもが天地にはびこつてゐるので、その足駄その頭巾も俗界の風塵のなかに陥つてをるのである。自分は歴下(濟南)で君とわかれたが、いま關西の地(秦州)でまた君と隣りすまひをすることができた。早くから親密な交際を通じたのであるが、最近にはまた幸にも君の如き道家の道を汲むものにちかづくことができた。幽静を好む君は藝道の妙奥を多く心にもつてをり、その藝たるや絶倫のものである。君の草書はとうしてあんなに古めかしいのであるか、君の詩興には鬼神の助けが無いとはしない。君の詩に對しては曹植も先輩たる資格がなくなり、君の草書は張芝の後身といつてもよろしい。君の詩四五篇あればそれを吟じてたのしみながら老を送ることができ、君の草書はその一字を買ふならばその人は貧なるに十分である。君はこれまで亂世恐懼のうちに逆賊の難を避け、人目をくぐつて親類縁者をたよつてをられた。その間よく老母に事へ、王孫賈のごとく歸りがおそいたため夕に母親を門によりながら待たせて心配をかけたことをきいたこともなく、せいいつばいの力をだして母の晨餐を清潔にととのへられた。自分はずしやうものであるのになまじ名聲のあることのために身を誤られて世間へとびだし、東西にかけすりめぐつて自分の本性のありのままを失うてしまつた。親友とちりちりになつての生活は尤もさびしい

ものであるが、君とであうてみるとこれまたますますうれひ・つらさをますますばかりである。自分は處處轉轉してこの秦州の邊境に身を託してをるので、瑇瑁の如き席上の珍たる君をお迎へしたく思うてゐるのである。が残念なことには太平の時節到來したにかかはらずふるなじみの人人はごく少く、兵亂以後はただ諸人との別離のみがしきりである。今や我が天子はむかし光武帝が高祖の廟を修めたごとく祖先の廟を改修せられ、むかし晉の文公が逃亡のとき隨從した諸臣を賞せられたごとく羣臣に賞をおこなはれた。四皓の隠れた商山、太公望の釣りを垂れた渭水、みな我が唐に歸した。君が隱居の地は回復された。君が想ひは青龍室を守る道教の祕密の處に存し、君の軀はまさに馴れたる白鹿に騎りて遊行せんとする、君が巖石のもとに退耕せんとする處は鄭子真のごとく長安ちかき谷口ではなく、君が草を結びていほりせんとする處は河上公のなせしごとく洛陽に遠からざる黃河のほとりであるであらう。君は醫藥の書を肘にかけ、その作るところの療病の符は必ずや治癒に效驗があるであらう、君が囊中にたくはふる藥はまたふるびたりとはせぬであらう。自分は旅中のおもひをいだいてことに氣にあはぬことばかりだ、せめて君でも居てくれたらばとおもふのに、君との會合はかけはなれてなすよしもない。悲恨といふものは今にはじめず、古からあるものだが、いかにもこの浮世には一屈一伸、聚散離合あるは免れぬところである。この地方(秦州)はいま武事ばかりたつとんでをる、どこをたづねたならば君の如き仁人によりそふことができるだらうか。鼓角のおとは天鎮をもしのぎ、

關塞を設けた山はたかく月に倚つてゐる。官軍の防禦の壕は屯兵所・沙漠に多くならんでをり、洮州・岷州に近く賊虜の焚掠の火がせまつてをる。凡そ用兵を論ずる附近地方は蕭瑟とさびしく、諸將あひたたかふの時、勝敗の數蒼茫としてはつきりせぬ。このほか安・史の殘黨もまだ紛綸と多くみだれ、官軍の大部隊も多くの處にあつめられてゐる。自分は心には高興をいだいて身をかへりみれば籠のなかの鳥にすぎぬことを知つてゐる。君は孔夫子のごとく獲麟に感じて著述の筆をそこからおこすことであらう。いま秋のすす木の葉のゆられおつるときにあたり、自分はふりかへつて君の居られる松竹の宅の方をながめやるのである。』

寄李十二白二十韻

李十二白に寄す。二十韻

昔年有狂客。號爾謫仙人。
筆落驚風雨。詩成泣鬼神。
聲名從此大。汨沒一朝伸。
文彩承殊渥。流傳必絕倫。
龍舟移棹晚。獸錦奪袍新。

昔年、狂客有り、爾を謫仙人と號す。
筆落つれば風雨驚き、詩成れば鬼神泣く。
聲名、此従り大に、汨沒、一朝に伸ぶ。
文彩、殊渥を承く、流傳するは必ず絶倫なり。
龍舟、棹を移すこと晩く、獸錦、奪袍新なり。

白日來深殿。青雲滿後塵。白日、深殿に來る、青雲に後塵滿つ。
 乞歸優詔許。遇我宿心親。歸るを乞うて優詔許さる、我に遇うて宿心親しむ。
 未負幽棲志。兼全寵辱身。未だ負かず幽棲の志に、兼ねて全うす寵辱の身。
 劇談憐野逸。嗜酒見天真。劇談、野逸を憐む、嗜酒、天真を見る。
 醉舞梁園夜。行歌泗水春。醉舞す梁園の夜、行歌す泗水の春。
 才高心不展。道屈善無隣。才高くして心、展べず、道屈して善、隣無し。
 處士禰衡俊。諸生原憲貧。處士、禰衡俊に、諸生、原憲貧なり。
 稻梁求未足。蕙苴謗何頻。稻梁求むる未だ足らず、蕙苴、謗何ぞ頻りなる。
 五嶺炎蒸地。三危放逐臣。五嶺、炎蒸の地、三危、放逐の臣。
 幾年遭鵬鳥。獨泣向麒麟。幾年か鵬鳥に遭へる、獨泣、麒麟に向ふ。
 蘇武元還漢。黃公豈事秦。蘇武、元漢に還る、黃公、豈に秦に事へむや。
 楚筵辭醴日。梁獄上書辰。楚筵、醴を辭せし日、梁獄、書を上りし辰。
 已用當時法。誰將此議陳。已に當時の法を用ふ、誰か此の議を將て陳せむ。

老吟秋月下。病起暮江濱。老いて吟す秋月の下、病起す暮江の濱。
 莫怪恩波隔。乘槎與問津。怪む莫れ恩波の隔たるを、槎に乗じて與めに津を問はむ。

老吟秋月下。病起暮江濱。老いて吟す秋月の下、病起す暮江の濱。
 莫怪恩波隔。乘槎與問津。怪む莫れ恩波の隔たるを、槎に乗じて與めに津を問はむ。

【字解】 一 狂客 賀知章をいふ。太子賓客賀知章は四明の人、自ら四明狂客と號す。 二 爾汝 李白をさす。 三 謫仙人 罪によりて天上より下界へ流しくだされた仙人、賀知章は紫雲宮に於て李白を一見して謫仙人なりと評せしといふ。 四 驚風雨 快 速なるをいふ。 五 汨沒 浮沈の意ならんといふ、但しこは沈の意を主とせり、沈淪といふほどの義に用ふ。 六 文彩 白の文章のあやあること。 七 殊淵 特別にあつた御恩、翰林供奉に任ぜられし類をさす。 八 流傳 世間へつたはる作物、清平調の詩の類をさす。 九 龍舟 天子のおふれ、鳳に龍の飾りあり。 一〇 移棹晚 舟をこぎうつさすにしばらくまつてなる。玄宗白蓮池に泛びて白を召し序を作らしめんとせしとき白は已に輪苑に於て酒を被りたりしが高力士に命じて白を扶けて舟にのぼらしめしといふ。 一一 歌錦袍新 新に歌錦袍を穿ふの義。錦袍はにしきのうはぎ、歌はその模様がらなり、則天武后が龍門に幸せしとき從臣に詩をつくらせ先きにてきたものに錦袍を賜はらんとし、東方虬先づ成り、袍を賜はる、宋之間が詩つぎに成る、尤も工なり、因て虬より袍を穿ひて之間に賜はりしといふ、李白に賜しかかる逸事は傳はらざるも蓋し類似の事ありしなるべし。 一二 白日 白の車後座を拜するもの、即ち白に追隨する文士が多くあること。 一三 青雲 白の居る高き地位をさす。 一四 滿後塵 白の車後の塵を拜するもの、即ち白に追隨する文士が多くあること。 一五 乞歸 白、故郷にかへらんことを玄宗にこふ。高力士の諫言によるなり。 一六 遇我 我とは作者みづからいふ、杜甫が李白に遇へるは、白の乞歸後、即ち天寶三載にあり。 一七 宿心 平生からもつてぬた心。 一八 幽棲志 山林生活の念。 一九 寵辱身 老子に寵辱若驚とあり、人は君寵をうけて榮ゆるときあり、またそれを失うて辱めらるときあり、故に之をいましむべきをいふ、白は早く退きし故に辱にあふことすくなし。 二〇 劇談 げげしくものがたる。 二一 野逸 白が杜甫の野逸をあはれむなり、野逸は田野に逸居するなり。 二二 見天真 杜甫が白の天真なるを

見るなり。【三】 醉舞二句 李杜共同のしわざなり。【四】 梁園 漢の時、梁の孝王のつくりしもの、今河南歸德府城東にありと。
 【五】 泗水 山東兗州府にあり、杜甫が李白・高適と梁宋に遊びしは天寶三載にあり、李杜魯齊の地方にありしは明年四載にあり。
 【六】 才高六句 諸家六句共に白のことをいふとなす、愚案するに彼我を分岐せるなり、才高此句は白をいふ。【七】 道屈 道の行はれざるをいふ、此句自らいふ。【八】 善無聞 善道を行ひながら聞かぬものなし、孔子の徳必有聞の語の反対。【九】 處士彌衡 白をいふ、處士は在野の士、彌衡は後漢末の文學者。【一〇】 諸生原憲貧 自らいふ、原憲は孔子の門人。【一一】 稻梁求未足 此句自らいふ、生活に足るだけの食糧なし。【一二】 憲政訪何煩 白をいふ、憲政は「シエヌゴダマ」、後漢の馬援、交趾を征し、憲政の種を載せてかへる、人之をそしりて人から賄賂にもらつた明珠大貝をもちきたれりといふ、白の譏せらるる之に似たり。【一三】 五嶽 以下四句白をいふ、五嶽は廣東の北部に於て東西に走れる山脈、大庾・始安・臨賀・桂陽・揭陽これなり、白の流されし夜郎は（貴州義府桐梓縣西二十里の地なりと）五嶽の西北にありたり可なりへだたりたれども大體のところにて名山をあげしなり。【一四】 三危 山の名、甘肅安西州墩煌縣東南二十里にあり、山に三峰あるを以て三危といふ、むかし舜は三苗の種族を三危に墮（投棄すること）したり、白の夜郎に流さるるそれと似たり。【一五】 幾年遭鵬鳥 幾年とはいくばく年を細げ、やがての意、漢の賈誼長沙に謫せられ三年にして鵬飛びて舎に入る、訖傷みて鵬賦をつくる。【一六】 獨位向麒麟 麒麟に向つてひとりてなく、孔子の春秋（哀公十四年）に西狩獲麟といひ、公羊傳には、そのとき孔子は反袂拭面、涕泣袍曰、吾道窮矣、かくいうたと記せり、李白もその道の窮まれるをなげきて泣くなり。【一七】 蘇武元還漢 漢の蘇武は匈奴に使し十九年にして漢に還り、匈奴に降らず、李白の唐室にそむかざるは蘇武に似たり。【一八】 黃公豈事秦 黃公は夏黃公、商山の四皓の一人、秦末亂を避けて出でず、李白が永王璣の叛軍に従はざるは黃公の秦につかへざると似たり。【一九】 楚庭辭體日 漢の穆生が故事、楚の元王、穆生がため醴を設く、元王の孫戊の時にいたり醴を設くることを忘る、穆生つひに去る。此の句は穆生が自發的に醴を辭したりといふなり、これ李白は永王璣が僞官を受けざりしとの意に用ひしなり。【二〇】 梁獄上書辰 漢の鄧陽、梁の孝王の爲めに獄に下さる、獄中より書をなてまつりて之を諫む、これ李白は鄧陽のごとく永王璣の惡事をいさめしをいふ。【二一】 已用當時法 當時法とはその時の刑法をいふ、至德元年永王璣が軍丹陽に敗れ、白は宿松に奔る、坐せられ

て尋陽の獄に繋がる、明年二載宋若思によつて囚を釋かれその參謀にめさる、此句は刑にふれしことをいふ。【二二】 此職 楚庭・梁獄二句の事實、即ち白は璣にくみする者には非りしとの意見をいふ。【二三】 老吟二句 白の、ことをいふ、李白は乾元二年には六十一歳なり。【二四】 秋月下 此句によつてこの詩の秋作られしことを知る。【二五】 暮江濱 江は揚子江、薛仲昌が李白年譜を案するに、白は一たび秋より出だされしが、乾元元年璣が事に汙されしに坐せられて夜郎に流さるることとなり、乾元二年に途中にてまた恩命により放還せられ、同年三月には襄陽峽を下り、襄陽にて酒病にかかり、江夏の地に居りてさらに下江せり、この江濱は作者未だそれらの事情を知らず漠然と江をさせるなり。【二六】 莫任 白に向つていふ。【二七】 恩波隔 天子の恩澤の波からとほくばなれてなる。【二八】 乘槎與問津 作者の希望をのぶ、宋之間が明河篇の終りに、明河可渡不可親、願得乘槎一問津とあり、むかし海べに入あり、年年八月に浮べる槎ありて来る、その人々に乗じてつひにあまの河に至る、と。事は張華が博物志にみゆ。宋之間が詩は槎に乗りてあまの河に至りその津ばを問ひたしといへるなり、杜詩は其の用語を借りたれども意は同じならず、杜は天上に至りて天の河のわたりばをたづね、李白のためにその冤を訴へたしといへるなり。【二九】 吳王は俗用にて、爲めにしと同じ。

【題義】 玄宗の第十六子に永王、名は璣なる者あり、天寶十五歲玄宗蜀に幸するや、璣を以て山南東路及嶺南黔中江南西路四道節度採訪等使・江陵郡大都督となす、璣、江陵に至りて江淮の租賦を收め、將士數萬人を召募す、十二月はしいまに舟師を領して東下して廣陵に赴く、吳郡採訪使李希言なるもの、璣を尊敬せざりし故を以て激怒し、且屢肅宗の命を奉せず、丹徒の太守闞敬之を殺す、李白は永王の軍事に參預せり、白は之を脅迫に由ると稱すと雖も、實に其の形迹あるを免れず、白は之によりて璣が失敗するや、璣が罪に坐せられ、夜郎に流さるるに至れり、白は夜郎に赴かんとして程に就きしに、赦命ありて乾元二年三月には已に瞿唐峽を下れり。此詩は蓋し乾元二年秋作者秦州に

ありて、白の恩赦の事を明知せざりし時に作れるものならん。詩は多く白のために辯護を費せり。

【詩意】前年四明の狂客(賀知章)なるものがあつて、おまへを調仙人だと名づけた。おまへは詩文をつくるに紙の上に筆が落ちれば風雨さへ驚くかとおもはるるほど快速であるし、詩が成就してみると鬼神さへそれに感じて泣くほどである。それによつておまへの名聲は大きくなり、これまでの沈淪の身がにはかにのびだすことになつた。さうしておまへの文彩は天子の特別のあつた御寵愛をうけ、世間につたへられる作物も必ず絶倫のものであつた。あるときは天子が舟あそびをされるときわざわざ棹をとどめておまちになつたり、他人にくれるはずの獸錦袍をあらたに奪ひかへしておまへにおさづけになるといふほどであつた。おまへはまひるなかにも奥ごてんにはひりする、おまへの居る高き位のところには追隨する後輩の士が充滿してゐた。それが事に由つておまへはお暇をいただいて故郷へかへりたいと願ひいで、優詔を以てそれを許されて朝廷からさがつた。それでおまへは自分とてあふことができ、かねての心からおたがひに親しむ様になつた。おまへは官をやめたから幽棲の志にも負かないし、兼ねて古人が寵をうけてもまた辱めをうけることもあるといつたおのれのからだをばづかじめず全うすることができた。おまへは自分とはげしくかたりあうて、自分の閒散な在野のすがたをきのどくがつてくれ、酒をたしんでのむところに天真のさまがうかがはれる。かくて我我はあるひは梁園の夜に酔うて舞うたり、酒水の春にはあるきながら歌うたりした。おまへは才が高いの

に心はのびずにある。自分は道を十分おこなひ得ず善を行ひながら隣りとなつてくれるものがない。おまへは處士彌衡のごとく人にひいでたものであり、自分は諸生原憲のごとく貧しいものである。自分分は食糧さへ十分に求められぬ。おまへはなんで馬援が「じゆすこだま」を人から眞珠をもつてきたといはれた様に、ありもせぬことにしきりにそしりをうけるのであらうか。おまへは五嶺地方のむしあついとところで、むかしの三苗のやうに三危山へ放逐されたと同じ様なものである。おまへはいく年めに不吉な鵬鳥にであうて漢の賈誼のやうになるのか、おまへは孔夫子が麒麟を見て「吾が道窮せり」といはれた様に獨りて泣いてゐるだらう。漢の蘇武は匈奴へ降らず漢へもどつた、秦の夏黄公は秦に事へず商山にかくれてゐた、おまへの潔白忠誠な心は蘇武だ、夏黄公だ。穆生は楚王戊の醴を辭退した、鄒陽は獄中から梁の孝王を諫める書を上つた、おまへは穆生だ、鄒陽だ、なんで永王璘の無法な好遇をうけたり逆謀にくははつたりするものか。それにかかはらずおまへは當時の刑法を施行されて流しものにされたのだが、だれがいま上にのべた様な意見を陳べたてるものはないのであらうか。おまへは年老いて秋の月のてるしたで詩を吟じつつあるであらう、おまへは夕ぐれの揚子江のほとりで病みあがりのすがたをしてゐるであらう。おまへはむかしの榮華時代にひきくらべて今なんでこんな僻地に居て天子の恩澤の波とかけはなれてゐるのかなどと不思議がるな。自分はおまへのために昔のある男がした様に槎に乗つてあまのがはらへゆきそこでわたりばをたづねて天帝のところへゆき、

おまへのむじつのつみを訴へてやらうとおもうてをる。

所思 【原注】得台州司戸度消息。

思ふ所 【原注】台州の司戸度が消息を得たり。

鄭老身仍竄台州信始傳。鄭老、身仍竄せらる、台州、信始めて傳ふ。

爲農山澗曲臥病海雲邊。農と爲る山澗の曲、病に臥す海雲の邊。

世已疎儒素人猶乞酒錢。世已に儒素を疎んず、人猶酒錢を乞ふ。

徒勞望牛斗無計斷龍泉。徒に牛斗を望むに勞す、龍泉を斷するに計無し。

【字解】「一」台州司戸度 上卷(卷五、五一四頁をみよ)。「二」消息 たより。「三」鄭老 度をさす。「四」竄 ながしものにする。「五」台州 浙江省台州府、度の居處。「六」信 たより、信書。「七」爲農二句 度の近況、信書によりて知りし所。「八」疎儒素 疎はうとんする、素は質素、ぢみなこと、儒素は儒者のぢみな行ひ。「九」人 作者嘗て度に贈る時に頼有蘇司業、時時乞酒錢といへり、人は蘇源明をさすならん。「一〇」乞 あたふること、借用なり、「乞ふ」義に非ず。「一一」徒勞 作者がむだに骨折るをいふ。「一二」望牛斗 牛斗は星座の名、台州の地は牛斗の分野にあたる。「一三」無計 だてなし。「一四」斷 斬(さる)なり、ただし「こ」は土壤をさりけづることにて、劍を獨り取るをいふ。「一五」龍泉 むかし歐冶子がつくりたる三本の鐵劍の一名、もと龍洞といふ、唐は淵の字を諱みて泉の字にかへたり、龍泉は單に劍の代りとして用ふ。牛斗・龍泉の二句は雷煥(孔章)が牛斗を射

る劍氣を見て豊城の賦にて劍をほりだせし故事(本卷「審劍」の詩の毎夜吐光芒句下の注を見よ)を用ひたり。

【題義】作者の親友鄭度は至徳二載十二月に台州へ貶せらるることになり、乾元元年に台州に至りたり、この詩は始めて度より台州からの手紙を得て思ふ所をのべたり。仇氏は單復が編によりて之を此に置きたり。

【詩意】鄭度老人は、その身はいまなほ流しものにされてをり、その台州からのたよりがこのたび始めて自分のところへ傳へられた。それによると、老人は山澗のみくまりで農となり、海べの雲うかぶあたりに病に臥してゐるとのことである。世間の人人は老人の様な儒者をうとんじるが、いまだに老人に酒錢をあたへてくれる人はあるのである。自分は、いたづらに牛斗のあたりに劍氣が貫くのながめてゐるばかりで、その劍を地下からほりだしてやるてだてはもたぬのである。なげかはしきことだ。

別贊上人

贊上人に別る。

百川日東流客去亦不息。百川日に東流す、客の去ることも亦息まず。

我生苦飄蕩何時有終極。我が生、飄蕩に苦しむ、何の時か終極有らむ。

所思 別贊上人

贊公釋門老。放逐來上國。
 還爲世塵嬰。頗帶憔悴色。
 楊枝晨在手。豆子雨已熟。
 是身如浮雲。安可限南北。
 異縣逢舊友。初欣寫胸臆。
 天長關塞寒。歲暮饑凍逼。
 野風吹征衣。欲別向曠黑。
 馬嘶思故櫪。歸鳥盡斂翼。
 古來聚散地。宿昔長荆棘。
 相看俱衰年。出處各努力。

贊公は釋門の老、放逐せられて上國より來る。
 還世塵に嬰らるるを爲す、頗る帶ぶ憔悴の色。
 楊枝晨に手に在り、豆子雨(兩び)已に熟す。
 是の身は浮雲の如し、安んぞ南北を限る可けむ。
 異縣、舊友に逢ふ、初めて欣ぶ胸臆を寫すを。
 天長うして關塞寒く、歲暮、饑凍に逼らる。
 野風、征衣を吹く、別れむと欲すれば曠黑に向ふ。
 馬嘶いて故櫪を思ふ、歸鳥盡く翼を斂む。
 古來、聚散の地、宿昔、荆棘長す。
 相看るに俱に衰年なり、出處、各努力せむ。

【字解】 一 贊上人 已に屢見ゆ。二 百川 多くの川。三 東流 支那の川は地形上つひに東にながれる。四 客去 客は自らいふ。五 息 止む、停止。六 關塞 兵がへりうご。七 釋門老 佛教界の長老。八 放逐 房琯が事に坐せられて逐はれしものといふ。九 來上國 來は秦州へきたこと、上國は京師長安をいふ。一〇 還 また。一一 嬰 つなぐ、ひつかかる。一二 憔悴色 やつれたかほいろ。一三 楊枝晨在手 佛典を引きて説く解あるも今取らず、これ送別のとき楊柳の枝

を手折り給れて記憶のしるしとする唐人の習俗をいへるのみ、蓋し乾元元年の春作者長安にて贊と別れしなり。【二】 豆子 豆のふ。【三】 雨已熟 雨の字古本兩に作れるあり、兩をよろしとす、兩は兩脚をいふ、豆が二回熟すとは乾元元年の秋と二年の秋との二熟をいふ。【四】 是身二句 一般的にいふ。【五】 異縣 秦州。【六】 舊友 贊。【七】 寫 外部へぶちまけるをいふ。【八】 胸臆 むれのなかのおもひ。【九】 天長 都ととほきをいふ。【一〇】 關塞 秦州にあるとあり。【一一】 歲暮 時に十月なり、秋以後はすべて歲暮と稱す。【一二】 吹征衣 たびする者のころも、作者まさに成州同谷に赴かんとするなり。【一三】 曠黑 たそがれどき。【一四】 故櫪 もと居たうまのふみ板。【一五】 歸鳥 林にかへるとり。【一六】 斂翼 つばさをすぼめる、とばぬこと、自己が外方へでたすのとは反對なるをいふ。【一七】 古來聚散地 古來は舊來といふほどの意、聚散は贊及び諸友と或は聚合し或は離散せしこと、秦散の地とは京師の地をさす。【一八】 宿昔 隔夕を宿といひ、三日を昔といふ、短時間をいふ。【一九】 長荆棘 いばらからたちがせたかくのびる、兵亂のため荒れたるをいふ。【二〇】 衰年 老衰のとき。【二一】 出處 出づると居ると、進退の義。【二二】 努力 つとめること、身を誤らぬやうにする。

【題義】 乾元元年十月、作者秦州にも居ること能はず南して成州の同谷へゆかんとして贊上人に別れを告ぐる詩なり。

【詩意】 さまざまの川水は日日東に流れつつあるが、自分もまた旅客として甲地から乙地へと去り移つてやまぬのである。自分の生活はこまることにおちつきなくなつたよははされてのみあるが、これはいつはてしがつくことであらうか。贊公は佛門の長老であらせられ、罪によりて都から放逐されて此地(秦州)へ來られた。ここでもまた世俗の風塵にかかりたまうたかして、すこぶるやつれたかほつきをしてをられる様である。自分はあしたに楊柳の枝を手折つてお別れをしたとおもうてゐるのに、はや

ここへこられて豆が二度もみのる時日が過ぎてゐる。このからだは浮き雲のやうにただよはされてゐるものだ、どうして必ず南へとぶとか北へとぶとか方角を定めることができませうぞ。自分は見知らぬ地方（秦州）であなたといふ舊友にであうて、はじめて遠慮なく思ふことを吐き出せるとよろこんだ。ところがここは都からは遠くとりでの地が寒く、歳暮にのぞんでうるごえるの目にせまられてをる、（だからこの地を立ち去らうとするのである。）あなたにお別れせんとするときはたそがれになりかかつてをる。野らの風はわたくしの旅衣をさむく吹く。林にかへる鳥はみんなつばさをすぼめて飛ぶものはなく、馬のいななきさへ住みなれたものうまやのふみ板をこひしたふかのごとくである。我我一身上の事ばかりではありませぬ。むかしお互にあうたりわかれたりした都の地方をこらんなさい。二三日のうちに荒れはてて荆棘がのびてゐるではありませぬか。おたがひみたところでもとも老衰の年になつてをりまする、どうかめいめい進退の節をあやまらぬやうにつとめようではありませぬか。」

兩當縣吳十侍御江上宅 兩當縣の吳十侍御が江上の宅

寒城朝煙淡、山谷落葉赤、寒城、朝煙淡し、山谷、落葉赤し。

陰風千里來、吹汝江上宅、陰風、千里より來る、吹く汝が江上の宅。
 鷓鴣號枉渚、日色傍阡陌、鷓鴣、枉渚に號ぶ、日色、阡陌に傍ぶ。
 借問持斧翁、幾年長沙客、借問す持斧の翁、幾年ぞ長沙の客。
 哀哀失木狖、矯矯避弓翮、哀哀たり失木の狖、矯矯たり避弓の翮。
 亦知故鄉樂、未敢思宿昔、亦知る故郷の樂しきを、未だ敢て宿昔を思はず。
 昔在鳳翔都、共通金閨籍、昔、鳳翔の都に在り、共に金閨の籍を通ず。
 天子猶蒙塵、東郊暗長戟、天子も猶蒙塵、東郊、長戟暗し。
 兵家忌間諜、此輩常接跡、兵家、間諜を忌む、此の輩常に跡を接す。
 臺中領舉劾、君必慎剖析、臺中、舉劾を領す、君必ず剖析を慎む。
 不忍殺無辜、所以分黑白、無辜を殺すに忍びず、所以に黑白を分てり。
 上官權許與、失意見遷斥、上官權に許與す、意を失ひて遷斥せらる。
 朝廷非不知、閉口休歎息、朝廷、知らざるに非ず、口を閉ちて歎息するを休む。
 仲尼甘旅人、向子識損益、仲尼、旅人を甘んず、向子、損益を識る。

【題義】 乾元二年十月、作者秦州を去り、成州同谷に赴かんとす。舊説には作者その途中に兩當縣を經過して吳侍御が宅によぎりたりといへり。余は果して然りとも信する能はざるも、しばらく之に依る。又舊説には吳侍御は時に長沙にありて兩當縣の宅は主人不在なりしものなりといへり。これ本詩の「幾年長沙客」を實句とみなし譬喩と見ざるの誤なり。余は作者わざわざ吳侍御をたづね、面にあたり陳謝したる作なりとみるものなり。

【詩意】 冬ぞらの縣城に朝の煙がうすくういてをり、谷間に落ちる葉の色が赤くみえる。いま遠くからつめたい風がやつてきて、おまへのかはそひの宅のところを吹いてゐるのだ。をれまがつたみぎには關難がなきさけんである、田野のたてよこの路に日の光がさしそへてゐる。誠みにおたづねする、侍御史たる君はここへながされものになつていくとせにならるのか、と。おまへはたとへばあはれにも木からはなれた狄の様なものであり、弓矢を避けて高く飛びあがつてゐる雁の様なものだ。おまへとてもこんなところに居るより故郷の方がいくら楽しいかは知つてゐるのだが、おまへは昔のこととは思はうとはしないのだ。むかし鳳翔の行在所に居たときは、我我は共に名籍を宮門に通じて仕官をした。その頃は天子さへ賊のために逃げ出しあそばされて、兩京の東の野外は長戟で暗くなつてゐた。兵法家の道では敵の間諜といふことをいみきらふのだが、いつもそんな奴等がひききりなしにはひつてゐた。(その奴等はどんなことをたくらむかしたものでない。)このをり君は御史臺で善人を

擧げ悪人を弾劾することを掌り、あくまで用心して事件の内容を微細にしらべてゐた。そのため或る嫌疑のあつた人物があつたが、無罪の人だからそれを殺すには忍びないで、はつきり黑白を辨別してやつた。君の長官はうはばかりに君の意見に賛成したが、君はその長官のごきげんをそねてとうとう官位をしりぞけてゐなかつた。朝廷でもその真相はわかつてゐないではなかつたが君のためにどうともしてはくれぬ。君はそれでもだまつて口を閉ぢてなげきもせぬ。あだかも孔夫子が東西に奔走する旅人たるを甘んじ、向子平が損益の卦を讀んで富貴貧賤の道理をさつてゐたとおなじ様な態度であつた。自分はその時左拾遺の官をかたじけなうしてをり、天子の殿陛のまぢかくお仕へまをしたのである。しかるにこのさまをみてゐながら君が地方へ遷謫される様なさわざを見るに至つたことは、なんとも申譯のないことで死にいたるとも自己の責をふさぐことはできぬのである。自分はこれから旅路にでかけるのであるが心になはぬことが多いのだ、門外に一步出れば自分の氣にかなふことはすこしも無いのだ。あなたに對してはしかく明明白白の義理にさへそむいてをる、これをおもへばうらめしくおもはれてたださへ白い頭が一層白うなる様なさぢがする。」

發秦州【原注】乾元二年自秦州赴同谷縣紀行。

秦州より發す。【原注】乾元二年秦州より同谷縣に赴くと、其行を記す。

我衰更懶拙。生事不自謀。我衰へて更に懶拙なり、生事自ら謀らす。

無食問樂土。無衣思南州。食無うして樂土を問ひ、衣無うして南州を思ふ。

漢源十月交。天氣如涼秋。漢源十月の交、天氣、涼秋の如し。

草木未黃落。況聞山水幽。草木未だ黃落せず、況んや山水の幽なるを聞くをや。

栗亭名更嘉。下有良田疇。栗亭名更に嘉し、下に良田疇あり。

充腸多薯蕷。崖蜜亦易求。腸に充つるに薯蕷多く、崖蜜亦求め易し。

密竹復冬笋。清池可方舟。密竹には復冬笋あり、清池、舟を方す可し。

雖傷旅寓遠。庶遂平生遊。旅寓の遠きを傷むと雖も、庶はくは平生の遊を遂げむ。

此邦俯要衝。實恐人事稠。此の邦、要衝に俯す、實に恐る人事の稠きを。

應接非本性。登臨未銷憂。應接、本性に非ず、登臨未だ憂を銷せず。

谿谷無異石。塞田始微收。谿谷、異石無く、塞田始めて微しく收む。

豈復慰老夫。惘然難久留。豈に復た老夫を慰めむや、惘然、久しく留まり難し。

日色隱孤戍。烏啼滿城頭。日色、孤戍に隠れ、烏啼きて城頭に滿つ。

中宵驅車去。飲馬寒塘流。中宵車を驅り去り、馬に飲ぶ寒塘の流れ。

磊落星月高。蒼茫雲霧浮。磊落、星月高く、蒼茫、雲霧浮ぶ。

大哉乾坤內。吾道長悠悠。大なる哉乾坤の内、吾が道長く悠悠たり。

【字解】【一】秦州 甘肅省秦州。【二】同谷縣 甘肅省階州の成縣なり、成縣はもと西康州治たり、唐の貞觀の初には成州に屬せしめ、廣康州の同谷縣を兼ね領す、天寶の初同谷郡とし、乾元の初復成州となす、作者いま同谷縣といふときは當時かく稱せしとみゆ、位置は秦州の殆ど正南にあたり、九域志には秦州から成州まで西南二百六十里とあり。【三】懶拙 ぶしやうにて世わたりべた。【四】生事 くらしむきのこと。【五】樂土 安樂なところ。【六】南州 南方の地方。【七】漢源 漢水の發源地。成縣には東河源と南河源ありてともに飛龍峽に入りて嘉陵江に注ぐ、而して嘉陵江は即ち漢水の上流の名なり。【八】十月交 詩經の「十月之交」の毛傳には交を日月の交會ととり、こゝは蓋し十月十一月の隙をさせるものならん。【九】黃落 さげんでおちる。【一〇】栗亭 隋時の縣の名、成縣の東五十里にあり、秦州を去ること百九十五里。【一一】田疇 穀の田を「田」、麻の田を「疇」といふ。【一二】薯蕷 やまのいも。【一三】崖蜜 蜜蜂ががけにてつくる「みつ」。【一四】密竹 こんではえた竹。【一五】冬笋 冬でできるだけの。【一六】清池 池の名は詳ならず。【一七】方舟 方は二つならべること。【一八】塵 塵幾、れがはくは。【一九】此邦 秦州をさす。【二〇】簡要衝 簡は臨のことし、要衝は交通の要路をいふ。【二一】人事稠 世俗の事務多し。【二二】應接 うけこたへをする。【二三】登臨 その地の山に登り水に臨みしてあそぶこと。【二四】異石 非凡の形狀をした石。【二五】塞田 とりでのある地の田。【二六】微收 すこし收穫がある。【二七】老夫 自ら稱す。【二八】惘然 氣のぬけた貌。【二九】孤戍 孤立せる屯兵所。【三〇】城頭

秦州の城のうへ。【三】寒塘 冬のつづみ。【三】嘉落 ばらばらにはなれてある貌。【三】蒼茫 はつきりせぬ貌。【三】吾道 有形の道路をいひ、裏面には履みおこなふみちの義もあらん。【三】長 ながく、とこしへに、常とも通ず、つれにの意。【三六】悠悠 ぼるかなる貌。

【題義】作者秦州にも居ることができなくなり、乾元二年の十月に秦州から出發して成州同谷縣に赴いた、その途中の紀行をかいたのが以下十二首で、是はその第一首である。作者時に四十八歳。同谷に赴いた理由は詩のなかにみえてゐる。

【詩意】自分は老衰しかかつてからこれまでよりも一層ぶしやうで世わたりべたになり、くらしむきのことなど自分で工夫しなくなつた。いまや食物が無いからどこか安樂にくらせる土地はないかと人になづね、衣が無いからあたたかい南方の地方のことをおもふのである。漢水の發源地（即ち同谷の地方）は十月十一月のあはひにも、天氣がすすしい秋のやうで、草木も黄ばんで落ちぬといふことであり、ましてそこには山水の幽邃なものがあると聞いてをる。栗亭などといふといかにも栗の産地らしくいい名であり、その下には良い田地がある、やまのいもが澤山あつて腹に十分つめこむことができるし、崖に産する蜂蜜もたやすく求められる。竹の密林には冬の筍があり、すんだ水をたたへた池には舟をならべて遊ぶこともできる。旅寓としては遠すぎるといふ缺點はあるが、どうかあちらへ往つてひごろの遊びを遂げたいとおもふのである。二この秦州は交通の要路にのぞんでゐて、俗事

が多すぎることを恐れるのである。雑多の人間に應接することは自分の本性でもなく、ここでは山水に登臨してみても自分の憂を銷すには足らぬのである。谷をのぞいても奇妙な石がみらるでなく、とりでのある田地からはやつとすこし收穫ができた様の始末だ、これではどうして自分を慰めることができよう、自分は生計の手段がこんなためばんやりとしてしまひ、とてもここにはながくとどまつてゐるわけにゆかぬのである。（それだからここを立ち去るのだ。）さて出發すると、太陽の色はさびしい屯兵所のあたりにかくれてしまひ、城頭にはいつばい鳥が啼いてゐる。よなかに車を驅りだして、冬のつづみの流れで馬に水をのませる。頭上は散亂して星や月が高くかがやいてゐる、前面には雲や霧がたちこめてはつきりとは見えぬ。ああ大なるかな天地の内、吾がゆくべき道程は永久に悠悠ときはまりなく前面によこたはつてゐる。」

赤谷

赤谷

天寒霜雪繁。遊子有所之。天寒くして霜雪繁し、遊子、之く所あり。「だ期あらず。豈但歲月暮。重來未有期。」豈に但歲月の暮るのみならむや、重ねて來らむこと未。晨發赤谷亭。險艱方自茲。晨に發す赤谷の亭、險艱方に茲自りす。

赤谷

亂石無改轍。我車已載脂。亂石、改轍無く、我が車已に載ち脂さす。
 山深苦多風。落日童稚飢。山深くして多風に苦しむ、落日、童稚飢う。
 悄然村墟迴。煙火何由追。悄然たり村墟の廻なるに、煙火何に由りて追はむ。
 貧病轉零落。故鄉不可思。貧病轉た零落す、故郷、思ふ可からず。
 常恐死道路。永爲高人嗤。常に恐る道路に死して、永く高人に嗤はるるを爲さむ。

【字解】 一 赤谷 明一統志に赤谷は秦州の西南七里にあり、中に赤谷川ありと、是ならん。二 遊子 たびびと、自己をさす。
 三 之 ゆく。四 豈但二句 かかる故に心さびしとの意をふくめたり。五 歲月暮 十月末の頃なればとしくれかかるといふ
 なり。六 重來 二度ここへくる。七 期 時期。八 卒 旅客のやすみば。九 茲 此地をいふ。一〇 亂石無改轍 北
 征の石類古車轍と同意、石亂れたちてそれがみな同一のわだちをいただいてゐる、但し我よりいふときは亂石のための故に別途を取
 らずそのおなじ石みちをゆくことをさす。一一 載脂 詩經の語、すなはちあぶらさす、車のくまびにあぶらなくれること。一二
 童稚 こともら。一三 悄然 しょんぼり、心さびしき貌。一四 村墟 村の廢墟、「むら」をいふ。一五 煙火 村人のたく炊
 煙をさす。一六 追 それにおひつく、そこまで達するをいふ、「追」は「煙火」を支配する動詞なり。一七 貧病 貧乏と病氣と
 により。一八 不可思 故郷は勝手に思うてもよいわけであるが、今は思ふことさへできない、とは悲慘の極なり、蓋し故郷已に摧
 殘せられ歸るべき見込みも絶えられたればなり。一九 死道路 「論語」の語、みちばたにのたれ死にする。二〇 爲高人嗤 爲高人
 所嗤の略、高人は徳のたかい人、嗤は「わらふ」。

【題義】 同谷紀行の第二首にして秦州を發して最初のかかりの難場所たる赤谷といふ處をとほるとき
 の詩なり。

【詩意】 天が寒く霜雪がしげくおく、このときたびびとたる自分は一地をさしてゆくのである。歳とし
 くれかかるといふためばかりではない、ここは二度くるといふときもありはすまい。(とおもふと悲かな
 しいのである。) 日の出のころ赤谷の亭やまばから出發する、道路の險艱たんげんはここからはじまるのである。
 石の亂れ立つ路みちだがその同じわるいみちを車くるまをはしらせ、自分の車にははやたびたびあぶらをさす。
 山はふかくなつて風の多く吹くのにこまるところへ、日も落ちかかつてこどもらはひもじがる。村むら
 とをながめるとずつと遠方とほにある、どうしたらあんなところまで追ひつけようか、など心こころぼそくおも
 ふ。自分は貧乏と病氣によつていよいよますますおちぶれた。今は故郷のことは思ふことさへかな
 はぬ。いつも自分は途中でのたれ死しにをして、高德ある人のものわらひになりはせぬかときづかうて
 をる。

鐵堂峽 てつどうけつ
 山風吹遊子。縹緲乘險絕。山風、遊子を吹く、縹緲、險絶に乗す。
 硤形藏堂隍。壁色立精鐵。硤形、堂隍を藏す、壁色、精(積)鐵立つ。

徑摩穹蒼蟠。石與厚地裂。
 修纖無垠竹。嵌空太始雪。
 威遲哀壑底。徒旅慘不悅。
 水寒長冰橫。我馬骨正折。
 生涯抵弧矢。盜賊殊未滅。
 飄蓬踰三年。回首肝肺熱。

徑は穹蒼を摩して蟠り、石は厚地と裂く。
 修纖なり無垠の竹、嵌空なり太始の雪。
 威遲たり哀壑の底、徒旅、慘として悦ばず。
 水寒くして長冰横はる、我が馬、骨正に折る。
 生涯、弧矢に抵る、盜賊殊に未だ滅せず。
 飄蓬、三年に踰ゆ、首を回らせば肝肺熱す。

【字解】

【一】 鐵堂峽 秦州の西南六十五里許の處にある峽の名、峽は山附來、水曰、峽とありて、山かひのこと。【二】 懸巖 氣連りてかすかにみゆるさま。【三】 險絕 絶絶と同じ、絶ははなはだしきないふ。【四】 嵌空 嵌は峽と別字なるも同義に用ひたり、或は寫訛か。【五】 嵌空 嵌はたがいざしき、隙は「城のからぼり」ないふ、山體を空とみ、豁谷を隙とみたるならん、この峽の形はここに空と隙とを藏するがごとし、余往年嘗て此句に別解を取れることあるも今此に訂正す。【六】 壁色 山の崖壁のいろ。【七】 精鐵 精の字本來積に作る從ふべし、仇氏此句五字みな入聲の字のみにて讀むに順ならずとて精の字に従へるも、余は積の字に従ふ。【八】 摩、こする、接近の甚しきないふ。【九】 穹蒼 穹蒼、弓なりに彎曲せるあなぞら。【一〇】 厚地 大地ないふ。【一一】 修纖 修は骨の通借、ながし、纖はほそし。【一二】 無垠 はてしなし、廣がりないふ。【一三】 嵌空 うつろなる貌、玲瓏といふの類、余嘗て「空にはめぐむ」義とし峰頂の雪をさすと考へたり、案するにこれ壑底に存する雪のさまないふ、次の「哀壑」へかかる語なり、今訂正す。【一四】 太始雪 天地のはじめ以來とけぬ雪。【一五】 威遲 道のうれうれするさま。【一六】 哀壑 あはれなもよほすたに。【一七】 徒旅 行旅のなかま、作者の一行のものをさす。【一八】 抵弧矢 抵は「あたる」、弧矢は易擊辭の弧矢之利、以威天下「を用ふ、弧矢は

弓矢、官軍の武力をさす、「あたる」とはそのときによつたりしなないふ。【一九】 盜賊 賊軍をさす。【二〇】 飄蓬 秋のよもぎの葉のひるがへることく身の轉轉してあるくないふ。【二一】 踰三年 天寶末よりかぞへて今年は三年以上になる。

【題義】 同谷紀行の第三首。鐵堂峽經過のときの作。

【詩意】 山の風が旅人たる自分を吹く。自分は空氣のかすかにつらなつてゐる非常な險阻なところをのぼつてゆく。この山かひの形は堂のそばに空堀をほつてある様なきまで、かたへの絶壁の色は堆積した鐵が立てられてる様だ。山のこみちはあをぞらを摩するほどに高くわだかまつてをる。石は大地と共につんざかれたりしてゐる。峽側にはながくほそい竹林が際限もなくつづいたり、ひくい處には太古以來とけぬ雪がすきとほる様にきれいに横はつてゐる。かくしてうねりくねつてさびしいたにの底の方へくだると、一行皆のものはものがなくふきげんになる。谷川の水は寒くしてながい。氷塊などがあり、之にふるれば我の馬は骨が折られるほどである。自分の生涯は盜賊がおこつて官軍がそれを討伐するため弓矢をうごかすの時にあたつた。不幸にして盜賊どもはまだほろびぬ。もはや飄泊生活を送ること三年以上にもなる、首をめぐらしてこんなことをかかんがへるとうれひのあまり肝や肺が火のやうにあつくなるのをおぼゆるのである。

鹽井

鹽井

鹵中草木白。青者官鹽煙。

鹵中、草木白し、青き者は官鹽の煙なり。

官作既有程。煮鹽煙在川。

官作既に程有り、鹽を煮れば煙、川に在り。

汲井歲措措。出車日連連。

井を汲むこと歲に措措たり、車を出だすこと日に連連たり。

自公斗三百。轉致斛六千。

公自りす斗に三百、轉致す斛に六千。

君子慎止足。小人苦喧闐。

君子、止足を慎む、小人、喧闐なるに苦しむ。

我何良歎嗟。物理固自然。

我何ぞ良に歎嗟せむ、物理固より自然なり。

【字解】

【一】鹽井。しほなくみ取る井なり、元和郡國志に曰く、鹽井は成州長道縣の東三十里に在り、水、岸と齊し、鹽練めて甘美、之を食すれば氣を破る、鹽官の故城は縣の東三十里に在り、嵯家(山の名)の西四十里に在り、相承けて煮ることを營む、味、海鹽と同じ、と。長道縣は今の梁昌府西和縣にあり、成州よりは西北にあたる、以て鹽井の位置を知るべし。【二】鹵。鹽分を含んだ地をいふ。【三】官鹽。官製のしほをやくけむり。【四】官作。官の作業。【五】程。定めぬ課程、製鹽額の進度。【六】歲。一歲のうち。【七】措措。力を用ふる貌。【八】出車。できたしほを積んだ車を出すこと。【九】日。日日。【一〇】連連。ひきつづく貌。【一一】自公。官から拂ひさげること。【一二】斗三百。一斗につき三百錢。【一三】轉致。拂ひさげをうけた商人が需用者へうつし賣ること。【一四】斛六千。一石につき六千錢、即ち一斗につき六百錢にして倍の利得をとる。【一五】慎止足。謹慎して止まり足ること。【一六】喧闐。やかましくさわぐ、鹽價のたかきについて不平の聲多きなり。【一七】我何一句。自己をとがめたる語、實は深くなげくなり。

【題義】

同谷紀行の第四首。鹽井をすぎて鹽商の暴利をむさばるをなげきたる詩なり。

【詩意】

鹽分をふくんだ地方は草木の葉まで白くみえてゐるが、そこに青青とたちのぼるのは官製のしほをやくけむりである。官業には一日の製鹽額のきまりがある、それでせつせとしほをにるので煙が川のうへまで横はるのである。年中骨を折つて井から鹽をくみだし、毎日ひききりなしにできた鹽を車につんではつみいだす。官から受けたす價は一斗三百錢だが、人民に轉送される時には一斗六百錢になる。君子たるものは足ることを知つて暴利をむさばらぬ様にせねばならぬ。さうでないといふと細民たるものは喧騒を極めてしかたのないものだ。かくいうたとしてむだごとだのになんで自分は自分をなげくのであるか。細利を争ふことは物ごとの道理に於てあたりまへのことではないか。

寒峽

寒峽

行邁日悄悄。山谷勢多端。

行邁、日に悄悄たり、山谷、勢、多端なり。

雲門轉絕岸。積阻霾天寒。

雲門、絶岸轉ず、積阻、天寒に霾る。

寒硤不可度。我實衣裳單。

寒硤、度る可からず、我實に衣裳單なり。

鹽井 寒峽

況當仲冬交。沂沂增波瀾。
野人尋煙語。行子傍水餐。
此生免荷戈。未敢辭路難。

況んや仲冬の交に當り、沂沂、波瀾を増すをや。
野人、煙を尋ねて語り、行子、水に傍うて餐す。
此の生、戈を荷ふことを免る、未だ敢て路の難きを辭せず。

【字解】 〔一〕 寒峽 峽の名か、單に寒天の峽をいふか不明。 〔二〕 行過 ゆきゆく。 〔三〕 悄悄 心のうれふるさま。 〔四〕 多端 一様ならざるをいふ。 〔五〕 雲門 雲の横はれる門、即ち絶岸をさす。 〔六〕 轉 歩につれてかはるをいふ。 〔七〕 絶岸 きつたての崖岸。 〔八〕 積阻 積みかさなりたる險阻の地。 〔九〕 飄 ちちの雨ふる。 〔一〇〕 天寒 さむざら。 〔一一〕 寒硖 題の寒峽と同じ。 〔一二〕 度 わたる、こゆること。 〔一三〕 沂沂 或は水をさかのぼり、或は水にそふ。 〔一四〕 野人 附近に住む農民。 〔一五〕 行子 旅行するもの、自己の一行をさす。 〔一六〕 荷戈 「伯兮」の詩に伯也執戈、爲王前驅」とみゆ、戈は一丈二尺のほこなり、荷戈とは兵役に従事するをいふ。

【題義】 同谷紀行の第五首。寒峽のさまと、經過の感想をのぶ。

【詩意】 日日旅行をつづけてゆくと心がものがなくなる、それは山や谷のありさまがますますさまざまになつてくるからだ。雲の門ともみまがふ様なきつたての岸がうつりかはつてゆくし、さむざらのをりからいくへもの險阻のところ土の雨がふつたりする。自分はずい衣裳をきてをるのだ、かやうな寒い山あひはなかなかこすことがむづかしい。そのうへ十一月頃のこととて谷川にそうたりさかのぼつたりすると波もよけいにおこるのである。かかるところで田野の人人は煙のなかで相手をた

づねて話をしてゐるのもあるし、また自分等は川べりで食事を取つたりする。なかなか難儀なことがあるが、すでに此の世に於て自分は武器をになうて兵役に従ふ苦しみから免れてゐる自分である、それをおもへば道路の難儀をするぐらゐのことは辭退する所ではない。

法鏡寺

法鏡寺

身危適他州。勉強終勞苦。
神傷山行深。愁破崖寺古。
嬋娟碧蘚淨。蕭滅寒籜聚。
回回山根水。冉冉松上雨。
洩雲蒙清晨。初日翳復吐。
朱萼半光炯。戶牖粲可數。
拄策忘前期。出蘿已亭午。
冥冥子規叫。微徑不敢取。

身危くして他州に適く、勉強するも終に勞苦なり。
神は傷む山行の深きに、愁は破る崖寺の古りたるに。
嬋娟として碧蘚淨く、蕭滅として寒籜聚る。
回回たり山根の水、冉冉たり松上の雨。
洩雲、清晨に蒙ふ、初日翳はれて復た吐かる。
朱萼半ば光炯、戸牖、粲として數ふ可し。
策に拄へられて前期を忘る、蘿を出づれば已に亭午なり。
冥冥、子規叫ぶ、微徑、敢(復)取らず。

【字解】【一】法鏡寺、寺の名、所在不明、ただこれ尙秦州にあるならんといへり。【二】道、ゆく。【三】勉、苦ないといふまじとつとむるなり。【四】神、精神。【五】愁、なぐさめらるること。【六】崖、法鏡寺をさす。【七】禪、うつくしき貌。【八】舞、せにこけ。【九】蕭、さびしきさま。【一〇】箒、竹のかは。【一一】回、軒回のさま。【一二】丹、次第に生ずるさま。【一三】洩、山よりもれ出づる雲。【一四】蒙、おほひかぶさる。【一五】清、はれたあさ。【一六】初日、出そめの太陽。【一七】雲、雲のかげにせらるること。【一八】吐、雲からはきだされる。【一九】朱、あかきいらか。【二〇】烟、かがやく。【二一】集、きぢめくさま。【二二】可、一かぞへることができぬ。【二三】注、つみになさへられる、つみをつくこと。【二四】前、將來の旅期限。【二五】出、霧はひめかつら、松柏にはひかがるものなり、霧の一字にて寺林をさす。【二六】亭、正午。【二七】冥、くらがりのさま。【二八】子規、ほととぎす。【二九】復、ほそいこみち、この寺へはひるみち、蓋し寺は通路より、このみちをとりていりこむなるべし、寺より出づればこの徑はふたたびとほることなし。【三〇】不、敢（復）取、敢は「あへて」、おしきつての義、復は「ふたたび」の義、孰れにても通ずるも余は「復」の字よろしかとおもふ、取とは取徑、即ち「この徑に由る」をいふ。

【題義】同谷紀行の第六首、法鏡寺のさまぞのぶ。

【詩意】自分は一身の安危にせまられて他の州へゆくのであるが、骨折りごとだとおもふまいとはするがつまり骨折り仕事である。あまりに山みちをふかくはひるので精神はいたむが、にはかに崖のところに古寺がみえたので愁のころがうち破られた。みれば庭前に青いけがきよらかにしきつめてある、竹の皮が風に吹きよせられてゐる。山の水はうねつて音をたてて流れ、松の上からはぼつりぼつり雨がふりそそぐ。すがすがしいあしたながらに峰からわきてた雲がおほひかぶさつてゐたが、

かげつた初日（はつひ）がまたによつきり吐きだされた。いままでうすぐらくあつた朱（あけ）のいらかも半分（はんぶん）はさらきらとみえ、戸（と）や扉（まど）も明（あき）かに幾枚（いくまい）とかぞへられるやうになつた。景色（けしき）にみとれて杖（つゑ）をついたまようつかりゆくさきの旅程（りょてい）をもうち忘れてゐたが、氣（き）がついて寺林（じりん）の蘿蔭（つたかげ）からたちでるともうまひるどきだ。くらがりのところで子規（こき）がなきさけぶ。この寺（てら）への小みちは今度（こんど）がとほりはじめでまたとほりをさめなのである。

青陽峽

青陽峽

塞外（さいがい）苦厭（くえん）山（やま）南行（なんかう）道（みち）彌（や）惡（あく）。
 岡巒（かうらん）相（あ）經（けい）互（ご）雲（うん）水（すい）氣（き）參（さん）錯（さく）。
 林迴（りんかい）硤（せき）角（かく）來（きた）天（てん）窄（せま）壁（へき）面（めん）削（けつ）。
 磧（せき）西（せい）五（ご）里（り）石（いし）奮（ふん）怒（ど）向（む）我（われ）落（おち）つ。
 仰（あ）看（かん）日（にっ）車（しゃ）側（かた）俯（ふ）恐（おそ）坤（こん）軸（じく）弱（じやく）。
 魑魅（ちみ）嘯（せう）有（あ）風（ふう）霜（そう）霰（せん）浩（かう）漠（ぼく）。
 昨（さく）憶（おぼ）踰（り）隴（りょう）坂（ばん）高（かう）秋（しゅう）視（し）吳（ご）嶽（たく）。

塞外、苦だ山に厭く、南行すれば道彌惡し。
 岡巒、相經互す、雲水、氣、參錯す。
 林迴に硤角來り、天窄くして壁面削る。
 磧西、五里の石、奮怒、我に向ひて落つ。
 仰いで日車の側くを看、俯して坤軸の弱からむことを恐る。
 魑魅嘯いて風有り、霜霰、浩として漠漠たり。
 昨、憶ふ隴坂を踰えしとき、高秋、吳嶽を視き。

東笑蓮華卑。北知崆峒薄。

東、蓮華の卑きを笑ひ、北、崆峒の薄るを知る。

超然侔壯觀。已謂殷寥廓。

超然、壯觀を侔しくす、已に謂へらく寥廓に殷ると。

突兀猶赴人。及茲歎冥漠。

突兀として猶人を赴ふ、茲に及びて冥漠なるを歎す。

【字解】

【一】青陽峽 秦州の西路にあたる峽の名、所在不明。【二】塞外 秦州地方をさす。【三】南行 同谷をさして南にゆく。【四】經互 たてにはへ、よこにわたる。【五】氣 雲水の氣。【六】參錯 いたりまじる。【七】林 峽角の林。【八】峽角 峽角に同じ、峽の一隅をいふ。【九】來 こちらが進むことなれども峽角を主にしていふ。【一〇】天窄 絶壁のひまよりながむる故に天はせまし。【一一】礙 路と同じ、たに。【一二】日車側 日車は太陽をいふ、古傳説に太陽は車にのりてはしると考へらる、側は「かたむく」。【一三】坤軸弱 坤軸は地軸、現今といふ所の地軸とちがひ大地をささふる柱軸なり、弱とはこの厚地を載せるに力のたらぬこと。【一四】懸壺 人面獸身の山怪。【一五】浩 大なる貌。【一六】漠漠 ひろくよこたはる貌。【一七】昨憶 一に「憶昨」に作る、往月のことを追憶す、これは長安より秦州へ赴くときのことなり。【一八】隴坂 鳳翔府隴州西北にある大坂。【一九】吳嶽 鳳翔府汧陽縣西にある山。【二〇】蓮華 即ち華山、陝西西安府華陰縣にあり。【二一】崆峒 甘肅省平涼府の西にある山。【二二】薄 迫る、接近すること。【二三】超然侔壯觀 已謂殷寥廓 離解の句なり、余は倒叙とみる、故に二句前後置きかへてみるべし、已謂の句は過去に接し、「超然」の句は現在を併記す、已謂とは隴坂をこえたときもはやさやうにかんがへたといふなり、殷寥廓は吳嶽を主としていふ、殷は「當る」と訓す、史記天官書の衝股・南斗の「紫微」宋均が注に殷當也といへり、寥廓とは大空のひろさすがたをいふ、超然は衆山をたかく抜くさま、侔壯觀とはこの峽にて衆山をみおろす壯大ながめと、隴坂にて吳嶽を視しときのながめとが互敵しひとしきをいふ。【二四】突兀 つきたつさま、吳嶽の姿をいふ。【二五】猶赴人 今なほ我につきまとい来る。【二六】及茲 茲とは現在の時をさす。【二七】歎 感歎する。【二八】冥漠 天道造化の力の不可測をいふ、冥暗茫漠としてはつきりせぬなり。

【題義】同谷紀行の第七首。靜陽峽の狀を寫し、兼ねて往月隴坂をこえしときのさまと對照してのべたり。

【詩意】塞外秦州のあたりから既に山にはあきあきするほどであつたが、同谷に向つて南行すると道路はいよいよわるい。岡や小山がたてよこにつらなつて、雲水の氣が互に相まじはる。遠くに峽角の林がみえるとやがてそれが自分の方へくる。斷崖の壁面は削るがごとくそりたち天もせばめられてみえる。谿の西側およそ五里の間、巖石は怒つて我に向つて落ちんとしてゐる。仰ぎみれば太陽は早くかたむくかと疑はれ、俯して地にのぞめば地軸もこの險阻を載せるには力が足らぬかときづかはれる。風の鳴るのは魑魅が嘯くのであらう。霜や霰さへ吹かれてひろく敷かれてゐる。往の月に自分は隴坂を踏えたとき、秋ふかく吳嶽を視たことがあるが、あの時は、東は華山を卑しと笑ひ、北は崆峒山と相迫るをおぼえた。その時はやいかに吳嶽は大空に當つた雄姿を逞しくしてゐるものだと感じたが、この峽まできてもまた其の壯觀 兩者匹敵してゐる。即ちかの吳嶽の突兀たる姿が現になほ我をおひ來りつつあるので、是に於てか我我は造化の力の不可測なるを感歎せざるを得ぬ。

龍門鎮

龍門鎮

細泉兼輕冰。沮洳棧道濕。

細泉と輕冰と、沮洳、棧道濕ふ。

不辭辛苦行。迫此短景急。辭せず辛苦して行くを、此の短景の急なるに迫る。

石門雲雪隘。古鎮峰巒集。石門、雲雪隘、古鎮に峰巒集まる。

旌竿暮慘澹。風水白刃澀。旌竿、暮に慘澹たり、風水に白刃澀る。

胡馬屯成臯。防虞此何及。胡馬、成臯に屯す、防虞、此、何ぞ及ばむ。

嗟爾遠戍人。山寒夜中泣。嗟、爾、遠戍の人、山寒くして夜中に泣かむ。

【字解】 龍門鎮 甘肅階州成縣の東にありといへり、鎮は成兵の屯する所なり。【二】 細泉 ほとくながれるわきみづ。【三】 兼「と」。【四】 輕冰 うすくして浮べるこほり。【五】 沮洳 しめりけのある地。【六】 棧道 かけはしをわたした道路。【七】 短景 日かげみじかし、十一月なれば日はやくくる。【八】 石門 龍門の地形石壁立ちて門の如くなるなり。【九】 隘 其處をせまくする。【一〇】 古鎮 即ちこの鎮所。【一一】 旌竿 はたさを、鎮所にあるもの。【一二】 慘澹 あたりの氣象ものがなし。【一三】 白刃 戍卒の帯ぶる刀のしらは。【一四】 澀 しぶる、さびて光らぬなり。【一五】 胡馬 賊軍をさす。【一六】 屯成臯 屯は「たむろする」、あつまること、成臯は漢時の縣名、今河南開封府汜水縣西北にあたり、洛陽の東方にあり、乾元二年九月に安祿山が將史思明、東京（洛陽）を陥れて齊・汝・鄭・滑四州に及ぶ、成臯は鄭州のあたりなり。【一七】 防虞 賊軍をふせぎ、賊に備へる心くばりをする。【一八】 此 龍門鎮の軍隊をさす。【一九】 何及 おひつかぬ。【二〇】 遠戍人 この鎮の戍卒等をさす、遠とは成臯方面とかけはなれしをいふ。

【題義】 同谷紀行の第八首。龍門鎮を過ぎてその成卒をあはれむ作。

【詩意】 薄氷を帯びた細い泉が、じくじく流れだして棧道がしめつてゐる。そこを十一月の日脚のつ

まつて早く日のくれる時節に、辛苦をものともせずあるいてゆく。門形をなしてゐる石壁のところは雲や雪にふさがれてをり、その場所は峰巒が集中してゐるところである。鎮所の様子をみると旌竿の色も夕暮にあたつて憂ひの色をふくんでをり、風に鳴る水流で成卒がとがんとしてゐる白刃も光がない。いま胡賊の兵馬は遠く成臯のあたりに屯してゐる、それをふせぐにはこんな場所に鎮があつても間にあふことではあるまい。ああ汝等鎮をまもる人人よ、定めし山の中は寒くして夜なかに泣いてゐることであらう。まことに氣の毒なものだ。

石龕

石龕

熊羆咆我東。虎豹號我西。熊羆、我が東に咆え、虎豹、我が西に號ぶ。

我後鬼長嘯。我前猱又啼。我が後には鬼、長嘯し、我が前には猱又啼く。

天寒昏無日。山遠道路迷。天寒くして昏れて日無く、山遠くして道路迷ふ。

驅車石龕下。仲冬見虹霓。車を驅る石龕の下、仲冬、虹霓を見る。

伐竹者誰子。悲歌上雲梯。竹を伐る者は誰が子ぞ、悲歌して雲梯に上る。

爲官採美箭。五歲供梁齊。官の爲めに美箭を採り、五歲、梁齊に供す。

苦云直幹盡無以應提攜。苦に云ふ直幹盡きて、以て提攜に應ずる無しと。
奈何漁陽騎。颯颯驚蒸黎。奈何ぞ漁陽の騎、颯颯として蒸黎を驚かすや。

【字解】【一】石龜 龜は石室なり、かかるものあるによりて其地の名とせるならん、所在不明。【二】咆 吼。【三】賊 蕞蕞のたくひにて金色の尾を有すといふ。【四】仲冬 十一月。【五】虹霓 共に「にじ」のこと、明暗の差あり。【六】雲梯 たかいはし。【七】五歲 天寶十四載安祿山反してより乾元二年までなり。【八】梁 河南地方。【九】齊 山東地方。【一〇】苦云 苦とはこまつた様子をする事。【一一】直幹 まつすぐなみき。【一二】提攜 射手が手にてしつこと。【一三】奈何二句 詩人の語。【一四】漁陽騎 漁陽は遼山の根據地、今の直隸順天府地方、これ賊騎をさす。【一五】颯颯 風の吹く貌。【一六】蒸黎 人民のこと、「無家別」を見よ。

【題義】同谷紀行の第九首。山中の竹きりを見て世亂をいためる作。

【詩意】東には熊や熊がほえる、西には虎や豹がさけぶ。うしろには山鬼がうそぶく、前には賊がなぐ。(おそろしいことだ。)そらは寒く、たそがれて日は没してしまひ、山みちとほくして道路にゆきまよふ。あだかも石龜のもとに車を驅りたててくと仲冬であるのに「にじ」がみえる。(時ならぬことだ。)このときどこのものかしらぬが、悲しき歌をうたひながらたかいはしごにのぼつて竹を伐つてゐるものがある、これは政府のためにつばな箭竹をとつて五年のあひだ梁・齊の地方へ供給してゐるのだ。そのものにきくとこまつた様にして、「もうまつすぐな竹のみきはなくなつて、兵卒のものに應ずることができぬ」といふのだ。ああ、なんであの漁陽の叛騎らは風の吹きまくる如く人民を驚かすのであらうか。

積草嶺 【原注】同谷界。

積草嶺 【原注】同谷の界なり。

連峰積長陰。白日遞隱見。
颯颯林響交。慘慘石狀變。
山分積草嶺。路異鳴水縣。
旅泊吾道窮。衰年歲時倦。
卜居尚百里。休駕投諸彦。
邑有佳主人。情如已會面。
來書語絕妙。遠客驚深眷。
食蕨不願餘。茅茨眼中見。

【字解】【一】積草嶺 原注に同谷の界なりとあり、詩中に卜居尚百里とあれば、この嶺は秦州と成州との界に在りて同谷を距る、と百里手前のこととみゆ。【二】長陰 長距離にわたるくしり。【三】颯颯 風のおとのさま。【四】慘慘 おそろしささま。【五】蕨 と百里手前のこととみゆ。【六】長陰 長距離にわたるくしり。【七】颯颯 風のおとのさま。【八】慘慘 おそろしささま。【九】

山分。このみれにて二地のわかれめとなるをいふ、謂はゆる分水嶺なり。【六】路異。わかれちのこと。【七】鳴水。縣の名、陝西廣中府略陽縣の西にあり。【八】吾道窮。道とは有形の道路をさす。【九】衰年。老衰のとしごろをいふ。【一〇】歲時。一歲四時、旅行でくらす一年をいふ。【一一】休駕。車駕を休息させる、おちつくをいふ。【一二】投諸産。投はとびこんでゆくこと、諸産とは同谷の地になる衆くの賢人たち、善知の人人をさす。【一三】佳主人。よき主人、同谷の縣宰なるべし。【一四】來書。先方からよこしたてがみ。【一五】語絕妙。非常にいい文句。【一六】遠客。遠方の客、自己をさす。【一七】深眷。先方がふかくめをかけてくれること。【一八】藏。ぜんまい、粗食をいふ。【一九】不顧餘。餘とはそれ以外の事をさす。【二〇】茅茨。自己の住むべき同谷の屋舎のかやぶきのやれ。【二一】眼中見。實際見ゆるにはあらず、心眼にてみとむるなり。

【題義】同谷紀行の第十首。いよいよ秦州のみをさめとなる積草嶺と稱する分水嶺での作。

【詩意】峰つづきていつまでもくもりがつづく、そのひまから太陽が見えたり、隠れたりする。がさがさと風がふいて林中のさまざまのひびきがいたりみだれてきこえ、であふ所の巖石の形状は刻々恐ろしげなすがたにかはる。この嶺が同谷との分水嶺であり、この路は鳴水縣への通路とべつべつになるところだ。ここで自分の旅路もゆきつまりだ、この老衰では一年通じての旅にはあきあきする。ここから同谷の新住宅まではまだ百里ある、そこへついたら早く車をおろして知りあひの諸君の處へとびこまう。あの土地にはよい主人がゐて自分を迎へてくれる、逢はぬさきからこころもちだけはもはや面會した様な氣がする。先ごろよこしてくれた手紙の文面では何といふ親切ないことばがかいてあつたであらう、遠方の客たる自分はただただそれほどまでこちらを愛してくれるのかと驚くばかりだ。自分は戯でもたべて飢がしのがれさへすればいいのでそのほかのことを願ふのではない、はやそこに眼前にかやぶきの屋根がみえてゐるやうだ。

泥功山

泥功山

朝行青泥上。暮在青泥中。朝に行く青泥の上、暮に在り青泥の中。

泥濘非一時。版築勞人功。泥濘、一時に非ず、版築、人功を勞す。

不畏道途遠。乃將汨沒同。畏れず道途の遠きを、乃ち將に汨沒同じからむとす。

白馬爲鐵驪。小兒成老翁。白馬、鐵驪と爲り、小兒、老翁と成る。

哀猿透却墜。死鹿力所窮。哀猿、透なるも却つて墜つ、死鹿、力の窮する所。

寄語北來人。後來莫忽忽。語を寄す北來の人に、後來、忽忽たる莫れ。

【字解】【一】泥功山。同谷縣西二十里にある山なりと。【二】青泥。青色のどろ。【三】泥濘。ぬかるみ。【四】非一時。つねにかくの如くなるをいふ。【五】版築。版は定規、築は土をきれてつぎかためること。【六】人功。人力をいふ。【七】汨沒同。同汨沒と同じ、汨沒とはしづむこと、同とは一行のものもろともにの義。【八】鐵驪。まつくるのうま、泥にけがさるるをいふ。【九】成老翁。これも顔面のよこれてかく見ゆるをいふならん。或はいふ、小兒の輕捷なるも老翁の遲鈍に化するをいふと。【一〇】透。智慧のあるをいふならん。【一一】死鹿。鹿の死するをいふ。【一二】北來人。北方よりくる人。【一三】後來。我より後に來るにあたりて

【題義】同谷紀行の第十一首。泥功山の泥途のさまをのべたる作。

【詩意】朝も青い泥のうへをあるく。日ぐれになつても青い泥の中にをる。このぬかるみは只今かざりのことでなくいつものことで、版築の人力をわづらはしてゐるのである。自分は道の遠いことははばからないが、やがて皆もろともにぬかるみにおちこんでしまひはせぬかと氣づかふのである。ここでは白馬がくろうまにかはり、こどもも老人同様になる。はしこい猿もすべつておち、鹿も力つきては死んでしまふ。こんな場所だから北方からくる人人にまうす、あとからくるにはここをうつかりとほつてはなりませぬぞよ。

鳳凰臺 【原注】山峻人不至高頂。

鳳凰臺 【原注】山峻しくして、人、高頂に至らず。

亭亭鳳凰臺。北對西康州。亭亭たり鳳凰臺、北、西康州に對す。
西伯今寂寞。鳳聲亦悠悠。西伯、今寂寞たり、鳳聲、亦悠悠たり。
山峻路絕蹤。石林氣高浮。山峻しくして路、蹤を絶つ、石林、氣高く浮ぶ。

安得萬丈梯。爲君上上頭。安んぞ萬丈の梯を得む、君が爲めに上頭に上らむ。
恐有無母雛。飢寒日啾啾。恐らくは無母の雛有りて、飢寒、日に啾啾たらむ。
我能剖心血。飲啄慰孤愁。我能く心血を剖きて、飲啄、孤愁を慰せむ。
心以當竹實。炯然無外求。心は以て竹實に當てむ、炯然、外に求むること無し。
血以當醴泉。豈徒比清流。血は以て醴泉に當てむ、豈に徒に清流に比するのみなり。
所重王者瑞。敢辭微命休。重んずる所は王者の瑞なればなり、敢て辭せむや微命の。
坐看綵翻長。舉意入極周。坐に看む綵翻長じて、舉意、入極に周からむ。休するを。
自天銜瑞圖。飛下十二樓。天より瑞圖を銜みて、飛び下らむ十二樓。
圖以奉至尊。鳳以垂鴻猷。圖は以て至尊に奉じ、鳳は以て鴻猷を垂れ、
再光中興業。一洗蒼生憂。再び中興の業を光にし、蒼生の憂を一洗せむ。
深衷正爲此。羣盜何淹留。深衷、正に此が爲めなり、羣盜、何ぞ淹留するや。

【字解】【一】鳳凰臺 山の名、同谷の東南十里にありと。【二】亭亭 高き貌。【三】北對 北方は對しむいてゐる。【四】西康州 唐の武備の初、同谷に西康州を置く。貞觀中に廢せらる、今古名を用ひ同谷をさす。【五】西伯 周の文王をいふ、文王は殷の紂

至のとき西伯なり、西伯は西方諸侯のとりしまり役。【六】寂寞、さびしきさま。【七】悠悠、年代の遠くへだたるをいふ、文王の時には風、岐山に鳴く、今それよりはるか年代を経たり。【八】峻、けはし。【九】巖、人のあしあと。【一〇】石林、石柱のむれ。

【二】安得、希望なり。【三】爲君、君とは一般人をさす。【四】上上頭、上頭は山上の頂上。【五】無母雛、母をもたぬ鳳凰のひな。【六】啾啾、鳥のなくこゑ。【七】剖心血、心臓の血をたちわりてだす。【八】飲啄、のませ、ついでませる。【九】孤愁、母親なきひなのさびしきうれひ。【一〇】心、心臓。【一一】當竹實、竹の實のかはりとする。鳳凰は「竹實ニ非レバ食ハズ體泉ニ非レバ飲マズ」と稱せらる。【一二】炯然、かがやく貌、心中の光明なさま。【一三】無外求、他に何等の求むる所なきなり。

【一四】當醴泉、上に見ゆ、醴の泉の代りにする。【一五】比清流、清流は鶴の飲む者なり、今鳳凰の場合に借り用ふ。【一六】所重、我が之を重んずるわけは。【一七】王者瑞、帝王たる者の瑞祥とするものなるが故なり。【一八】微命休、自己のつまらぬ生命の終ること。【一九】綵鳳長、鳳雛のうつくしきたちればのびる。【二〇】舉意、鳳雛生長して高く舞ひあがる意をいづく。【二一】八維、周、八方のはてなすつかりとびめぐる。【二二】衛瑞圖、めでたき圖書をくちばしにくはへてくる、「春秋元命苞」に黄帝支尾（石室の名）ニ洛水上ニ坐シ大司馬容光等ト臨觀ス鳳凰圖ヲ衛ニテ帝ノ前ニ置ク黄帝再拜シテ圖ヲ受ケトみゆ。【二三】十二樓、漢書郊祀志下に武帝の時、方士言フモノ有り、黄帝の時五城十二樓ヲ爲リ以テ神人ヲ執期（地名）ニ候ツ、名ケテ迎年ト曰フ、ト。【二四】みゆ。【二五】至尊、最上の尊者、天子をいふ。【二六】鳳以、案するに上句に「圖以」とあり、此句に「鳳以」といふ、鳳は圖と對立せしむべきものに非ず、「鳳」は何等かの誤字ならんとおもはるれど暫く原文に據る。【二七】垂鴻猷、大なるばかりことを垂れる、垂れるとは後世までものこすをいふ。【二八】光、光輝あらしむる、大ならしむる。【二九】蒼生、人民。【三〇】深衷、心中の奥底、ふかきこころ、鳳雛をそだてて上述の如くせしめんとの念慮をさす。【三一】爲此、此とは上述の次第をさす。【三二】羣盜、賊軍をさす。【三三】池雷、ひさしくとどまる、數年にわたりて退散せざるをいふ。

【題義】同谷紀行の第十二首。鳳凰山の鳳雛を想像してのべたり。鳳雛が何を指すやに就ては、或は肅宗の長子廣平王俶（後に代宗となる）を除かんとせしことを指すといひ、或は房瑄・張鎰等の賢

相の排斥されんとするを指すといひ、明かならず。恐有無母雛として假定的に言ひなせるを以て之を見れば、それとさすものはなくとも單に自己の理想をのべしやも知れざるなり。

【詩意】高らかな彼の鳳凰臺は、北のかた西康州と相對してゐる。周の文王西伯の様な聖人も今はでず、鳳凰の聲も長く聞かれぬのである。この山はけはしくして人の足跡もたえ、石林のうへに浮べる氣が高くみえるばかりだ。もし萬丈もある梯があるなら、絶頂までのぼつてみたいものだ。そこにほともすると母親をうしなうた鳳の雛がゐて、毎日ちうちうないて飢寒を訴へてゐるかもしれぬ。さうなら自分は自分の心臓の血をめぐりだして、これを飲ませ啄ませてその可憐なみなしこの雛のうれひをなぐさめてやらう。我が心臓をば竹の實に代用し、専心はぐくんでやらう、そのほかに欲求はない。又我が血はそれを醴泉に代用してのませてやらう、單に清き流れの水をのませてやるぐらゐのこゝとではない。こんなに鳳凰を重んずるわけはそれが帝王の瑞祥であるからだ。この物のためには自分の微微たる生命が終つたとていとふところではない。かくそだててやれば雛にはゆくゆくいろどられた羽がのびて、その舞ひあがるこころはつひに八方のはてまでくまなくめぐつて、天からめでたい圖書をくはへて、十二樓のところへ飛んでおり、その圖をば萬乗の天子にささげたてまつり、鳳彼自身は偉大なる謀をのちのちまでのこし、唐の中興の業をふたたび光輝あらしめ、天下の人民の憂ひを一洗してしまふであらう。自分が此山をみて深き念慮をいだくのは此事のためなのである。ああ彼の

羣がれる盜賊どもはなんで長くいつまで退散せぬのであるか。

乾元中寓居同谷縣作歌七首

乾元中、同谷縣に寓居し、歌を作る 七首

有客有客字子美。客有り客有り字は子美、

白頭亂髮垂過耳。白頭亂髮垂れて耳を過ぐ。

歲拾橡栗隨狙公。歲 橡栗を拾うて狙公に隨ふ、

天寒日暮山谷裏。天寒く日暮る山谷の裏。

中原無書歸不得。中原、書無うして歸り得ず、

手脚凍皴皮肉死。手脚凍皴、皮肉は死す。

嗚呼一歌兮歌已哀。嗚呼一歌す、歌已に哀し、

悲風爲我從天來。悲風我が爲めに天從り來る。

【題義】 作者乾元二年十一月に同谷に到着して十二月に蜀に入れり。同谷に寓居せるは、わづかに一

【字解】 〔一〕同谷縣 甘肅省秦

州の西南にあたる階州成縣の地是

なり、唐にては成州といひ同谷縣に

治所をおく、秦州をさること二百六

十五里なり。〔二〕客 たびびと、

寓居の身ゆゑかきいふ。〔三〕歲

歲歲。〔四〕橡 橡栗の實。〔五〕狙

公 狙公の猿。〔六〕中原 中

原の河南省を流るる地方、洛陽附近

をさす。〔七〕書 書信。〔八〕歸

不得 不得歸の義。〔九〕皴 皺し

わだつ。〔一〇〕死 乾枯の甚しき

をいふ。

箇月のみ。寓居中の作、凡そ七首あり。これ其の第一なり。客居貧苦のさまをいへり。

【詩意】 ここに子美と字する旅人がゐるが、その男は頭は白く亂れた髪が垂れて耳よりもさがつてゐる。彼は山谷のうちで天寒く日の暮るるをりから、猿廻はしのあとにくつついて橡實や栗をひろうら歸ることもならず、手や脚は凍えしわだつて皮膚も肉もひからびてゐる。ああここに第一歌をうたふ、この歌聲は頭初からすであはれであり、天もそれに感ずるか自分のために天から悲しさうな風が吹いてくる。

〔一〕

〔二〕

長鏡長鏡白木柄。長鏡、長鏡、白木の柄、

我生託子以爲命。我が生、子に託して以て命と爲す。

黃獨無苗山雪盛。黃獨、苗無く、山雪盛なり、

短衣數挽不掩脛。短衣數挽けども脛を掩はず。

此時與子空歸來。此時子と空しく歸り來る、

【字解】 〔一〕長鏡 ながい型鏡

なり。〔二〕柄 すきの「たし」。

〔三〕子 「おまへ」「すき」をさす。

〔四〕命 生命。〔五〕黃獨 一に

「黃精」に作る、藥草の名。〔六〕數

挽 たびたびひつばる。〔七〕掩脛

掩は掩遮の義、おさへてかぶせるこ

と、脛は「はぎ」。〔八〕此時 歸

男呻女吟四壁靜。男呻、女吟、四壁靜なり。

嗚呼二歌兮歌始放。嗚呼、二歌す、歌始めて放つ。

閭里爲我色惆悵。閭里、我が爲めに、色惆悵す。

【詩意】 長い鐵の頭のついた白木の柄の杖よ。自分の生活はおまへをたよつて生命の親としてゐるのだ。山中の雪は盛にもつて黃獨の苗はみつからず、つんつるてんの短い衣を着て、いくらひつぱつても脛をかくすことはならぬ。このときおまへとから手でうちへもどつてくると、四方の壁だけがひつそり立つてゐるところで、家族の男女等は飢餓にくるしんでうなつてをる。ああ、ここに二度めの歌をうたふ、はじめてきままに歌ひだす、これをきいては近所の人たちも自分のためにうらめしげななほつきをしてくれる。

【題義】 飢餓のさまをいへり。

【詩意】 長い鐵の頭のついた白木の柄の杖よ。自分の生活はおまへをたよつて生命の親としてゐるのだ。山中の雪は盛にもつて黃獨の苗はみつからず、つんつるてんの短い衣を着て、いくらひつぱつても脛をかくすことはならぬ。このときおまへとから手でうちへもどつてくると、四方の壁だけがひつそり立つてゐるところで、家族の男女等は飢餓にくるしんでうなつてをる。ああ、ここに二度めの歌をうたふ、はじめてきままに歌ひだす、これをきいては近所の人たちも自分のためにうらめしげななほつきをしてくれる。

【三】

有弟有弟在遠方。弟有り弟有り遠方に在り。

【三】

【字解】 【一】弟 作者の第四人あり、頼・觀・豐・占・是なり、うち占

三人各瘦何人強。三人各瘦せたり、何人が強なる。

生別展轉不相見。生別展轉、相見す、

胡塵暗天道路長。胡塵、天に暗うして道路長し。

東飛駕鶴後鴉鶴。東に飛ぶは駕鶴、後には鴉鶴、

安得送我置汝傍。安んぞ我を送つて汝が傍に置くこと

嗚呼三歌兮歌三發。嗚呼三歌す、歌三び發す、一を得む。

汝歸何處收兄骨。汝歸るも何の處にか兄が骨を收めむ。

【題義】 弟をおもうてつくる。

【詩意】 自分には弟がある、かれらはみな遠方に居る。彼等三人どれもやせたものであるがそのうちでだれが強健であるであらうか。兵亂の塵が天をくらくするばかりで、彼等とのあひだの道路は長い、随つて自分は彼等とはいきわかれをして、各地をうつりあるいて面會せずにあるのである。東には駕鶴が飛び、うしろには鴉鶴が飛んでゐるが、どうしたらその鳥に送られて汝等の傍へ置いてもらふことができるのだらう。これで自分の歌は三度めである。逢はぬうちに自分は死ぬかもしれぬ。

おまへは歸つて来たところ、どこでわたしの骨をひろつてくれるのであらうか。(自分の死に場所は豫測できぬ。)

〔四〕

有妹有妹在鍾離。

妹有り妹有り鍾離に在り、

良人早歿諸孤癡。

良人早く歿して諸孤癡なり。

長淮浪高蛟龍怒。

長淮浪高うして蛟龍怒る、

十年不見來何時。

十年見ず、來るは何の時ぞ。

扁舟欲往箭滿眼。

扁舟往かむと欲すれば箭、眼に滿つ、

杳杳南國多旌旗。

杳杳南國、旌旗多し。

嗚呼四歌兮歌四奏。

嗚呼四歌す、歌四たび奏す、

林猿爲我啼清晝。

林猿我が爲めに清晝に啼く。

【字解】〔一〕妹 作者の「元日寄韋氏妹」詩(上卷三七〇頁)に近關韋氏妹、遠在漢鍾離、郎伯殊方、京華舊國移、とある妹なり。〔二〕鍾離 安徽省鳳陽府臨淮縣。〔三〕良人 夫と、即ち韋某をいふ。〔四〕諸孤癡 孤とは遺兒をいふ、癡は癡くして知なきをいふ。〔五〕長淮 淮水をいふ、鳳陽は淮水の南にあり。〔六〕蛟龍 以て盜賊の人を寄する者に比す。〔七〕來 妹がこちらへくること。〔八〕往 こちらから妹の方へゆく。〔九〕箭滿眼 旌旗は軍隊の用ふるもの、其の多きはども軍隊ばかりなるをいふ。〔一〇〕杳杳 是るか。〔一一〕南國 淮水地方をいふ。〔一二〕四奏 四たびその歌曲を奏でる。〔一三〕清晝 多旌旗 旌旗は軍隊の用ふるもの、其の多きはども軍隊ばかりなるをいふ。〔一四〕四奏 四たびその歌曲を奏でる。〔一五〕清晝 まひるなか。

【題義】

妹をおもふ作。

【詩意】鍾離には妹がある。彼の女はその夫は早くなくなり多くの遺兒はまだ智慧づかぬ。淮水のあたりは風浪が高く蛟龍の恐るべきものが怒りつつある。自分は十年も彼女と面會せぬがいつ彼女はこちらへ來ることができよう。こちらから小舟に乗つて往かうかとおもへば見わたすかぎり弓箭ばかりであり、はるばるとは南國の方も軍隊の旗ばかりたくさんある。ああ我が歌はこれで四たびめを奏するのである。これをきいては林の猿も自分に同情してまひるながら啼きたてる。

〔五〕

四山多風溪水急。

四山風多くして溪水急なり、

寒雨颯颯枯樹濕。

寒雨颯颯として枯樹濕ふ。

黃蒿古城雲不開。

黃蒿の古城、雲開けず、

白狐跳梁黃狐立。

白狐は跳梁、黃狐は立つ。

我生何爲在窮谷。

我が生何爲れぞ窮谷に在る、

中夜起坐萬感集。

中夜起坐して萬感集る。

〔五〕

【字解】〔一〕颯颯 是たはた風のあふる貌。〔二〕蒿 よしぎ。〔三〕古城 同谷縣城。〔四〕跳梁 はねくりまはる。〔五〕窮谷 けきつまつたに、同谷の地をいふ。〔六〕起坐 一起一坐。〔七〕魂相 不來歸故鄉 諸説多し、郎説をのぶ、魂を招くことは屈原・宋玉等の賦に見ゆ、生き靈をよびもどすことなり、

嗚呼五歌兮歌正長。嗚呼五歌す、歌正に長し、
魂招不來歸故郷。魂招けども來らず故郷に歸らむ。

杜甫自身の詩にも「魂招不來歸故郷」等の句あり、本句の意は離散せる魂は之を招くと雖も來らざれども願くは之を招きよせて共に故郷に歸らんと欲すといふに在らんか、一説には「魂已に自己に先ちて故郷に歸れり、故に之を招くと雖も來らず」ととく。これは「魂招けども來らず故郷に歸らむ」とみるなり。

【題義】窮谷に居るさびしさより歸郷の念をうごかすことをのぶ。

【詩意】四方の山には多く風が吹いて溪川の水が急に流れ、冬の雨が風にあふられて枯れた樹木がうるほされる。黄色いよもぎのはびこつた古城には雲がとざし、白狐ははねてとび黄狐はつつ立ちあがる。自分の生涯はなにとてかかる窮谷にをらねばならぬのか、夜なかに起きてみても坐つてみてもただ千萬無量の感が集り來るのである。これで第五歌であるが、その歌ふ聲やながい。からだを離れた魂は招いたとて來はせぬが自分はそれをよび迎へてともに故郷にかへりたいとおもふ。

〔六〕

〔六〕

南有龍兮在山湫。南に龍有り、山湫に在り、
古木龍嵒枝相樛。古木龍嵒、枝相樛す。

【字解】〔一〕南、同谷縣東南の萬丈潭をさすといへり、潭のことは次篇に出づ。〔二〕山湫、即ち龍のすむ「ふち」。〔三〕龍嵒、いかめしくしげりあふ貌。〔四〕樛、枝のまがり垂下するさま。〔五〕黃落、きばみでおつる。〔六〕蟄、穴ごもりする。〔七〕蟄蛇、「まむし」、龍は君に比し蛇は盜賊に比すといへり、しかし龍を自己に比し蛇を他の小人に比したるやも知れざるなり。萬丈潭の龍は自己に比しければなり。

木葉黃落龍正蟄。木葉黃落、龍正に蟄す、
蝮蛇東來水上游。蝮蛇東來、水上に游す。
我行怪此安敢出。我行いて此を怪む、安んぞ敢て出でむ、
拔劍欲斬且復休。劍を抜き斬らむと欲して且復た休す。
嗚呼六歌兮歌思遲。嗚呼六歌す、歌思遅し、
溪壑爲我廻春姿。溪壑、我が爲めに春姿を廻へさむ。

【六】游、遊の音借ならん、あそぶ。【七】此、蝮蛇のさまをさす。【八】出、居處より外へでる。【九】斬、蛇をきる。【一〇】歌、歌想なり。【一一】廻春姿、春時の姿を回復する、冬なればこそ龍は蟄す、春になれば穴より出づ、故に春の來らんことをわがふたり。

【題義】山湫の龍についての感のをのぶ。

【詩意】南方の山の「ふち」に龍がある。そこは古木がいかめしくしげりあひ、枝がたがひに垂れさがつてゐる。木の葉は黄ばんで落ちたので龍はちやうどあなごもりをした、そこへまむしへびが東の方からやつてきてふちの水の上にあそんでゐる。自分はでかけてはみたもののこんなふしぎなさまを見てはどうしてでかけられようぞ、劍をぬいてそのへびを斬らうかともおもうたがまたやめてしまつた。ああこれは第六歌である、六歌となると歌想もはやくはでてこぬ。願ふところは溪壑が自分の

ために早く春のすがたを回復してくれることだ。そんなら龍もまたでかけることができるだらう。』

〔七〕

〔七〕

男兒生不成名身 男兒生れて名を成さず、身已に老ゆ、
己老。

三年飢走荒山道 三年飢走す、荒山の道。

長安卿相多少年 長安の卿相、少年多し、かるべし。

富貴應須致身早 富貴には應に須らく身を致すこと早

山中儒生舊相識 山中の儒生は舊相識、

但話宿昔傷懷抱 但宿昔を話すれば懷抱を痛ましむ。

嗚呼七歌兮情終曲 嗚呼七歌す、情として曲を終ふ、

仰視皇天白日速 仰いで皇天を視れば白日速なり。

【字解】 〔一〕三年 至德二載より乾元二年まで。〔二〕荒山 あればた山。〔三〕卿相 卿や宰相。〔四〕致身 致とは富貴の地位へ身をもつてゆくこと。〔五〕山中儒生 舊説にいふ、同谷山中の友、たとへば李衡の如きをさす、と。余は作者自己をいふものと考ふ。〔六〕舊相 ふるくからのしりあひ、これは自己と長安卿相とのあひだがらをいふ。〔七〕但話 話はだけかとほなしするなり、舊説によれば作者が儒生と話するなり。〔八〕宿昔 むかしのこと。〔九〕懷抱 胸中をいふ。〔一〇〕情 しよんぼり、心のひきたため貌。〔一一〕終曲 曲はこの七歌の曲。〔一二〕速 走ることのすみやかなこと、時間の早くすぎること。

【題義】 長安卿相の榮達と自己晩年の不遇とを對比して感慨をのべたり。七律の「同學少年多不レ賤」と同意ならん。

【詩意】 自分は男兒でありながら生れてから功名を成しとげることができぬうちに年とつてしまひ、三年の間あはれてた山の中の道路を飢餓に驅られて走つてゐる。長安の卿相はとみれば彼等は多くは少年のともがらである。してみれば人たるものは早く我が身を富貴の地位に致さねばならぬものであらう、老いてはだめだ。この山中の儒生たる自分ももとは彼等富貴の人人とはしりあひのもののだが、二者のへだたりはどうだ。だからただむかしはなしをしさへすれば自分は胸のうちがかなしくなるのである。ああ第七歌、これでさびしく曲を終るのである。うへをむいて大空をながめると太陽はどんどん早くはしりゆく、歎息すべきではないか。』

萬丈潭 〔原注〕同谷縣作。 萬丈潭 〔原注〕同谷縣にて作る。

青溪含冥冥 神物有顯晦 青溪、冥冥を含む、神物、顯晦有り。

龍依積水蟠 窟壓萬丈內 龍は積水に依りて蟠る、窟は壓せらる萬丈の内。

跼步凌垠堦 側身下煙靄 跼歩、垠堦を凌ぎ、身を側てて煙靄より下る。

前臨^(二)洪濤寬^(三)却立^(四)蒼石大^(五)

前みて洪濤の寛なるに臨む、却立すれば蒼石大なり。

山危^(六)一徑盡^(七)岸絕^(八)兩壁對^(九)

山危くして一徑盡き、岸絶えて兩壁對す。

削成^(一〇)根虛無^(一一)倒影垂澹澹^(一二)

削成、虚無に根す、倒影、澹澹たるに垂る。

黒知灣^(一三)濃底清見光炯碎^(一四)

黒は知る灣濃たる底、清は見る光炯碎くるを。

孤雲到來深^(一五)飛鳥不在外^(一六)

孤雲、到來深し、飛鳥、外に在らず。

高蘿成帷幄^(一七)寒木壘旌旆^(一八)

高蘿、帷幄を成す、寒木、旌旆を壘(壘)す。

遠川曲通流^(一九)嵌竇潛洩瀨^(二〇)

遠川曲りて流を通じ、嵌竇潛みて瀨を洩らす。

造幽無人境^(二一)發興自我輩^(二二)

幽に造る無人の境、興を發するは我輩よりす。

告歸遺恨多^(二三)將老斯遊最^(二四)

歸を告ぐる遺恨多し、將に老いむとして斯の遊最なり。

閉藏脩鱗蟄^(二五)出入巨石礙^(二六)

閉藏、脩鱗蟄す、出入、巨石に礙へらる。

何當炎天過^(二七)快意風雲會^(二八)

何か當に炎天に過ぎりて、快意、風雲に會すべき。

【字解】

【二】 萬丈潭 同谷縣東南七里にあり。【三】 青溪合冥冥 青溪は青色の水をたたへし溪、潭は溪の或る部分に在るならん、冥冥は冥冥に同じからん、蓋し天をいふ、合とはそれを容れるをいふ、この青色の溪水は上、天をひたし入れてなるといふなり、孟浩

然が詩句に「幽澗」太清」とあるに近き義ならん。或は合を合に作り、然らば青溪合冥冥なるべし、青溪の水この潭に會合して茫漠

としてなるをいふ、今合字に従ひて説く。【三】 神物 不思議なもの、龍をいふ。【四】 眼晦 あらはれるとかくれると。【五】 積水 潭につもれる水。【六】 窟 いはや、龍の住む穴。【七】 萬丈 崖壁の高さをいふ。【八】 躡步 せぐくまりておゆむ。【九】 凌垺 垺は水のそばの岸壁なり、凌とはそれをのぼること。【一〇】 側身 身をかたへによせかける。【一一】 下煙 煙をけむりしやの間よりしたへとくだる。【一二】 前 前進。【一三】 洪濤 潭面のさま。【一四】 却立 一歩しりぞきて立つ。【一五】 蒼石 即ち岸壁

これは壁の實質によりていへり。【一六】 一徑 即ちこの潭へかよふこみち。【一七】 兩壁 潭側に對立せる岸壁あるならん。【一八】 削成 けづり成されたるもの、岸壁のさまをいひて岸壁その物をさす。【一九】 根虚無 虚無は潭水の深さをさす、根とは根がはえた

様にそこに深くつき入れるをいふ。【二〇】 倒影 壁のさかしまに水にうつるがけ。【二一】 垂 水面に落ちてゐること。【二二】 澹澹 清くたたへたる貌。【二三】 黒 深水のくろすみたる色。【二四】 濃底 水のまがり、あつまりてながるさま。【二五】 清 水のすめること。【二六】 光炯 ひかりかがやくこと。【二七】 孤雲 一片のくも。【二八】 到來深 到來とはこの潭上へ來ること、到

をいへり。【二九】 帷幄 帷はよこにはる「まく」、帳はうへにはる「まく」、共に幕をいふ。【三〇】 旌旆 旗はよこにはる「はた」。【三一】 嵌竇 嵌竇「あな」。【三二】 潛 地下なも

の境たる幽處に至るをいふ。【三三】 最 最上のおもしろきあそび。【三四】 閉藏 ところもる。【三五】 脩鱗 長身なるうろこある

生物、龍をさす。【三六】 出入 自己がこゝへ往來すること、書說龍についていふとなぜり、然れども龍は巨石ぐらゐにその通過をさ

またげらるべきものに非ず。【三七】 巨石 上の蒼石大の蒼石なるべし。【三八】 何當 何は「何時」なり。【三九】 炎天 夏時をいふ。

【四〇】 風雲 或は雲を雨に作る。

【題義】 同谷縣にある萬丈潭にあそびて龍のことに感じて作る。龍は暗に自己を比せるならん。

【詩意】 青溪の水が冥漠なる大空をひたしいれてをる。ここに住む神物にもあらはれるときとかくれ

てをるときとがある。いまはそのかくれてをる時である、すなはち龍はこのたんとつもつてゐる水に依つてとぐろまいてゐるのである。その住むいはやは萬丈の石壁の内に壓せられて奥底にある。自分はそのへ達するためにせぐまりながらあるいて岸の崖をのぼり、また身體を片方へよせながら煙霧の間から下方へとくだる。さてくだつてまへへすすみではおほなみのひろらかにうごいてゐるところにさしかかつてみ、またひとあしさがつては偉大な蒼色の石壁をせおうて立つ。ここにては危険な山の一すぢみちが盡き、左右兩方に岸壁が對立してをる。その削り成された岸壁は虚無なる水に深く根ざし、そのさかしまにうつる影はきよくたたへた水面に落ちこんでをる。どすぐろいの見ればそれは水が諸種の方向に流るる水をあつめた底であることがわかるし、その清らかさは水面のきらきらしたひかりの碎くるのを見ればわかる。一片の雲がここに浮び來れば直下水面までその深さ知られぬほどであり、鳥が飛ぶとしてもそれは周圍の絶壁以外にはいでない。附近の高くはえた巖は幕の状をなし、冬がれの木は旗をつみかさねた様である。遠方の川もまがりながらここへ流れを通はしてをり、どこぞに穴があつてそこをくぐつてこのふちの水がはやせをもらしてゐる。自分はこの無人の塊地たる幽邃の場所に來て之を見て大に興をおこす、これ我輩によつて始めて然るのである。ここからかへらうとするにあたつてはのこりをしいことが多い、老年にさしかかつてはこんなおもしろい遊びはほかにない、これが第一である。いま龍はここにかくれてをる。ここへ出入往來するには巨大なる

岸壁のさまたげがある。(或は龍は石にさまたげられてここにあなごもりしてをる)いつか夏にあたつてここへたづねきて、ここらもち愉快に龍が風雲をまき起すのであふことができようぞ。

杜少陵詩集 卷九

發同谷縣 【原注】乾元二年十二月一日自隴右赴成都紀行。

同谷縣より發す 【原注】乾元二年十二月一日隴右より成都に赴くとき行を記す。

賢有不黔突。聖有不煖席。
 況我飢愚人。焉能尚安宅。
 始來茲山中。休駕喜地僻。
 奈何迫物累。一歲四行役。
 仲仲去絕境。杳杳更遠適。
 停驂龍潭雲。迴首虎崖石。
 臨歧別數子。握手淚再滴。
 交情無舊深。窮老多慘感。

賢に突を黔にせざる有り、聖に席を煖にせざる有り。
 況んや我飢愚の人をや、焉んぞ能く尚宅に安んぜむ。
 始めて茲の山中に來り、駕を休めて地の僻なるを喜ぶ。
 奈何ぞ物累に迫られて、一歲に四たび行役するや。
 仲仲として絶境を去り、杳杳更に遠く適く。
 驂を停む龍潭の雲、首を廻らす虎崖の石。
 歧に臨みて數子に別る、手を握りて涙再び滴る。
 交情、舊深無し、窮老、慘感多し。

平生懶拙意、偶值樓通跡。平生懶拙の意、偶ま樓通の跡に値ふ。

去住與願違、仰慚林間翻。去住、願と違ふ、仰いで林間の翻に慚づ。

【字解】 〔一〕 關右、秦州・同谷みな關右の地なり。〔二〕 成都、四川省成都府。〔三〕 賢、賢人、墨子をいふ。〔四〕 對突、かまどを黒色にくすべる、飯を炊きつづくるをいふ。〔五〕 聖、聖人、孔子をいふ。〔六〕 樓席、むしろをあたたかにする、同じ席にながくすわること。「淮南子」に墨子無對突、孔子無樓席とみゆ、墨子も孔子もつれに東西に奔走して世の人を救はんとせし故、同じかまどを長く焚いたり、同じ席に長く坐りしこと無しといふなり。〔七〕 安宅、宅におちついてをる。〔八〕 茲山中、同谷の山中。〔九〕 休駕、車駕を休息させる。〔一〇〕 物業、妻子衣食のわづらひ。〔一一〕 四行役、作者今年春洛陽より華州にかへり、華州より秦州にゆき、冬は秦州より同谷に、同谷より更に成都にゆかんとす、これ四たび行役するなり。〔一二〕 神神、うれふる貌。〔一三〕 絕境、かけはなれた場所、同谷をいふ。〔一四〕 香香、はるばる。〔一五〕 適、ゆく。〔一六〕 停驂、驂はそへうま、二頭の馬の外にははり馬がも一匹あるなり、停は「とどむ」、急に立ち去りかぬるさまなり。〔一七〕 龍潭、即ち萬丈潭なるべし。〔一八〕 虎窟、寄贊上人詩に徘徊虎穴上とある虎穴かといへる説あるも恐らくは然らず、これ同谷の地に別に虎窟と稱するものあるなるべし。〔一九〕 故、わかれみち。〔二〇〕 數子、同谷の交友三四の人人。〔二一〕 交情無舊深、仇注に不必舊交深契也とときたるも今取らず。仇氏は數子を以て新交とみなして新交にても可なり、必しも舊交の要なしと解するなり、余は數子即ち舊交とみる、これは成都に赴かんとするに際して成都著後の友は新交となり、同谷にての友は舊交となると考ふればなり、無舊深とは同谷を去りては、また今日の如き舊交の深きもの有らずといへるなり。〔二二〕 窮老、困窮衰老。〔二三〕 慚感、ものがなしきうれひ。〔二四〕 懶懶、ぶしやう、よわたりのへた。〔二五〕 值、あふ。〔二六〕 樓通跡、樓通の地といふほどの意。〔二七〕 去住、ここを去ると、ここにどとまると。〔二八〕 願、往まるが本願なり。〔二九〕 林間翻、翻は鳥のたちばね、以て鳥そのものをさす、鳥は林中に在りて其所を得たり、人却てしからず。

【題義】 作者同谷に來りしが、ここにも居る能はずして乾元二年十二月一日つひに同谷より出發して

南のかた成都へ赴かんとす、その旅中のさまをうつつして本篇以下凡そ十二首の紀行詩をなす。これ其の第一首なり。居住の安定を得ざるの情をのべたり。

【詩意】 賢人のなかにも墨子の如くかまどをくすべらす暇なきものがあり、聖人のなかにも孔子の如く坐席のあたたかであるひまがないものがある。まして自分のやうな飢にかられ且愚なるものは、どうして自分の宅におちついてゐることができようぞ。自分ははじめてこの同谷の山中へ來てここで車をやすめ、土地の邊鄙なのを喜んでをつたのだ。しかるになんでも事物のわづらひに迫られて、一年のうち四回もたびをせねばならぬのであるか。自分はうれはしくこのかけはなれた場所を去つて、はるばるともつと遠いところへゆくのである。驂をとどめて龍潭の雲をながめたり、ふりかへつて虎崖の石をながめたり、心はあとへひかれるのである。いよいよわかれ路のところ三四人と別れをつげ、手を握りかはしてふたたび涙をながす。ゆくさきではこの人人たちの交りほどの情愛はあるまいとおもふと、窮老の身にとつてはつらいうれひが増さることである。ふだんからぶしやうで世わたりのへたな自分のころでは、偶然この地の様な樓にいい場所にあうていいぐあひだとおもつてゐたのに、去住につけて自己の本願とちがふことになつた、それで仰いで林中に得意がほしてゐる鳥に對してもはづかしく感するのである。

木皮嶺

首路栗亭西。尙想鳳凰村。
 季冬攜童稚。辛苦赴蜀門。
 南登木皮嶺。艱險不易論。
 汗流被我體。祁寒爲之暄。
 遠岫爭輔佐。千巖自崩奔。
 始知五嶽外。別有他山尊。
 仰干塞大明。俯入裂厚坤。
 再聞虎豹鬪。屢踟風水昏。
 下有冬青林。石上走長根。
 西崖特秀發。煥若靈芝繁。
 潤聚金碧氣。清無沙土痕。

木皮嶺

首路、栗亭の西、尙想鳳凰村。
 季冬、童稚を攜へ、辛苦、蜀門に赴く。
 南、木皮嶺に登る、艱險、論じ易からず。
 汗流れて我が體に被る、祁寒之が爲めに暄なり。
 遠岫争うて輔佐す、千巖自ら崩奔す。
 始めて知る五嶽の外、別に他山の尊き有るを。
 仰ぎ干せば大明を塞ぎ、俯して入れば厚坤裂く。
 再び聞く虎豹の鬪ふを、屢、風水の昏きに踟す。
 高きには廢れし閑道あり、摧折、斷嶺の如し。
 下に冬青の林有り、石上に長根走る。
 西崖は特に秀發、煥として靈芝繁きが若し。
 潤は聚む金碧の氣、清、沙土の痕無し。

憶觀崑崙圖。目擊玄圃存。

對此欲何適。默傷垂老魂。

憶ふ崑崙の圖を觀しことを、目擊して玄圃存す。「ましむ。

此に對して何くに適かむと欲する、默して垂老の魂を傷

【字解】 一、木皮嶺、同谷より東南にあたり、今秦州徽縣の四十里に在り。二、首路、はじめてのみち。三、栗亭、「發秦州」にみゆ。四、鳳凰村、村の名、鳳凰臺の附近にあるなるべし。五、季冬、十二月。六、蜀門、即ち劍門。七、祁寒、はげしきさむさ。八、岫、あたたか。九、遠岫、遠山、岫は穴のあるやま。一〇、輔佐、この嶺のてだすけをする。一一、崩奔、崩落と解するが古義なり、しかしこは亂れて走る形勢をいふかと考ふ。一二、五嶽、東は泰山、西は華山、南は霍山、北は恒山、中央は嵩山、これを五嶽といふ。一三、仰干、干とは「凌ぐ」といふほどの意ならん、自己がのぼりゆくことならん。一四、大明、日なをいふ、日の光のこと。一五、俯入、自己が俯して下方へはひりこむ、山路をくだるをいふ。一六、厚坤、大地。一七、闕せやくまる。一八、高、高處。一九、閑道、棧道。二〇、斷嶺、たちきれたながえ、車のかち棒。二一、冬青、モナの木、アヲキの類。二二、秀發、ひいであらはるる。二三、煥、かがやく貌。二四、靈芝、仙草。二五、潤、うるほひあり。二六、金碧、黄金碧玉。二七、崑崙、仙山なり。二八、目擊、ひとめみたまで。二九、玄圃、縣(懸)圃ともいふ、屋上庭苑なり、崑崙山に在りとせられし靈苑。三〇、此、現に見る靈境をさす。三一、垂老魂、老いかかつた自己のたましひ。

【題義】 成都紀行の第二首。木皮嶺をすぎて靈境のさまをのぶ。

【詩意】 已にすぎた鳳凰村のことなどおもひながら、行程の第一路たる栗亭の西の方をとほる。この冬の季にこどもらをたづさへて、なんぎしながら蜀門の方へと赴くのである。南方この木皮嶺に登る、そのみちのなんぎなことはなかなか口ではいふことがむづかしい。汗はからだにながれ、嚴寒の候もそれがためにあたたかく感ぜられる。遠方の山は争うてこの嶺をたすけるかの如く、多くの巖石もさ

まりなく亂れ走つてゐる。ここで始めて五嶽の外にも別に尊い他の山のあることがわかる。仰ぎのほればこの山勢は日の光をも塞がんとし、俯してくだればこの山勢は大地を裂けるが如くである。一度ならず虎豹のたたかふをきき、しばしば風水の氣のくらきあたり身をかかめる。高いところには今は無用になつた棧道がある、それはくだけてちぎれた車の柁棒のやうになつてゐる。下の方には冬青の林があり、その長い根は石の上を走つてゐる。西方の崖は特別にたかくあらはれをり、なにか生えてゐるのはかがやいて靈芝かなぞがしげつてゐる如くにみえてゐる。そのうるほひをふくんださまは黄金碧玉の氣が聚つてゐるためであらう、清らかですこしも沙や土の痕さへない様である。まへに崑崙山の圖を觀たことを記憶してゐるが、いままのあたり玄圃の靈苑が存在してゐるのである。こんな雪境に對しながら自分はここをはなれてどこへゆかうとするのであるか、かくかんがへるとただだまつて年老いかかつた心をいためるばかりである。

白沙渡

白沙渡

畏途隨長江。渡口下絕岸。
差池上舟楫。杳窅入雲漢。

畏途、長江に隨ひ、渡口、絶岸を下る。
差池して舟楫上る、杳窅、雲漢に入る。

天寒荒野外。日暮中流半。
我馬向北嘶。山猿飲相喚。

天は寒し荒野の外、日は暮る中流の半。
我が馬、北に向つて嘶く、山猿飲みて相喚ぶ。

水清石礧礧。沙白灘漫漫。
迴然洗愁辛。多病一疎散。

水清くして石礧礧たり、沙白くして灘漫漫たり。
迴然、愁辛を洗ふ、多病一に疎散なり。

高壁抵嶽崿。洪濤越凌亂。
臨風獨回首。攬轡復三嘆。

高壁、嶽崿たるに抵り、洪濤、凌亂たるを越ゆ。
臨風に獨り首を回らず、轡を攬りて復た三嘆す。

【字解】 一 白沙渡、渡の名、同谷から南行して始めて嘉陵江をわたらうとする處の渡の名だといふこと。嘉陵江は陝西鞏昌府の鳳縣から源を發して東して兩當・略陽を経て、東谷等の水をあつめ四川省内を流通して揚子江に合する水である。二 畏途、おそれるべきみち。三 長江、嘉陵江をさす。四 渡口、渡口に於てするをいふ。五 差池、たがひちがひのさま、枘をあやつる貌。六 上、上流へのほること。七 杳窅、おくふかくはるか。八 雲漢、あまのがは、川をたとへていふ。九 我馬、舟にある馬なり。一〇 山猿、岸の山手のさる。一一 礧礧、石のつみかさなれる貌。一二 漫漫、ひろきさま。一三 迴然、はるか。一四 疎散、きえうせるさま。一五 抵、至る。一六 嶽崿、けはしき貌。一七 凌亂、なみのみだるるさま。一八 攬轡、たづなを手中に收めとる、隨行するをいふ。

【題義】 成都紀行の第三首。白沙渡のさまをのぶ。
【詩意】 畏るべき途を嘉陵江にくつついてあるき、ここの渡りばに於て絶壁の岸をくだる、それから

舟につてかたみに楫をつかうて上流へとのぼり、おくふかくあまのがはらの如き水面へはひつてゆく。荒野のそとは天の色寒く、川のなかほどで日はくれた。舟中の我が馬は北をむいていななく。山の猿は水を飲みながらよびかはしてゐる。水はすみきつて石はつもつてをり、沙は白く灘はひろく横はつてゐる。之をみて心地とほく平生のうさつらさはすつかり洗ひ去られた様であり、さまざまの病氣も全く散りうせた様である。さてみだれたつた大なみのところをふみこえて、けはしき高い岸壁へののぼる、ここで風にのぞんで獨りふりかへつてみ、また旅行をつづくることかたとたづなを手にしながらいくたびもなげく。

水會渡

水會渡

山行有常程。中夜尙未安。

山行、常程有り、中夜尙未だ安んぜず。

微月没已久。崖傾路何難。

微月、没する已に久し、崖傾きて路何ぞ難き。

大江動我前。洶若溟渤寬。

大江我が前に動く、洶として溟渤の寬なるが若し。

篙師暗理楫。歌笑輕波瀾。

篙師、暗に楫を理む、歌笑、波瀾を輕んず。

霜濃木石滑。風急手足寒。

霜濃にして木石滑に、風急にして手足寒し。

入舟已千憂。陟嶽仍萬盤。

舟に入れば已に千憂、嶽に陟れば仍萬盤。

廻眺積水外。始知衆星乾。

廻眺す積水の外、始めて知る衆星の乾くを。

遠遊令人瘦。衰疾慙加餐。

遠遊、人をして瘦せしむ、衰疾、加餐に慙づ。

【字解】「一」水會渡、これ嘉陵江が略陽を過ぎて東谷等の水をあつむる處ならんといふ。略陽は縣名、今陝西漢中府に屬す。「二」常程、きまつた旅程、途中宿處なければそのある處までは必ず進まればならぬ。「三」安、おちついてゐること。「四」大江、嘉陵江。

【一】洶、水のわきたつ聲。「六」溟渤、ひろうみ。「七」篙師、水竿をあやつる船頭。「八」理楫、かひをうまくつかふ。「九」陟、嶽、やまにのぼる、舟よりあがつてからのことなり。「一〇」萬盤、みちがいくうれりにもまがりくれる。「一一」廻眺、ふりかへつてみる。「一二」積水、江の水量の多きをいふ。「一三」衆星乾、水に泛んでゐるときは水面廣ければ水と天とくつき星も水のなかにひたされし如く見ゆる、今山路にかかつてから見れば星はやはり水から離れてゐる、それを「乾く」といへるなり、「濕める」の反對。

【一四】令人瘦、勞苦のためなり。「一五】衰疾、老衰、疾病。「一六】慙加餐、加餐の語に對してはづ、古詩に、思君令人瘦、努力加餐飯」とあり、瘦せぬ程に御飯を多くたべようといふなり。

【題義】成都紀行の第四首。水會渡のさまをのぶ。

【詩意】山路をゆくに日程がきまつてゐるから、夜なかでもおちついてゐるわけにゆかぬ。かすかな月の光もとづくに没してしまひ、崖は傾いて路はひどくわるい。ところがここまできると前面に大きな江水がうごいてゐて、浪がわきたちひろうみの大なるごとくである。船頭はくらがりにうまく棹を使ひ、波など平氣で笑うたり歌うたりしてゐる。舟からあがつて陸をゆくと霜がこまやかに置いて木

の根巖角がなめらかであり、風はつよく吹いて手足がつかぬ。渡り舟に入つたときから心配は多くあつたが、山にのぼればやはり幾曲りの曲り道があつてくるしい。やうやう多くの川水のところから遠くへ出てみると、星と空とが元來別別であることがわかる。遠くへ旅することは人を瘦せさすものだ、古人は瘦せぬためには加餐せよとすすめてをるが自分の如き衰疾のものは加餐もできさうにないのでその語に對してはづるのである。

飛仙閣

飛仙閣

土門山行窄。微徑緣秋毫。土門、山行すれば窄し、微徑、秋毫に緣る。
棧雲闌干峻。梯石結構牢。棧雲、闌干として峻しく、梯石、結構牢し。
萬壑鼓疎林。積陰帶奔濤。萬壑、疎林鼓き、積陰、奔濤を帶ぶ。
寒日外澹泊。長風中怒號。寒日、外に澹泊、長風、中に怒號す。
歇鞍在地底。始覺所歷高。鞍を歇めて地底に在り、始めて覺ゆ歷る所の高きを。
往來雜坐臥。人馬同疲勞。往來雜はりて坐臥す、人馬同じく疲勞す。
浮生有定分。飢飽豈可逃。浮生、定分あり、飢飽豈に逃る可けむや。

嘆息謂妻子。我何隨汝曹。

嘆息、妻子に謂ふ、我、何ぞ汝が曹を隨ふるやと。

【字解】【一】飛仙閣。閣は閣道すなはち棧道なり、飛仙閣は漢中府略陽縣東南四十里にありといふ、蜀の棧道は、唐の時、三泉縣(漢中府羌寧縣治)から利州(四川保寧府廣元縣治)までに橋といひ閣といふもの合せて一萬九百八十間あり、其他の險阻を保護する欄干四萬七千一百三十四間ありといふ。飛仙閣は、三泉よりさらに北に在るが如し。【二】土門。土壁門の形をなす。【三】窄。みちの間隔のせばまること。【四】緣秋毫。秋の毛すちほどのほそさの小みちによる。【五】棧雲。棧道のくも。【六】闌干。さかんなる貌。【七】梯石。階段に用ふる石。【八】牢。かたし。【九】鼓。傾斜する、直立せざるをいふ。【十】積陰。あつみのあるくもり氣。【一一】奔濤。溪流のおと。【一二】外。我が居處の外圍。【一三】澹泊。光りうすき貌。【一四】長風。とほく吹きたる風。【一五】中。我が居處を中心とする内圍。【一六】歇。やすませる。【一七】地底。山より下りたる溪邊をいふ。【一八】所歷。すでにとほつてきた場所。【一九】往來。道を往來する旅人。【二〇】雜。雜居する。【二一】坐臥。主として自己の一行の態度をいふ。【二二】浮生。人生。【二三】定分。きまつた分限、運命の差をいふ。【二四】飢飽。ともにつれてゐる。【二五】汝曹。汝等。

【題義】成都紀行の第五首。飛仙閣のさまをのぶ。

【詩意】山路をゆくと崖が門の様になつてとほるところがせばまつてをり、そこを秋の毛すちほどの小みちによりそうてゆく。棧道の雲はさかんにはしく立ちのぼり、階段をなす石はそのくみたてなかなかしつかりしてゐる。多くの壑ではまばらな林が斜めに生えてをり、厚みをもつたくもり氣は溪流の奔りゆく濤の音を帯びてをる。我が居處の外圍では冬の日が光うすくさし、内圍では遠くから吹きわたる風が怒號してゐる。それから下の方へくだつて地の底の様なところに鞍をやすませる、このときはじめていままでとほつて來た所がなるほど高い所だつたと氣がつく。我の坐臥してゐる處へ

他の往來のものもわりこんでくる。人も馬も同じやうにつかれてゐる。人生にはめいめいの運命の定めがある、飢ゑる飽くといふことはどうしてのがれることができやうぞ。自分は歎息しながら妻子にむかつていふ、なんで自分はおまへたちをしたがへてこんな旅をつづけるのであるか、と。(つまり飢寒に驅られてのことに外ならぬのである)。

五盤

五盤

五盤雖云險、山色佳有餘。

五盤、險なりと云ふと雖も、山色、佳餘り有り。

仰凌棧道細、俯映江木疎。

仰いで棧道の細なるを凌ぐ、俯して江木の疎なるに映す。

地僻無網罟、水清反多魚。

地僻にして網罟なく、水清くして反つて魚多し。

好鳥不妄飛、野人半巢居。

好鳥妄りに飛ばず、野人半巢居す。

喜見淳樸俗、坦然心神舒。

喜び見る淳樸の俗、坦然として心神舒ぶ。

東郊尙格鬪、巨猾何時除。

東郊尙格鬪す、巨猾何時か除かむ。

故鄉有弟妹、流落隨丘墟。

故郷、弟妹あり、流落、丘墟に隨ふ。

成都萬事好、豈若歸吾廬。

成都、萬事好きも、豈に吾が廬に歸るに若かむや。

【字解】

【一】五盤、嶺の名、また七盤嶺といふ、盤とはまがる義、邦語に幾まがりといふ類なり、此嶺は四川保寧府廣元縣の北百七十里にありといふ。【二】映、棧道がとほく之にうつろふをいふ。【三】罟、うなをとるあみ。【四】巢居、鳥のごとく樹木のうへに居を結びてすむ。【五】東郊、洛陽の郊外。【六】格鬪、うちあひたたかふ。【七】巨猾、大なるわるもの、史思明輩をさす。【八】故郷、洛陽附近をさす。【九】弟妹、同谷七歌に見えたるものなり、弟は濟州に、妹は饒州にあり。【一〇】流落、おちぶれる。【一一】丘墟、兵亂に残破されたる「なかしや、巖のあと。

【題義】 成都紀行の第六首。五盤嶺をすぎて弟妹をおもふ。

【詩意】 この五盤嶺はみちはわるいといふものの山の景色はなかなかよろしい。自分等は仰いで細い棧道をのぼり、俯して下をみれば江邊に樹木がまばらに生えてゐるのに對するのである。ここは土地は邊鄙で人智がひらけぬから魚をとる網すらなく、水は清らかであるがかへつて魚は多くゐる、よい鳥がゐて人を見ても驚かすやたらに飛んだりせず、ところの百姓は半分以上は樹上生活である。こんな淳良質樸の風俗を見ては自分は大にうれしく、心は平になり十分のびのびしたきもちになつた。ただおもへば洛陽の東の方ではまだ格鬪をつづけてゐる、いつになつたら史思明等の惡黨の巨魁が除かれるのであらうか。あの故郷の方面には、弟も妹も居る、彼等はおちぶれて廢殘した邱やとりでのあとなどにそうてさまようてゐることであらう。自分のゆくさきの成都は萬事がよいとしたところで、自分はやつぱり故郷の自分のいへにかへつた方がよいとおもふのである。

龍門閣

龍門閣

清江下龍門。絕壁無尺土。

清江、龍門を下る、絶壁、尺土なし。

長風駕高浪。浩浩自太古。

長風、高浪に駕す、浩浩、太古よりす。

危途中縈盤。仰望垂綫縷。

危途、中縈盤す、仰ぎ望めば綫縷垂る。

滑石敲誰鑿。浮梁裊相拄。

滑石敲いて誰か鑿てる、浮梁、裊として相拄ふ。

目眩隕雜花。頭風吹過雨。

目眩みて雜花墮ち、頭風ふきて過雨を吹く。

百年不敢料。一墜那得取。

百年敢て料らず、一墜那ぞ取ることを得む。

飽聞經瞿塘。足見度大庾。

飽くまで聞く瞿塘を経るを、見るに足る大庾を度るを。

終身歷艱險。恐懼從此數。

終身、艱險を歴む、恐懼此從り數へむ。

【字解】

【一】龍門閣 保寧府廣元縣の嘉陵江のほとりにありといふ。この樓道は岸壁と江水とにかけてわたせしものなること時によりてうかがはる。【二】清江 嘉陵江。【三】駕 風がなみのうへに乗る。【四】浩浩 大なる貌。【五】中 半途をいふ。【六】縈盤 めぐりわたる。【七】綫縷 いとすぢ。【八】浮梁 水中にうかべて立てられしはしら。【九】裊 たをやか。【十】拄 ささへる。【十一】隕 雜花 ぬから火花がちるやう。【十二】頭風 あたまたから風がおこる。【十三】吹過雨 こればたとへなり、とほりあめが風にふきつけらるるやう。【十四】百年 人の一生涯をいふ。【十五】瞿塘 峽の名、四川夔州府にあり、水の險阻を以てきこゆ。【十六】度 わたる、すぎる。【十七】大庾 嶺の名、江西省南安府大庾縣にあり、山路の險をいふ。

【題義】 成都紀行の第七首。龍門棧道の危険をのぶ。

【詩意】 嘉陵江の清流がここで真倒落しにくだる、岸の絶壁には一尺の土もない。下には遠く吹く風が高浪に乗つて、大むかしからかく吹きつつあるらしい。あふなげな途が途の半ほどにうねうねしてゐるが、そこからうへを仰いでみるとうへの途はいとすぢが垂れた様に懸つてゐる。すべつこい石が傾斜してゐるがそれにはだれが穴をあけたものだらう、その穴と水底とにかけてならばはらはたがひにささへてはゐるものなよなよとしてゐる。こんな處をとほると、目はくらやんで種種の花がみだれおちる様であり、頭には風が吹いて雨を吹きつけられる様なぞつとする感じが起る。百年の生命もどうなるかわからぬ。一度墜ちたらどうして取りあげることができよう。瞿唐峽の險はあきるほど聞いてゐるし、大庾嶺をわたる險もここで想見することができ。自分は生涯險阻なところを経過することであらうが、その恐ろしいとおもふ手始めはここからかぞへそめるであらう。

石櫃閣

石櫃閣

季冬日已長。山晚半天赤。

季冬日已に長し、山晩れて半天赤し。

蜀道多早花。江間饒奇石。

蜀道、早花多し、江間、奇石饒し。

石櫃曾波上。臨虛蕩高壁。

石櫃、曾(層)波の上、虚に臨みて高壁を蕩かす。

龍門閣 石櫃閣

清暉回羣鷗。暝色帶遠客。

清暉に羣鷗回り、暝色、遠客を帶ぶ。

羈棲負幽意。感嘆向絕跡。

羈棲、幽意に負く、感嘆、絶跡に向ふ。

信甘孱懦嬰。不獨凍餒迫。

信に甘んず孱懦に嬰るを、獨り凍餒に迫らるるのみにあ

優游謝康樂。放浪陶彭澤。

優游す謝康樂、放浪す陶彭澤。

吾衰未自由。謝爾性所適。

吾衰へて未だ自由ならず、爾が性の適する所に謝す。

【字解】 〔一〕石櫃閣 廣元縣北二十五里にありといふ。〔二〕日已長 けだし日に冬至をすぎしなり。〔三〕蜀道 蜀(四川省)へ通ずる道。〔四〕多早花 氣候の暖かきためなり。〔五〕曉 おほし。〔六〕曾波 層波に同じ。〔七〕臨虛 虛は水面をさす。〔八〕蒲 うちかす。〔九〕清暉 水面の日の光りないふ。〔十〕四 飛びめぐる。〔十一〕羈棲 たびにすむ。〔十二〕幽意 風景に親しむの意。〔十三〕絶跡 かけはなれたところ、成都をさす。〔十四〕孱懦 身體のかよわきこと。〔十五〕凍餒 こころゑ、うゑる。〔十六〕優游 ゆつたりたのしむ。〔十七〕謝康樂 晉の謝靈運、康樂公に封ぜらる、山水の遊びをなし詩賦に長ぜり。〔十八〕放浪 きままにくらす。〔十九〕陶彭澤 彭澤縣令陶潛、陶淵明なり。〔二十〕謝 謝靈運の遊名山志に、山水性分之所適とみゆ、性分にあひたること。謝と陶となさす。〔二十一〕性所適 謝靈運の遊名山志に、山水性分之所適とみゆ、性分にあひたること。

【題義】 成都紀行の第八首。石櫃閣のさまと所感とをのぶ。

【詩意】 冬の季とてもはや日がながくなり、山はくれがたになつたがそらが半分赤くある。蜀道は暖かて早さきの花が多く、江には奇妙な石がたくさんある。この石櫃閣はいくへもの波の上にあつて、

それが水面にのぞんでたかい岸壁を波上にゆらつかせてゐる。水上では夕日がひかつてむれたる鷗がとびめぐり、陸ではくらがりの色が遠くゆく旅人をつつんでゆく。自分とはたびですまねばならぬ身分でしづかに風景をもてあそぶの意をはたすことができず、歎聲をもらしつつか成都の様なかけはなれた地へ向ふのだ。これといふも身體のよわいからであつて、ただこゑ、うゑ、に迫まられてゐるためばかりではない。それは自分の覺悟してゐることだ。むかし謝靈運は山水の間にゆつたりとあそび、陶淵明は田園の間にきままにくらした。自分は老衰してまだ自由な生活を爲すことはできぬから、諸君が性のむいた所に向つて生活したのに對しては餘ほど劣つてゐる。

桔柏渡

桔柏渡

青冥寒江渡。駕竹爲長橋。

青冥たり寒江の渡、竹を駕(架)して長橋と爲す。

竿濕煙漠漠。江永風蕭蕭。

竿濕ひて煙漠漠たり、江永くして風蕭蕭たり。

連竿動嫋娜。征衣颯飄飄。

連竿動いて嫋娜たり、征衣、颯として飄飄たり。

急流搗鷓散。絕岸鼉鼉驕。

急流、鷓鷀散じ、絶岸、鼉鼉驕る。

西轅自茲異。東逝不可要。

西轅、茲自り異なり、東逝、要む可からず。

高通荆門路。濶會滄海潮。高通は通ず荆門の路に、濶は會す滄海の潮に。
 孤光隱願眇。遊子悵寂寥。孤光隠れて願眇す、遊子、悵として寂寥たり。
 無以洗心胸。前登但山椒。以て心胸を洗ふ無し、前みて登るは但だ山椒のみ。

【字解】 〔一〕 桔柏渡。保寧府昭化縣の東北三里にあり、嘉陵江と白水と合流する處なり。〔二〕 青冥。あななくらし、水のさま。〔三〕 駕竹。駕は架に作るべし、わたすこと。〔四〕 漠漠。ひろがる貌。〔五〕 連竿。ひきはへたる竹の索橋。〔六〕 騎部。しなやかなるさま。〔七〕 征衣。たびごろも、自己の衣をいふ。〔八〕 風。風にあふられるさま。〔九〕 風飄。ひるがへるさま。〔一〇〕 揚。しぎ、雁に似てあつしなし。〔一一〕 鷗。水鳥なり。〔一二〕 龍。龍。犬がめ。〔一三〕 西轍。車のかち棒を西にむけること、西南に向つて随行するをいふ。〔一四〕 東逝。川の水が東にながれ去ること。〔一五〕 要。むりにひきとめること。〔一六〕 高。濶。この二字は山勢水勢をいふ、高は荆門に、濶は滄海にかかる字。〔一七〕 荆門。山の名、湖北荊州府にあり、この江水は南流して長江に入り東して荊州に達す。〔一八〕 滄海。ひろきうみ、揚子江口の東海をいふ。〔一九〕 孤光隱。孤光とは一片の川光をいふ、ここをすぐれば陸路となり、しばらく川と別るるなり、故に「隱る」といふ。〔二〇〕 遊子。たび人、自己をいふ。〔二一〕 悵。うらむ貌。〔二二〕 洗心胸。洗は水の兼語なり。〔二三〕 山椒。山の頂を家と曰ひ、また椒とも曰ふ。

【題義】 成都紀行の第九首。桔柏渡のさまをいひ、水と別れんとする情をのぶ。

【詩意】 このわたり場は水の色が青くくらくみえる、そのうへに竹をわたして長い橋がかけてある。橋の竹竿はしめつて煙がひきはへてをり、長き水面を風がさびしく吹きわたる。橋をわたればひきはへた竹のなははしがなよなよとうごき、旅ごろもは風にあふられてふはふはひるがへる。流れが急で

鶴だの鶴だのがとび散り、きつたてのきしへには大がめなどが威張つてゐる。ここから西の方成都へゆくみちがはつきりわかれる。東流する嘉陵江の水はとどめようとしてもだめだ。その水は高く荆門の路にも通じ、濶く滄海の潮にもであふのである。江水の白き光が隠れるので自分は左右をふりかへつてみる、さうして自分はうらめしくさびしさを感ずる。この水にわかれては胸のけがれを洗ふべき何物もない、前面に進んで登るべきはただ山の頂ばかりである。

劍門

劍門

惟天有設險。劍門天下壯。惟天、險を設くる有り、劍門は天下の壯なり。
 連山抱西南。石角皆北向。連山、西南を抱く、石角皆北に向ふ。
 兩崖崇墉倚。刻畫城郭狀。兩崖、崇墉倚り、刻畫、城郭の狀あり。
 一夫怒臨關。百萬未可傍。一夫怒つて關に臨めば、百萬未だ傍ふ可からず。
 珠玉走中原。岷峨氣悽愴。珠玉、中原に走る、岷峨、氣悽愴たり。
 三皇五帝前。雞犬各相放。三皇五帝の前、雞犬各相放つ。
 後王尙柔遠。職貢道已喪。後王、柔遠を尙ふ、職貢、道已に喪はる。

劍門

至今英雄人。高視見霸王。

今に至つて英雄の人、高視、霸王たるを見る。

并吞與割據。極力不相讓。

并吞と割據と、極力、相譲らず。

吾將罪眞宰。意欲鏖疊嶂。

吾將に眞宰を罪せむとす、意、疊嶂を鏖らむと欲す。

恐此復偶然。臨風默惆悵。

恐る此れ復偶然らむことを、風に臨みて黙して惆悵たり。

【字解】 一 劍門 四川保寧府劍州劍門關界にあり、大劍山また梁山ともいふ。其北三十里に小劍山あり、晉の張翼が劍閣を築き、蜀の諸葛孔明が劍閣を築き、唐の李元昊が劍閣を築き、宋の楊業が劍閣を築き、元の伯璠が劍閣を築き、明の孫承澤が劍閣を築き、清の孫承澤が劍閣を築き、今に至るまで、劍門の險は天下の壯觀である。西南の方は連山がたつた山。二 此 英雄割據の事をさす。三 偶然 ふと實現して自己の夢想のこととなる。

【題義】 成都紀行の第十首。劍門の險を見て英雄の此地に割據せんことをおそるる意をのぶ。

【詩意】 天にも險阻を設けるといふことがある、劍門の險は天下の壯觀である。西南の方は連山がたつた山。郭のさまに似てをる、ここで一人が怒つて關門をまもるならば百萬人の敵もそばへよりきかかへてをり、石の角はみな北にむいてをる。左右の崖は高い城壁のやうに相倚つてをり、複雑なしくみは城郭のさまに似てをる、ここで一人が怒つて關門をまもるならば百萬人の敵もそばへよりつくことはできぬ。今やこの蜀の地方から珠玉の寶がどしどし中原の方へでだすため、岷山峨山もその寶なきためかかなしさうな氣色をおびてきた。三皇五帝などの大むかしには蜀は蜀だけでよく治ま

り、難や犬もめいめいはなち飼ひにして争ひもなかつたのである、ところが後世の王はこの土地を手なづけようとしたが、職は其人の才能に應じ、貢物はその土地の有るものに應じてだすといふ古代の道はなくなつてしまつた。いまに至るまで英雄たるものは威張つて霸王となるものがある。彼等は并吞するか割據するかいづれにしても極力抗争して中央の権力者に對して譲らない。自分

はむしろ造物主を闘しこの疊なる山山をけづりつつしてしまはうかとおもふ。自分の想像がふと中りはせぬかときづかはれるので風に臨んでだまつて心をいためてをる次第である。

【相】 他のももの多くは中央権力者と譲らず。【二】 屏 關すること。【三】 眞宰 造物主。【四】 鏖 けづりとる。【五】 疊嶂 かさなつた山。【六】 此 英雄割據の事をさす。【七】 偶然 ふと實現して自己の夢想のこととなる。

【題義】 成都紀行の第十首。劍門の險を見て英雄の此地に割據せんことをおそるる意をのぶ。

【詩意】 天にも險阻を設けるといふことがある、劍門の險は天下の壯觀である。西南の方は連山がたつた山。郭のさまに似てをる、ここで一人が怒つて關門をまもるならば百萬人の敵もそばへよりきかかへてをり、石の角はみな北にむいてをる。左右の崖は高い城壁のやうに相倚つてをり、複雑なしくみは城郭のさまに似てをる、ここで一人が怒つて關門をまもるならば百萬人の敵もそばへよりつくことはできぬ。今やこの蜀の地方から珠玉の寶がどしどし中原の方へでだすため、岷山峨山もその寶なきためかかなしさうな氣色をおびてきた。三皇五帝などの大むかしには蜀は蜀だけでよく治ま

り、難や犬もめいめいはなち飼ひにして争ひもなかつたのである、ところが後世の王はこの土地を手なづけようとしたが、職は其人の才能に應じ、貢物はその土地の有るものに應じてだすといふ古代の道はなくなつてしまつた。いまに至るまで英雄たるものは威張つて霸王となるものがある。彼等は并吞するか割據するかいづれにしても極力抗争して中央の権力者に對して譲らない。自分

はむしろ造物主を闘しこの疊なる山山をけづりつつしてしまはうかとおもふ。自分の想像がふと中りはせぬかときづかはれるので風に臨んでだまつて心をいためてをる次第である。

【相】 他のももの多くは中央権力者と譲らず。【二】 屏 關すること。【三】 眞宰 造物主。【四】 鏖 けづりとる。【五】 疊嶂 かさなつた山。【六】 此 英雄割據の事をさす。【七】 偶然 ふと實現して自己の夢想のこととなる。

【題義】 成都紀行の第十首。劍門の險を見て英雄の此地に割據せんことをおそるる意をのぶ。

【詩意】 天にも險阻を設けるといふことがある、劍門の險は天下の壯觀である。西南の方は連山がたつた山。郭のさまに似てをる、ここで一人が怒つて關門をまもるならば百萬人の敵もそばへよりきかかへてをり、石の角はみな北にむいてをる。左右の崖は高い城壁のやうに相倚つてをり、複雑なしくみは城郭のさまに似てをる、ここで一人が怒つて關門をまもるならば百萬人の敵もそばへよりつくことはできぬ。今やこの蜀の地方から珠玉の寶がどしどし中原の方へでだすため、岷山峨山もその寶なきためかかなしさうな氣色をおびてきた。三皇五帝などの大むかしには蜀は蜀だけでよく治ま

り、難や犬もめいめいはなち飼ひにして争ひもなかつたのである、ところが後世の王はこの土地を手なづけようとしたが、職は其人の才能に應じ、貢物はその土地の有るものに應じてだすといふ古代の道はなくなつてしまつた。いまに至るまで英雄たるものは威張つて霸王となるものがある。彼等は并吞するか割據するかいづれにしても極力抗争して中央の権力者に對して譲らない。自分

はむしろ造物主を闘しこの疊なる山山をけづりつつしてしまはうかとおもふ。自分の想像がふと中りはせぬかときづかはれるので風に臨んでだまつて心をいためてをる次第である。

【相】 他のももの多くは中央権力者と譲らず。【二】 屏 關すること。【三】 眞宰 造物主。【四】 鏖 けづりとる。【五】 疊嶂 かさなつた山。【六】 此 英雄割據の事をさす。【七】 偶然 ふと實現して自己の夢想のこととなる。

【題義】 成都紀行の第十首。劍門の險を見て英雄の此地に割據せんことをおそるる意をのぶ。

【詩意】 天にも險阻を設けるといふことがある、劍門の險は天下の壯觀である。西南の方は連山がたつた山。郭のさまに似てをる、ここで一人が怒つて關門をまもるならば百萬人の敵もそばへよりきかかへてをり、石の角はみな北にむいてをる。左右の崖は高い城壁のやうに相倚つてをり、複雑なしくみは城郭のさまに似てをる、ここで一人が怒つて關門をまもるならば百萬人の敵もそばへよりつくことはできぬ。今やこの蜀の地方から珠玉の寶がどしどし中原の方へでだすため、岷山峨山もその寶なきためかかなしさうな氣色をおびてきた。三皇五帝などの大むかしには蜀は蜀だけでよく治ま

り、難や犬もめいめいはなち飼ひにして争ひもなかつたのである、ところが後世の王はこの土地を手なづけようとしたが、職は其人の才能に應じ、貢物はその土地の有るものに應じてだすといふ古代の道はなくなつてしまつた。いまに至るまで英雄たるものは威張つて霸王となるものがある。彼等は并吞するか割據するかいづれにしても極力抗争して中央の権力者に對して譲らない。自分

はむしろ造物主を闘しこの疊なる山山をけづりつつしてしまはうかとおもふ。自分の想像がふと中りはせぬかときづかはれるので風に臨んでだまつて心をいためてをる次第である。

【相】 他のももの多くは中央権力者と譲らず。【二】 屏 關すること。【三】 眞宰 造物主。【四】 鏖 けづりとる。【五】 疊嶂 かさなつた山。【六】 此 英雄割據の事をさす。【七】 偶然 ふと實現して自己の夢想のこととなる。

【題義】 成都紀行の第十首。劍門の險を見て英雄の此地に割據せんことをおそるる意をのぶ。

【詩意】 天にも險阻を設けるといふことがある、劍門の險は天下の壯觀である。西南の方は連山がたつた山。郭のさまに似てをる、ここで一人が怒つて關門をまもるならば百萬人の敵もそばへよりきかかへてをり、石の角はみな北にむいてをる。左右の崖は高い城壁のやうに相倚つてをり、複雑なしくみは城郭のさまに似てをる、ここで一人が怒つて關門をまもるならば百萬人の敵もそばへよりつくことはできぬ。今やこの蜀の地方から珠玉の寶がどしどし中原の方へでだすため、岷山峨山もその寶なきためかかなしさうな氣色をおびてきた。三皇五帝などの大むかしには蜀は蜀だけでよく治ま

り、難や犬もめいめいはなち飼ひにして争ひもなかつたのである、ところが後世の王はこの土地を手なづけようとしたが、職は其人の才能に應じ、貢物はその土地の有るものに應じてだすといふ古代の道はなくなつてしまつた。いまに至るまで英雄たるものは威張つて霸王となるものがある。彼等は并吞するか割據するかいづれにしても極力抗争して中央の権力者に對して譲らない。自分

はむしろ造物主を闘しこの疊なる山山をけづりつつしてしまはうかとおもふ。自分の想像がふと中りはせぬかときづかはれるので風に臨んでだまつて心をいためてをる次第である。

【相】 他のももの多くは中央権力者と譲らず。【二】 屏 關すること。【三】 眞宰 造物主。【四】 鏖 けづりとる。【五】 疊嶂 かさなつた山。【六】 此 英雄割據の事をさす。【七】 偶然 ふと實現して自己の夢想のこととなる。

【題義】 成都紀行の第十首。劍門の險を見て英雄の此地に割據せんことをおそるる意をのぶ。

【詩意】 天にも險阻を設けるといふことがある、劍門の險は天下の壯觀である。西南の方は連山がたつた山。郭のさまに似てをる、ここで一人が怒つて關門をまもるならば百萬人の敵もそばへよりきかかへてをり、石の角はみな北にむいてをる。左右の崖は高い城壁のやうに相倚つてをり、複雑なしくみは城郭のさまに似てをる、ここで一人が怒つて關門をまもるならば百萬人の敵もそばへよりつくことはできぬ。今やこの蜀の地方から珠玉の寶がどしどし中原の方へでだすため、岷山峨山もその寶なきためかかなしさうな氣色をおびてきた。三皇五帝などの大むかしには蜀は蜀だけでよく治ま

り、難や犬もめいめいはなち飼ひにして争ひもなかつたのである、ところが後世の王はこの土地を手なづけようとしたが、職は其人の才能に應じ、貢物はその土地の有るものに應じてだすといふ古代の道はなくなつてしまつた。いまに至るまで英雄たるものは威張つて霸王となるものがある。彼等は并吞するか割據するかいづれにしても極力抗争して中央の権力者に對して譲らない。自分

鹿頭山

鹿頭山

鹿頭何亭亭。是日慰飢渴。
連山西南斷。俯見千里豁。
遊子出京華。劍門不可越。
及茲險阻盡。始喜原野濶。
殊方昔三分。霸氣曾間發。
天下今一家。雲端失雙闕。
悠然想揚馬。繼起名碑兀。
有文令人傷。何處埋爾骨。
紆餘脂膏地。慘澹豪俠窟。
仗鉞非老臣。宣風豈專達。
冀公柱石姿。論道邦國活。
斯人亦何幸。公鎮踰歲月。

鹿頭何ぞ亭々たる、是の日飢渴を慰む。
連山、西南に断ゆ、俯して千里の豁なるを見る。
遊子、京華を出づ、劍門、越ゆ可からず。
茲に及んで險阻盡く、始めて喜ぶ原野の濶なるを。
殊方昔三分す、霸氣曾て間發す。
天下今一家、雲端、雙闕を失す。
悠然、揚馬を想ふ、繼起、名碑兀たり。
有文人をして傷ましむ、何の處にか爾が骨を埋むる。
紆餘たり脂膏の地、慘澹たり豪俠の窟。
鉞に仗る老臣に非ずんば、風を宣する豈に專達せむや。
冀公、柱石の姿、道を論じて邦國活す。
斯人亦何の幸ぞ、公鎮して歲月を踰ゆ。

【字解】

【一】鹿頭山 四川綿州德陽縣治の北三十里にあり、南の方成都をさること百五十里、此地に至りて平野を望む。【二】亭 高き貌。【三】是日 山にかかつた日をさす。【四】京華 みやこ。【五】不可越 越ゆることができぬほどであつた。【六】茲 此山をさす。【七】殊方 ちがつた方位の土地。【八】三分 三國の時代、魏・吳・蜀・對峙せしをいふ。【九】霸氣 覇者の氣。【十】間發 まじはりておこる、はさまつてである。【十一】今 唐の時。【十二】失雙闕 雙闕とは蓋し劍門の如き天險なたとへていふ、(或は曰く霸王天子の宮殿に擬して造る所の闕なりと)失とは無くなること、有れどもなきが如し。【十三】悠然 はるか。【十四】揚馬 前漢の司馬相如・揚雄、竝に蜀の産みたる大文學者なり。【十五】繼起 揚馬について起れる人人、案するにこれは陳子昂・李白、が輩を想ひ浮べたるか。【十六】碑兀 石のあやふき貌。【十七】有文 文才あるをいふ。【十八】何處一句 非所さへ知れざるを怪むなり、案するに他人に就ていへるも、自己不遇の感うちをひそむるべし。【十九】紆餘 廣遠の貌。【二十】脂膏地 あぶらのながれる地、豐饒なるをいふ。【二十一】慘澹 ものがなしきさま、豪俠のはびこるをうれふるなり。【二十二】窟 いはや、すみかをいふ。【二十三】仗鉞 まさかりをつく、殊罰の權を附與せられてあること。【二十四】老臣 年老いたる臣。【二十五】宣風 天子の德風をのべつたへる。【二十六】專達 獨斷にてゆきわたる様にする。【二十七】冀公 裴冕をいふ、至徳二載十二月に右僕射裴冕は冀國公に封ぜられ、乾元二年六月に成都尹に拜し、劍南西川節度使に充てらる。【二十八】柱石 國家の柱となりどだいしとなる。【二十九】論道「尙書」(周官)に茲惟三公、論道經邦、變理陰陽とみゆ、論道とは道徳に關することを論ずるなり。【三十】斯人 斯民に同じ、蜀地の民をいふ。【三十一】公鎮 公は冀公、鎮はしづめの役として來りしをいふ、節度使として來任せしこと。【三十二】踰歲月 上に記せしごとく裴冕は六月來りし故十二月にては半歲ばかりになる、月はこえたるも歲はいまだこえず、こえんとするとさなり。

【題義】

成都紀行の第十一首。はじめて平地を見たるうれしさと、蜀の古の文學者をおもふことと、裴冕がことに言ひ及べり。

【詩意】

鹿頭の山がたかく秀でてゐる、ここへきてけふはじめて饑渴の苦をなぐさめることができた。

なせといふに連山は西南に於てとだえ、下をみると千里の野がひろびろとみえわたる。自分のみやこをでて、劔門の險阻は越ゆることができぬほどであつたが、ここまで来て險阻がなくなり、やつと原野のひろいのをうれしくおもふ。この蜀の特別地方はむかしは三分割據の時代もあり覇者の氣がときとしてまじはり出でたが、今や天下は一家の如く統一となり、劔門の雙關も雲間にあるにはあるがその存在を失うたと同じことになつた。自分はそれにつけて蜀からうまれたむかしの司馬相如・揚雄などをはるかにおもふ、そして彼等に繼いで蜀からでた人人もその名は高い、ただ文才あることは往往不幸をともなふので文才あるといふことが我我をして心をいたましめる、汝等有名の文學者はどこにその骨を埋めてをるか、それさへはつきりせぬではないか。(自分もそれに似てはぬぬか、の意ならん) いったい蜀の如き廣遠なる豊饒の地、また我我をかなしませるほど豪俠の盛なるところ、かかる地はここに刑罰の權をにぎるものは老臣を要する、老臣でなければどうして獨斷を以て天子の徳風を宣布し通達せしむることができよう。幸にも冀國公裴冕は國家の柱石たる姿をもつて、細事には關せず大道を論じ正されるので唐の國家も之がために活きるのである。だから蜀の人民はなんといふ幸福であらう、この公が來任されてあまたの年月をこえんとしてゐるではないか。

成都府

成都府

翳翳桑榆日、照我征衣裳。

翳翳たり桑榆の日、我が征衣裳を照す。

我行山川異、忽在天一方。

我行きて山川異なり、忽ち天の一方に在り。

但逢新人民、未卜見故鄉。

但だ逢ふ新人民、未だ卜せず故郷を見るを。

大江東流去、遊子日月長。

大江東に流れ去る、遊子、日月長し。

曾城填華屋、季冬樹木蒼。

曾城、華屋填む、季冬、樹木蒼たり。

喧然名都會、吹簫聞笙簧。

喧然たり名都會、吹簫、笙簧に聞はる。

信美無與適、側身望川梁。

信に美なれども與に適する無し、身を側てて川梁を望む。

鳥雀夜各歸、中原杳茫茫。

鳥雀夜各歸る、中原、杳として茫茫たり。

初月出不高、衆星尙爭光。

初月出づる高からず、衆星尙光を争ふ。

自古有羈旅、我何苦哀傷。

古より羈旅あり、我何ぞ苦みて哀傷せむ。

【字解】【一】成都府 四川省の都會なり。【二】翳翳 日のかげるさま。【三】桑榆 日の落つる方位、西方。【四】征衣裳 たびころも。【五】未卜一句 故郷を見うる時期はいつかとうらなはぬ、その時期あらざればなり。【六】大江 岷江。【七】東流去

大江の水は東に流れ去る、成都にて江は見えず、歲月の去ることをたとへていふ。【一】日月長 時久しく過ぎしこと。【二】曾城 曾城同じ、かさなれるしろ、成都の城。【三】華屋 華屋、りつげないへ。【四】間 雑はること。【五】黄 黄は笙の香。【六】備 備、王榮が登樓賦に、信美而非香土、曾何足以少留とあり、荆州は景美なるも留まるに足らずといへり、其語を借用す。【七】無興 吾が意と通する（氣にいる）ものなきをいふ。【八】望川 望川、梁は舟橋、之をわたりて故郷にかへりたしとおもふなり。

【題義】 成都紀行の第十二首。紀行の最終にして蓋し成都に入らんとして作る。

【詩意】 うすぐらく西方にかけつた夕日が自分の旅衣を照らす。だんだん別な山や川をたびして忽ち天のはてへきた。であふものはめなれぬ人民であつて故郷へはいつかへれるとみこみもつかぬ。日月は大江の水の東に流れ去る様に去つてかへらぬ、自分が旅にでてからはなかなか久しくなる。成都のかさなつた城にはりつばな家屋が充滿してをり、冬の季に樹木が蒼蒼としてゐる。さすが名高い都會とてにぎやかで簫を吹く音が笙の音にいきりまじつてきこえる。まことによい場所ではあるが自分の氣にいつたものとはない、だから身をそばだてて川の舟ばしのある方をながめやる（あはよくばそれにつて故郷へかへりたい）。夜になつて鳥雀はそれぞれねぐらへかへつた、中原の地方ははるかに茫々としてどこだかわからぬ。あまり高くもなく新月が出た。たくさん星の星がそれと光を争うてゐる。まことにさびしい景色だ。（自分のこのときの胸中やいかに）。しかし旅するといふことは今にはじめぬ、むかしからあることなのだ、自分だけがひどくかなしむべきことではなからう。

酬高使君相贈

高使君が相贈るに酬ゆ

古寺僧牢落空房客寓居

古寺僧牢落たり、空房、客寓居す。

故人供祿米鄰舍與園蔬

故人、祿米を供し、鄰舍、園蔬を與ふ。

雙樹容聽法三車肯載書

雙樹、法を聽くことを容し、三車、肯て書を載す。

草玄吾豈敢賦或似相如

草玄吾豈に敢てせむや、賦は或は相如に似む。

【字解】 【一】高使君 彭州の刺史高適、使君とは刺史の敬稱なり。【二】相贈 詩をおくりくれしこと。【三】古寺 作者初めて成都に到着して浣花溪の一寺に寓居す。【四】牢落 おちぶれるさま。【五】客 自己をさす。【六】故人 舊知の人、高適をさす。

【七】雙樹 娑羅雙樹、この木は四方各一雙の枝をいだすといふ、釋迦は雙樹の間にて法を説きしといふ、寺なればこの木を用ひたり、實にその木あるにあらず。【八】容 容、ききいれること。【九】聽法 法は佛法。【一〇】三車 昔、惠施は五車の書を載せしといふ、三といふは少量なるをいふ、（一説に法華經にいふ所の牛車羊車鹿車の三車なりと、又一説に唐の尉遲瓌といふ僧が前車に經論、中車に自己、後車に妓女食饌を載せしことを用ふと、今皆取らず）。【一一】草玄 前漢の揚雄が故事、雄首學を好みて太玄經を起草す。【一二】相如 漢の武帝の時の文豪司馬相如。

【題義】 作者成都に來りて浣花溪の一寺に寓居せしとき、親友高適が彭州の刺史として近地にありて詩をおくりくれしにより之に返事せし作なり。高適の詩は左の如し。

贈三杜二拾遺

高適

酬高使君相贈

二七九

傳道招提客。詩書自討論。佛香時入院。僧飯屢過門。聽法還應難。尋經賸欲翻。草玄今已畢。此後更何言。

【詩意】古寺で僧もさびしいによつて、そのあきべやに自分は寓居してゐる。そこへ舊知の友は俸祿の米をわけて供給してくれるし、となりの家のものははたけでできた野菜をめぐんでくれる。ここへ自分はすこしばかりの書物を車にのせてはこびこみ、また雙樹のあひだで坊さんが説法をするのをきくことをもゆるされてきく。太玄經を起草するなどのことは自分の敢てよくする所ではないが、賦を作ることならば司馬相如に似ることはできるかもしれない。

卜居

居を卜す

浣花溪水水西頭。浣花溪水、水の西頭、

主人爲卜林塘幽。主人爲に卜す林塘の幽なるを。

已知出郭少塵事。已に知る郭を出でて塵事少きを、

更有澄江銷客愁。更に澄江の客愁を銷するあり。

無數蜻蜓齊上下。無數の蜻蜓齊しく上下し、

【字解】〔一〕卜居 住居のよしあしをうらなひてさだむ。〔二〕浣花溪 漢は成都の西郭外にあり、一に百花潭ともいふ。〔三〕主人 自らいふ。〔四〕爲卜 爲めにとは自己のためにといふこと。〔五〕出郭 くるわはなれること。〔六〕澄江 即ち錦江、澄は水のすめるをいふ。〔七〕蜻蜓 とんぼ。〔八〕上下 のぼり、くだる。〔九〕滿鵲 をしどり。〔一〇〕乘興 次の山陰の句

一雙鵲鵲對沈浮。一雙の鵲鵲、對して沈浮す。

東行萬里堪乘興。東行萬里、興に乗するに堪へたり、

須向山陰入上小舟。須らく山陰に向つて小舟に上るべし。

【題義】成都の浣花溪に住居を定めしことをのぶ、題三草堂詩に、經營上元始とあれば此詩は到着の翌春上元元年の作なり。

【詩意】浣花溪の水の流るるその西のほとり、そこに自分は林塘の幽邃なところを卜して住居ときめた。そこはくるわをはなれてゐて俗事がすくないことはわかかつてゐるうへに、自分のたびの愁をけし

てくれるきれいな江もある。そのあたりにはたぐさんの「とんぼ」がそろつてのぼりくだりをしてをるし、「對」のをしどりはむきあつて浮きつ沈みつしてゐる。更に興に乗すれば東のかた萬里の遠くまでもゆくにさしつかへはない、機をみて小舟にのつて山陰地方にまででかけるべきである。

王十五司馬弟出郭相訪遺營草堂贊

王十五司馬弟、郭を出でて相訪ひ、草堂を營む贊を遺る

卜居 王十五司馬弟出郭相訪

客裏何遷次。江邊正寂寥。客裏何ぞ遷り次るや、江邊正に寂寥なればなり。
 肯來尋一老。愁破是今朝。肯て來つて一老を尋ぬ、愁破るるは是れ今朝なり。
 憂我營茅棟。攜錢過野橋。我が茅棟を營むを憂へて、錢を攜へて野橋に過ぎる。
 他鄉唯表弟。還往莫辭勞。他郷唯だ表弟あるのみ、還往、勞を辭すること莫れ。

【字解】【一】王十五司馬弟。司馬の職にある王姓の從弟。【二】遣。始と同じ、おくる。【三】貧。たから、金錢なり。【四】題。次。うつりてやどる、ひきこす。【五】肯來。わざわざくる。【六】一老。作者自己をさす。【七】愁破。胸のうちはれやかになるをいふ。【八】茅棟。かやぶきのむれ。【九】野橋。けだし萬里橋をさす。【一〇】表弟。としたのいとこ。

【題義】司馬の官にある從弟の王某が郭から出かけて訪問し來り、自分が草堂をつくるかねをおくつてくれた。上元元年浣花溪の草堂を營みしときの作。

【詩意】自分は客中になんでこんなところへひきこしたか、それはこの江邊がひつそりとしていいからだ。こんなところへお前はわざわざこの老人をたづねてくれた、けふは自分もむねのながはれやかである。おまへは自分がこのかやぶきの家をこしらへるのにかねが無からうかと心配して、錢をもつて橋のそばのここへ立ちよつてくれた、まことにありがたいことである。他郷に於てはたのみにするものはただおまへあるのみだ、どうか往來する難儀などいとはぬ様にねがひたい。

蕭八明府實處覓桃栽

蕭八明府實が處より桃を覓めて栽す

奉乞桃栽一百根。桃栽一百根を乞ひ奉る、

春前爲送浣花村。春前爲に送れ浣花村。

河陽縣裏雖無數。河陽縣裏、無數なりと雖も、

濯錦江邊未滿園。濯錦江邊、未だ園に満たず。

【字解】【一】蕭八明府實。縣令の職にある蕭實、明府は縣令の敬稱。【二】覓。もとむ。【三】栽。うえること。【四】桃栽。栽するに足るべき桃の義。【五】河陽縣。晉の潘岳、河陽の縣令となり花をうみたり、今借りて蕭實が答贈する縣をいへり、實際の地は何といふ縣なるか明ならず。【六】濯錦江。即ち錦江。

【題義】某縣の縣令蕭實なる人のところから桃の苗木をもとめる詩なり。

【詩意】桃の苗木百本おねがひいたすが、自分のためにどうか春のおそくならぬうちにそれを浣花の村へ送つていただきたい。あなたの支配せらるる縣内ではその苗木は無數にあるであらうが、わたくしのこの江邊ではまだ園にいつぱいにはなりませぬ。

從韋二明府續處覓綿竹

韋二明府續が處從り綿竹を覓む

華軒藹藹他年到。華軒藹藹、他年到る、

蕭八明府實處覓桃栽 從韋二明府續處覓綿竹

綿竹亭亭出縣高。綿竹亭亭、縣を出でて高し。

江上舍前無此物。江上舍前、此の物無し。

幸分蒼翠拂波濤。幸に蒼翠、波濤を拂ふを分て。

【題義】 蕭續といふ縣令のころから綿竹をもとむる詩。
【詩意】 あなたはかつてりつばな馬車にのつてたくさんのともをつれ綿竹縣へゆかれたことがある、そのとき縣舍のうへに綿竹がたくしげつて出てゐたでありませう。わたくしの住居のところにはそいつが有りませぬ、どうぞみどりの波濤が風に吹き拂はるるやうなみごとなやつを分けていただきたい。

【題義】 蕭續といふ縣令のころから綿竹をもとむる詩。

【詩意】 あなたはかつてりつばな馬車にのつてたくさんのともをつれ綿竹縣へゆかれたことがある、そのとき縣舍のうへに綿竹がたくしげつて出てゐたでありませう。わたくしの住居のところにはそいつが有りませぬ、どうぞみどりの波濤が風に吹き拂はるるやうなみごとなやつを分けていただきたい。

【題義】 蕭續といふ縣令のころから綿竹をもとむる詩。
【詩意】 あなたはかつてりつばな馬車にのつてたくさんのともをつれ綿竹縣へゆかれたことがある、そのとき縣舍のうへに綿竹がたくしげつて出てゐたでありませう。わたくしの住居のところにはそいつが有りませぬ、どうぞみどりの波濤が風に吹き拂はるるやうなみごとなやつを分けていただきたい。

憑何十一少府邕覓椳木栽 何十一少府邕に憑りて椳木を覓めて栽す

草堂塹西無樹林。草堂塹西、樹林無し。

【字解】 〔一〕憑、よる、おかけ

非子誰復見幽心。子に非ずんば誰か復た幽心を見む。

飽聞椳木三年大。飽くまで聞く椳木三年大なりと、

與致溪邊十畝陰。與に致せ溪邊十畝の陰。

【題義】 縣尉何邕の世話で「はげしぱり」の木をもとめた詩。
【詩意】 わたしの草堂の「はり」の西の方には樹木のはやしがない。あなたでなければだれがわたしの幽邃をめづる心を知つてくれるものがあらう。三年ごし大きくなつてゐる「はげしぱり」があなたの方にあることはよつくきいてゐる。どうぞわたしのためにこのかはべりの十畝の樹陰をおくつてく

【題義】 縣尉何邕の世話で「はげしぱり」の木をもとめた詩。

【詩意】 わたしの草堂の「はり」の西の方には樹木のはやしがない。あなたでなければだれがわたしの幽邃をめづる心を知つてくれるものがあらう。三年ごし大きくなつてゐる「はげしぱり」があなたの方にあることはよつくきいてゐる。どうぞわたしのためにこのかはべりの十畝の樹陰をおくつてく

【詩意】 わたしの草堂の「はり」の西の方には樹木のはやしがない。あなたでなければだれがわたしの幽邃をめづる心を知つてくれるものがあらう。三年ごし大きくなつてゐる「はげしぱり」があなたの方にあることはよつくきいてゐる。どうぞわたしのためにこのかはべりの十畝の樹陰をおくつてく

憑韋少府班覓松樹子栽 韋少府班に憑りて松樹子を覓めて栽す

落落出羣非樛柳。落落、羣を出づるは樛柳に非ず、

青青不朽豈楊梅。青青不朽なるは豈に楊梅ならむや。

憑何十一少府邕覓椳木栽 憑韋少府班覓松樹子栽

【字解】 〔一〕羣、班は涪江縣の尉ならんと。〔二〕松樹子、松の苗木。〔三〕落落、

欲存老蓋千年意、存せむと欲す老蓋千年の意、
爲覓霜根數寸栽、爲に霜根數寸なるを覓めて栽せしめよ。

車のかさ、松の枝葉のしげりたる貌。【六】爲、我がために。【七】霜根、霜を纏たる根、松苗をさす。

【題義】 韋班をたのんで松苗をもとめうる詩。

【詩意】 落落と獨立して樹羣をぬきでてゐるものは「けやき」ではない、（松だ）。青青として朽ちざる色を示してゐるものは「やまもも」ではあるまい、（松だ）。わたしは後日成長の後は車のかさの如く千年も枯れぬ様な松の精神を保存したいとおもふ、だからあなたはその松苗の二三寸ばかりの霜根をわたしのためにもとめてうる様にさせてもらひたい。

又於韋處乞大邑瓷盤 又韋が處に於て大邑の瓷盤を乞ふ

大邑燒瓷輕且堅、大邑の燒瓷輕く且堅し、

扣如哀玉錦城傳、扣けば哀玉の如し、錦城傳ふ。

君家白盤勝霜雪、君が家の白盤は霜雪に勝れり、

【字解】 【一】韋、韋班。【二】大邑、縣の名、邛州に屬す。【三】瓷盤、やまもののおわん。【四】哀玉、かなしげな玉のおと。【五】錦城、錦官城、即ち成都の城の名。

急送茅齋也可憐、急に茅齋に送らば也可憐ならむ。

【七】也、俗語なり、「亦」に同じ。【八】可憐、その器の愛すべきをいふ。

【題義】 また韋班がところから大邑燒きの陶器のお碗をもらふためにやつた詩。

【詩意】 大邑で燒く陶器は輕くて堅い。之をたたくとかなしげな玉の様なおとをだすとこの城ぢうでの評判だ。あなたのいへにある白盤は霜雪よりもまさつてしろい。おほいそぎでわたしのところへ送つてくださるならばまことに珍重するに足るものだとおもひます。

詣徐卿覓果栽 徐卿に詣りて果を覓めて栽す

草堂少花今欲栽、草堂花少し、今栽せむと欲す、

不問綠李與黃梅、綠李と黃梅とを問はず。

石筍街中却歸去、石筍街中に却つて歸り去る、

果園坊裏爲求來、果園坊裏爲に求め來る。

【字解】 【一】詣、いたる、宅へゆきしこと。【二】徐卿、其名詳ならず、作者「徐卿二子歌」あり、同一人ならん。【三】果、果樹なり、即ち詩中の李と梅なり。【四】綠李、黃梅、綠といひ、黃といふは果實の色をいふ。【五】石筍街、作者歸りみちに通過する街の名。【六】果園坊、徐卿が居る所、第三句と第四句とは倒敘法を用ふ。【七】

又於韋處乞大邑瓷盤 詣徐卿覓果栽

【題義】徐卿といふ人のところへでかけていつて果樹をもとめてうゑたことをのぶ。
【詩意】わたしの草堂では花が少いからいまうゑようとおもふ。縁の實がなる李でも黄い實がなる梅でもどれでもかまふことはない。それで自己のためにあなたの居る果園坊までさがしに來たのだが、これから石筍街をとほつてうちへもどつてゆく。

堂成

堂成る

背郭堂成蔭白茅。背郭、堂成りて白茅に蔭はる、
縁江路熟俯青郊。縁江路熟して青郊に俯す。
椋林礙日吟風葉。椋林日を礙ふ風に吟する葉、
籠竹和煙滴露梢。籠竹煙に和す露を滴らす梢。
暫止飛鳥將數子。暫く止まる飛鳥は數子を將る、
頻來語燕定新巢。頻りに來る語燕は新巢を定む。

【字解】【一】背郭、くるわを負ふこと。【二】蔭、おほふ、かやしなかせて屋根を葺きしなふ。【三】縁江、かはぞひ。【四】路熟、往來になれしこと。【五】俯、みおろすこと。【六】青郊、青き草のあゐる野外。【七】礙日、日光をさへぎる。【八】籠竹、竹の種類の名、節のあひだ八九寸ありと。【九】和煙、煙をおぶること。【一〇】將、率ゐ

旁人錯比揚雄宅。

旁人錯つて比す揚雄が宅、

懶惰無心作解嘲。

懶惰にして解嘲を作るに心無し。

【一】揚雄宅、漢の哀帝の時雄は隠れて太玄經を起草せり、人々の尙白きを嘲るものあり、因つて「解嘲」を作る。【二】解嘲、上ること。【三】語燕、さへづるつばめ。【四】旁人、よその人。【五】錯比、まちがへてなぞらへる。

【題義】草堂のできしことを詠す。上元元年春暮の作なるべし。

【詩意】城のそとくるわをせ負うて白茅で屋根をかけた堂ができあがつた。江ぞひのかよひなれた路にあたつて青い野原をみおろすことができる。はげしはりの林は日光をさへぎつてその葉は風に鳴つてをるし、籠竹の露を滴らす梢は煙をもおびてをる。しばしきてとまる鳥は三四の雛をつれてをり、ちやくや鳴きかはしてしきりにやつてくる燕はここに新しき巢を置いておくことにした。わきの人はまちがへてこの宅を揚雄の宅に比べるものがあるが、さういはれても自分はなまけもので「解嘲」を作らうといふ心もまたぬ。(そのままにしておく)。

蜀相

蜀相

丞相祠堂何處尋。丞相の祠堂何の處にか尋ねむ、
錦官城外柏森森。錦官城外、柏、森森たり。

【字解】【一】蜀相、蜀漢の丞相諸葛亮、字は孔明をいふ。【二】丞相、諸葛亮をいふ、後漢の建安廿六

堂成 蜀相

映塔碧草自春色。塔に映ずる碧草は自ら春色、
 隔葉黃鸝空好音。葉を隔つる黃鸝は空しく好音。
 三顧頻繁天下計。三顧頻繁なるは天下の計、
 兩朝開濟老臣心。兩朝開濟するは老臣の心。
 出師未捷身先死。出師未だ捷たず身先づ死す、
 長使英雄淚滿襟。長く英雄をして涙襟に満たしむ。

年蜀の劉備帝位に即き、諸葛亮を以て丞相・録尚書事となす。【一】祠堂、やしろ、廟なり、諸葛亮の廟は成都の西北二里にあり、劉備が廟の西にありと。【二】錦官城、成都の西城の名、魏錦の官を置くによりて名づくといふ。【三】柏、「はく」の木。【四】森森、たちならぶさま。【五】塔、堂のきざし。【六】黃

【一〇】頻繁、繁一に頻に作る、頻繁も頻頻もしげきこと、三たびも訪ふとはしげきことなり。【一一】天下計、此語は不完全句なり、劉禪との二代をいふ。【一二】開濟、此の二字について明解を下せしものあるを聞かず、或は開濟、美の義とし、或は開濟、務の義とするも、皆の劉現傳の現忠亮開濟、司馬瑋傳の性開濟好施、桓宣傳の開濟篤素、等の用例によれば唐時の慣例として人の性格を寫すに「開濟」なる語ありしがごとし、疑らくは開濟、事の義ならんか、暫らく之によりてとく。【一三】老臣、亮をさす。【一四】出師、蜀の建興五年亮軍をひきゐて北のかた漢中に駐まり魏を伐たんとす、發するにのぞみ後主に對し出師表をたてまつる。【一五】未捷身先死、亮後ち又大衆を盡くして斜谷より出で武功の五丈原に據り司馬懿と渭水の南に對陣すること百餘日、建興十二年陣中に卒す。【一六】英雄、後世の英雄をいふ。

【題義】成都の諸葛亮の廟に謁して作る。

【詩意】蜀の丞相諸葛孔明の祠堂は何處にたづぬべきか、それはほかならぬ錦官城外の柏樹の森とたちならんだところがそれである。來てみればきざしはしに映うてゐる碧の草はおのづから春色を呈してをるが、葉かげにさへづるうぐいすはいたづらによいねいろにないてゐるばかり、其の人は見えぬのである。むかし蜀の先主がしげしげと三たびまでこの人を草廬のうちに顧みたといふは天下を安んずるの計を定めたためばかりであつたのであり、親子二代の君に對してかくすところなく胸のうちをひらいて仕事をなしたといふはまつたくこの老臣の心からでたことである。しかるにせつかく魏を伐たんとする軍隊を出しながらまだかちいくさとならぬうちに自分のからださがさきに死んでしまはれた。これはまことに残念至極のことであつて、永久に後世の英雄をして涙を襟もとに満たさしむる次第である。

梅雨

梅雨

南京犀浦道。四月熟黃梅。南京、犀浦の道、四月、黃梅熟す。
 湛湛長江去。冥冥細雨來。湛湛として長江去り、冥冥として細雨來る。
 茅茨疎易濕。雲霧密難開。茅茨、疎にして濕ひ易く、雲霧、密にして開け難し。

梅雨

竟日蛟龍喜。盤渦與岸迴。竟日、蛟龍喜ぶ、盤渦、岸と廻る。

【字解】【一】梅雨。梅のみのなるころふるあめ、「つゆのあめ」。【二】南京。成都をいふ、至徳二載成都府を改めて尹を置き東西二京になぞらへ南京と號す。【三】犀浦。縣の名、成都の一部、浣花溪は犀浦縣に屬す。【四】黃梅。梅のきばんだ實。【五】湛湛。水のたたへしさま。【六】長江。錦江の水。【七】竟日。ひいつばい。【八】蛟龍。水中の動物。【九】盤渦。うづまき。【一〇】與。岸廻。岸の勢にしたがつてめぐる。

【題義】草堂のつゆのさまをのぶ、上元元年四月の作。

【詩意】南京の犀浦縣の吾が居宅の道では四月に梅のみが熟する。このときの江の水は湛湛とたたへて流れ去り、くらつぽくこまかな雨がふつてくる。吾が家のかやぶきのやねはまばらであるから濡りやすく、雲や霧は濃くとざして開けがたい。一日ちう喜んでゐるものは水中の蛟龍であり、水面のうづまきは岸勢にしたがつて回轉しつつかある。

爲農

農と爲る

錦里煙塵外。江村八九家。錦里、煙塵の外、江村、八九家。

圓荷浮小葉。細麥落輕花。圓荷、小葉浮び、細麥、輕花落つ。

卜宅從茲老。爲農去國賒。宅を卜して茲れ從り老いむ、農と爲つて國を去ること賒なり。

遠慚勾漏令。不得問丹砂。遠く勾漏の令に慚づ、丹砂を問ふことを得ず。

【字解】【一】錦里。錦官城の里、即ち浣花溪の地をさす。【二】煙塵。烽煙風塵、これは故郷京洛の兵馬のことをいふ、下の「去國賒」の意なり。【三】江村。浣花村をいふ。【四】去國。京洛をはなれる。【五】賒。はるか。【六】勾漏令。晉の葛洪が故事、洪、勾漏に丹砂を出だすとき其地の令となる、勾漏縣は勾漏山の下にあり、勾漏山は安南に在り。【七】問丹砂。上にみゆ。

【題義】農民となつて住むことをのぶ、上元元年春の季の作。

【詩意】この錦里は兵馬のちりからかけはなれたところで、江ぞひの村八九軒の家があるばかりだ。みわたせば圓い荷は小さい葉を水面にかけてをり、細かな麥の實からは輕らかな花が落ちる。自分はこの居宅を卜してこれからここでくらさうとおもふ、まことにほるはる故郷からはなれた處に農民となつたものだ。ただ自分が遠いむかしの勾漏の縣令にはづかしくおもふことは丹砂いかにと問ふことができぬことだ。(丹砂が得らるるならば大にながいきをすることもできるであらうのに)。

有客

客有り

患氣經時久。臨江卜宅新。氣を患へて時を經ること久しく、江に臨みて宅を卜する

喧卑方避俗。疎快頗宜人。喧卑方に俗を避く、疎快頗る人に宜し。

有客過茅宇。呼兒正葛巾。客有り茅宇に過る、兒を呼びて葛巾を正す。

爲農有客

自鋤稀菜甲。小摘爲情親。 自ら鋤けば菜甲稀なり、小しく摘むは情親の爲なり。

【字解】 〔一〕有客 此篇の題「有客」と次篇の「賓至」とは名目いれちがひになり居たりした仇氏「草堂本」によりて正したり。有客とは偶然に來客ありしをいふ。〔二〕患氣 肺氣の病をわづらふ。〔三〕臨江 江は錦江。〔四〕喧卑 やかましくいやし、俗居のさま。〔五〕疎快 世事とほざかりてかつてに氣もちよくして居ること。〔六〕宜人 自己にとりてつがふよし、人といふはひろくいへるのみ。〔七〕葛巾 くづの織維して織りし頭巾。〔八〕菜甲 甲とは野菜のでたての「くき」をいふ。〔九〕小摘 すこしばかりつむ。〔一〇〕情報 ころやすい人、即ち來客をさす。

【題義】 ふと來客ありしことをよめり。

【詩意】 自分はながらく肺の病氣をしてゐるが、このごろ江のそばにあらたに居宅を卜した。ちやうどやかましくいやしい世俗を避けることができ、きままに世ばなれてゐるところは自分にとつてぐあひがよろしい。かかるころへお客が芽ぶきの家へたづねてくれたので、こどもを呼んで葛の頭巾をかぶりなほす。客にそなへるものは手づくりの野菜だ。それは自分が鋤いてつくつたので心立ちは稀れではあるが、ころやすのお客であるからすこしばかり之を摘んでさしあげるのだ。

賓至

賓至る

幽棲地僻經過少。 幽棲地僻にして經過少し、

老病人扶再拜難。 老病人扶けて再拜難し。

【字解】 〔一〕賓至 これもお客が來たことないふ。「有客」と「賓至」とは偶然と故意とのちがひありなどいふは拘泥の見ならん。〔二〕幽棲

豈有文章驚海內。 豈に文章の海内を驚かす有らむや、

漫勞車馬駐江干。 漫に勞す車馬の江干に駐まるを。

竟日淹留佳客坐。 竟日淹留、佳客坐す、

百年蠶繭腐儒餐。 百年蠶繭、腐儒餐す。

不嫌野外無供給。 野外供給無きを嫌はずんば、

乘興還來看藥欄。 興に乗じて還た來つて藥欄を看よ。

【七】漫勞 いたづらにわづらはす、客が虚名にまどはされて來たと謙遜していふ。〔八〕車馬 客のそれ。〔九〕江干 干は「ほとり」。〔一〇〕佳客 來客をほめていふ。〔一一〕百年 生涯。〔一二〕蠶繭 あらくついた糸、一斛の粟を六斗につくが繭なりと。〔一三〕藥欄 藥草島のてすり、作者病身なれば園にかかるものあるなり。

【題義】 お客の來りしにつけてのふ。

【詩意】 自分が幽棲してゐる土地はかたよつたところで立ちよつてくれる人はすくない。また年よりで病氣もちの自分はわきのものに扶けてもらうてもお客におじぎするのは困難だ。お客は或は自分の文章をしたうて來訪されたかしらぬが、どうして自分には海内を驚かすほどの文章があらうや。じつにわざわざこの江べりのところへ車馬をとどめてくださったことはむだなご苦勞と申すほかはない。しかしお客さまは日いつばいここにゐのこつておすわりくださる。腐儒たる自分はいまにはじめすあ

らくついた米をたべてをる。(客もともにそれを食するならん)。野外のこととて格別おそなへするものは無いが、それをおひとひなくば、お氣のむいたときまたおいでになつて庭の藥草ばたけのところをごらんねがひたい。

狂夫

狂夫

萬里橋西一草堂。

萬里橋西の一草堂、

百花潭水即滄浪。

百花潭水即ち滄浪。

風含翠篠娟娟淨。

風を含みて翠篠、娟娟として淨く、

雨裊紅蕖冉冉香。

雨に裊まれて紅蕖、冉冉として香し。

厚祿故人書斷絶。

厚祿の故人、書斷絶、

恒飢稚子色淒涼。

恒飢の稚子、色淒涼。

欲填溝壑惟疎放。

溝壑に填せむと欲するも惟疎放なり、

自笑狂夫老更狂。

自ら笑ふ狂夫老いて更に狂するを。

青色の水をいふ、滄浪之水清兮、可飲以濯吾纓、滄浪之水濁兮、可飲以濯吾足の滄浪なり、「何書(萬貫)によれば漢水より東に在る本

【字解】

【一】狂夫 病的のまじりがひには非ず、道に向て進取するものをいふ、詩題は末句の語をとりて命じたり。【二】萬里橋 錦江にかけられる橋の名。【三】西 この詩には西とあり、「懷錦水居止」詩には橋南とあり、正しくは西南に位するならん。【四】草堂 作者の諸詩句によりて察すれば、草堂の位置は成都の背郭、碧巖坊外、萬里橋西南、百花潭即浣花溪の西北に在り。【五】百花潭 即ち浣花溪。【六】滄浪

名たりとのことなれども今従はず、ここは自己の足なあらふべき水、隱退の處として用ひたり。【七】蕖 しのだけ。【八】蕖 つつむ。【九】蕖 芙蓉なり、「はすのはな」。【一〇】冉冉 次第に生ずる貌。【一一】厚祿故人 大官となつて多くの俸祿をもちつてゐる舊知の友人、指す人あるならんも何人と知りがたし、書注喪失となせども余は高適が輩かとおもふ、高適に對しては救ひを求めし詩あればなり。【一二】書斷絶 これはたまたまこのとき書信がとだえしなるべし。【一三】恒飢稚子 いつもうゑてゐることも。【一四】色 顔色。【一五】淒涼 かなしげ。【一六】填溝壑 みぞやたにはまりこんでそれをうづめる。のたれ死にすること。【一七】疎放 世とうとくし、きままにする。

【題義】 自己の狂態をあざけりて作れる詩。

【詩意】 萬里橋の西に一の草堂がある。そのそばにある百花潭の水はすなはち自分にとつては滄浪の水で隱退の場所である。みわたせば翠色の篠竹は風を含んで娟娟とうつくしく淨らかであり、雨のうるほひにつつまれてゐる。紅の蓮の花はつぎつぎにかをつてゐる。ときにこのごろは厚祿をもらつてゐた舊友からの手紙はとだえ、いつもひもじがつてゐることもの顔色はいよいよかなしげにみえてゐる。こんなわけで自分はいまにもどふへはまつてのたれ死にしさうになつてゐるのにただただ世はなれてかつてきままにしてゐる。これは元來狂夫であるこの自分は年がよつてもう一層狂氣じみてきたのかと、自分ながらをかしくなる。

田舎

田舎

田舎清江曲、柴門古道旁。田舎、清江の曲、柴門、古道の旁。

草深迷市井、地僻懶衣裳。草深くして市井迷ひ、地僻にして衣裳に懶し。

楊柳枝枝弱、枇杷對對香。楊柳、枝枝弱く、枇杷、對對香し。

鷓鴣西日照、曬翅滿漁梁。鷓鴣、西日に照され、翅を曬して漁梁に滿つ。

【字解】【一】田舎 農家なり、自宅をさす。【二】市井 むかしは二十五畝を一井とし、そこに市を爲くり交易す、因て交易の地を市井といふ。【三】衣裳 體裁よく著こなすことについていふなるべし。【四】楊柳 やなぎ、楊を二に導に作る、楊柳は前に見えたり。【五】對對 これは果實の房の相對してなつてゐるをいふならん、「對對」を或は「樹樹」に作る。【六】鷓鴣 「う」のとり。【七】曬翅 はれを日光にさらしてほす。【八】漁梁 うなをとる「やなし」。

【詩意】清らかな江の曲にある百姓家。古びた道路のそばに立つ柴の門。ここは草深くしげつてどここが市井の地やらわからず、あまりにかたわなでできまりきつて著物をきるさへものうくおもふ。みれば楊柳は枝ごとになよなよとしてをり、枇杷の實は一對一對香しくみのつてゐる。「う」のとりは西日に照されて「やなし」にたくさんたかつてはねをさらしてゐる。

江村

江村

清江一曲抱村流、清江一曲、村を抱きて流る、

【字解】【一】江村 かはそひのむら。【二】梁 はり。【三】基局

長夏江村事事幽、長夏江村、事事幽なり。

自去自來梁上燕、自ら去り自ら來る梁上の燕、

相親相近水中鷗、相親み相近づく水中の鷗。

老妻畫紙爲基局、老妻紙に畫きて基局を爲り、

稚子敲針作釣鈎、稚子針を敲いて釣鈎を作る。

但有故人供祿米、但故人の祿米を供する有り、

【多病所須惟藥物】「多病須つ所は惟藥物、」

微軀此外更何求、微軀此の外更に何をか求めむ。

【題義】居村の生活のさまをのぶ。

【詩意】きよらかな錦江が一まがりまがつて村をかかへて流れてゐる。このかはそひの村では日ながの夏には事ごと幽静なものばかりだ。すなはち梁のうへにはひとりでに燕がいつたりきたりしてゐるし、水のなかの鷗はおたがひに親しみ、おたがひに近づきあうてゐる。家では老妻は紙に線を描いて基局をこしらへ、こどもは針をたたきまげてうをつりばりを作る。いま病身の自分のいりようとするものは薬品のたぐひばかりであつて、その以外のものは自分のからだにとつて何も求むるものとして

ごばん。【四】敲針 すぐなる針をたたいて曲げるなり。【五】釣鈎 つりばり。【六】但有故人供祿米 仇氏は「文苑英華」により此句を用ひたれども諸本みな「多病所須惟藥物」に依る、余は之に従ふ。【七】所須 須は「まつ」、いりようとする。【八】微軀 つまらないからだ、謙遜していふ。

はない。

江漲

江漲る

江漲柴門外。兒童報急流。

江漲る柴門の外、兒童、急流を報ず。

下牀高數尺。倚杖没中洲。

牀を下れば高きこと數尺、杖に倚れば中洲没せり。

細動迎風燕。輕搖逐浪鷗。

細かに動く風を迎ふる燕、輕く搖ぐ浪を逐ふ鷗。

漁人繫小楫。容易拔船頭。

漁人、小楫を繫ひ、容易に船頭を抜く。

【字解】(一)江、錦江。(二)細動、輕搖。「動」は仇氏は水のうごくことにみたり。余は鳥のさまとみる。細動は燕がこまかにうごくこと、輕搖は鷗がからくゆらぐこと、燕は水に關係なきがごとくなれども然らず、これ大水のうへの燕の水にふれんばかりにひくくとぶさまをいへるなり。(三)繫、水に流されぬ様に繩にてまとふをいふならん。(四)拔船頭、拔とは舟人の用語にて「回らす」ことなりと、或は誤に作る、誤はれぢらすこと。

【題義】江水のみなざりしさまをのぶ。

【詩意】柴門の外で江水がでてきた。こどもらは水の流れが急になつたとしらせてくる。之をきいてねだいからおりるとはや二三尺もみづかさが高くなり、そとへでて杖に倚つてみるとはや中洲がかくれてみえぬ。風を迎へて飛ぶ燕は細かに動いてゐるし、浪をおうておよぐ鷗はかろらかにゆらいでゐる。れふしたちは小さな楫を細でくくりつけて、やすやすと船の頭をむけかへてゆく。

野老

野老

野老籬邊江岸迴。

野老の籬邊、江岸迴る、

柴門不正逐江開。

柴門正しからず江を逐うて開く。

漁人網集澄潭下。

漁人の網は集まる澄潭の下、

估客船隨返照來。

估客の船は返照に隨つて來る。

長路關心悲劍閣。

長路關心、劍閣を悲しむ、

片雲何事傍琴臺。

片雲何事ぞ琴臺に傍ふ。

王師未報收東郡。

王師未だ報せず東郡を收むるを、

城闕秋生畫角哀。

城闕秋生じて畫角哀し。

【原注】至德二年、陸成郡爲南京、故得稱「城闕」。

【一〇】悲劍閣、劍閣によりて隔てらるるを悲しむなり。【一一】片雲、此句敘景にして兼て自己の身況をたとへたり、片雲はよるべなきひとひらの雲。【一二】傍、そふ。【一三】琴臺、司馬相如の故迹、別に「琴臺」の作あり、其餘下をみよ、哀は浣花溪の北にありといふ。【一四】王師、官軍。【一五】收東郡、東郡は洛陽以東の諸郡をさす。乾元二年九月に東京及び濟・汝・鄭・滑

江漲 野老

の四州皆賊に陥り、上元元年六月、田神功、史思明が兵を鄜州に破りしも、東京の諸郡は未だ收復さるるにいたらず。【二六】城關。成都の城關、關は宮門についていふことばなれども、成都は南京にのぼされ都としての取りあつかひを受くるゆゑかくいふこと作者の自注にみゆ。【二七】秋生。秋になること。【二八】畫角哀。畫き飾りたる角ぶゑの音かなし。

【題義】成都に客寓して賊の平がざるため故郷にかへり得ざるのさびしさをのべたり。

【詩意】自分の家の籬のほとりでは錦江の岸がまがつてゐる、だから柴の門もまがつた江の形のままに折れまがつて開かれてある。みれば魚をとる人人の網は澄潭のところに集つてをるし、流れを下つてくる商人の船も夕日のてりかへしとともに泊りすべくやつてくる。故郷まで道路のとほいことは気がかりであつて劍閣にへだてられてゐることはことに悲しいのである。琴臺の方をみると一片の雲が之によりそうてゐるがなんでそんなところによりそうてゐるのか、そのころもちがわからぬ。(なんで自分もその雲のやうにこんな土地へきてゐるのか)。官軍が東方の諸郡をとつたといふしらせはまだない、ただこの城の門關には早くも秋が生じて軍隊の吹きならす角ぶゑのねがあはれにきこゆる。

雲山

雲山

京洛雲山外、音書靜不來。京洛、雲山の外、音書、靜にして來らず。

神交作賦客、力盡望鄉臺。神は交はる作賦の客、力は盡く望郷臺。

衰疾江邊臥、親朋日暮迴。衰疾、江邊に臥す、親朋、日暮に迴る。

白鷗元水宿、何事有餘哀。白鷗元水宿す、何事ぞ餘哀有る。

【字解】【一】雲山。雲のある山。【二】京洛。長安・洛陽。【三】音書。故郷からのたより。【四】靜。ひっそり、おとさたなきをいふ。【五】神交。精神相交る。【六】作賦客。司馬相如をさす。【七】力盡。氣力なきなり。【八】望郷臺。成都縣北九里に在り、隋の蜀王秀の築きし所なりといふ。【九】衰疾。老衰・疾病。【一〇】江邊。江は錦江。【一一】親朋。親戚朋友。【一二】迴。かへり去るをいふ。【一三】水宿。水邊にとまる、鷗を以て自家の泥にたとへていへり。

【題義】第一句の雲山の二字をとって題とせしまでなり。客寓のさびしさをのぶ。

【詩意】長安洛陽は遠く雲山のかなたにあつて、故郷からのたよりはひつそりとしてちつとも來ぬ。吾が精神はいたづらに此地のうんだ賦家たる司馬相如とゆきかよつてをるが、この望郷臺に於て故郷をながめるために氣力は盡きはてた。自分はこのかはべりで衰疾でうちふし、親戚朋友らは日が暮れるとみなもどつていつてしまふ。水邊をみれば白い鷗が宿つてゐる、彼は水に宿るが本性であるのに、なせか知らんがあはれにたへきれぬ様なさまがみえる。(自分もこの「かもめ」に似てゐるとの意。)

遺興

興を遺る

干戈猶未定。弟妹各何之。

干戈猶未だ定らず、弟妹各何くに之く。

拭淚霑襟血。梳頭滿面絲。

涙を拭へば襟を霑す血なり、頭を梳れば満面の絲。

地卑荒野大。天遠暮江遲。

地卑くして荒野大に、天遠くして暮江遲し。

衰疾那能久。應無見汝期。

衰疾那ぞ能く久しからむ、應に汝を見る期無かるべし。

【題義】客寓のものおもひをやりしことをのぶ。

【詩意】いくさがまだ平定せぬ。弟や妹はそれぞれどこへゆきしことやら。涙をぬぐうてみれば

襟もとをうるほすは血の涙であり、頭をくしてとかせば白髪がぬけおちてかほちうにふりかかる。家

のそとをながめると、地面は卑く平で荒れた野はらが大きく横はり、天は遠くつらなつて夕ぐれの江

はゆるくながれてゐる。自分の老衰疾病ではとてもこの世にながく生きてゐることはあるまいから、

おまへたち（弟妹をさす）に面會する時期は無いであらう。

遺愁

愁を遣る

養拙蓬爲戸。茫茫何所開。

拙を養ひて蓬を戸と爲す、茫茫何の開く所ぞ。

江通神女館。地隔望鄉臺。

江は通す神女館、地は隔つ望郷臺。

漸惜容顔老。無由弟妹來。

漸く惜む容顔の老ゆるを、弟妹の來るに由無し。

兵戈與人事。回首一悲哀。

兵戈と人事と、首を回せば一に悲哀なり。

【字解】「一」雙拙。世わたりべたなもちまへを養ふ。「二」蓬爲戸。貧居の様子。「三」茫茫。ひろびろとしてはつきりせぬ貌。

【何所開】戸の前にはいかなるものが開きいだされるか。「四」江。揚子江。「五」神女館。巫山の神女の廟をさす、廟は夔州府

巫山縣治の西北二百五十歩にありと。「六」地隔望郷臺。地は夔州の地をさす、望郷臺は成都に在り、前の「雲山」の詩にみえたり。

【題義】夔州客寓のさびしさをのぶ。夔州時代の作。

【詩意】自分はおちまへの拙なところを養うて蓬のくさを戸にしてをる、その戸を開けて茫茫たる前

面にながひらきだされるか、といふと江の水は神女の館に通じ、地ははるかに望郷臺をへだててを

る。自分はだんだんおのれのかほつきの年老いゆくのを惜むばかりで、弟や妹がこちらへ來るて

だては無。いくさごとといひ、骨肉間の人事といひ、首をめぐらしてみればただただかなしくおほ

ゆるのみのことである。

【餘論】仇氏は此篇を成都の作とし舊編夔州に置きたるを非とせり。しかしながら成都の作とせば、

「江通」の江は錦江なり、錦江にて江は巫山縣の神女館に通ずとは何の意ぞや。又仇氏は地隔望郷臺

は即ち力盡望郷臺なりといへるが、大意はそれにてよろしきも、成都の作とせば地隔望郷臺は地と望

郷臺とを同一視し、隔とは京洛に對して隔たるの義とみざる可からず。これ文法の慣例上不可なり、

上句の江と館とは別物なり、下句に於ても地と臺とは別とみるが常例なり、仇氏之を同視せんとするは無理なり、仇氏又曰く、夔州にありては作者峽を出でんことを思ひをるに何ぞさかのぼつて望郷臺のことを言はんや、と。これ然らず、江通・地隔の二句は第二句の何所開を承けて来る、故に一は夔州の下流の神女館をあげて且つそれとなく妹に想到し、一は上流の望郷臺をあげてややひろく郷を望むの意を喚び起せしなり、かくして漸惜以下下半の結をなせり、決して不自然といふべからず。舊編によりて之を夔州の詩中に置くに如かず。

杜鵑行

杜鵑行

古時杜宇稱望帝。魂作杜鵑何微細。跳枝竄葉樹木中。
搶伴瞥振雌隨雄。毛衣慘黑貌憔悴。衆鳥安肯相尊崇。
繁形不敢栖華屋。短翮惟願巢深叢。穿皮啄朽背欲秃。
苦飢始得食一蟲。誰言養雛不自哺。此語亦足爲愚蒙。
聲音咽咽如有謂。號啼畧與嬰兒同。口乾垂血轉迫促。
似欲上訴於蒼穹。蜀人聞之皆起立。至今相效傳微風。

迺知變化不可窮。豈思昔日居深宮。嬪嬙左右如花紅。

古時杜宇望帝と稱す、魂杜鵑と作る何ぞ微細なる。枝に跳り葉に竄る樹木の中、搶伴瞥振雌雄に隨ふ。毛衣慘黑貌憔悴、衆鳥安んぞ肯て相尊崇せむ。繁形敢て華屋に栖まず、短翮惟深叢に巢くはむことを願ふ。皮を穿ち朽に啄み背秃せむと欲す。苦飢始めて一蟲を食することを得。誰か言ふ雛を養ふに自ら哺せずと、此の語亦愚蒙と爲すに足れり。聲音咽咽謂ふ有るが如く、號啼畧嬰兒と同じ。口乾き血を垂れて轉た迫促、上りて蒼穹に訴へんと欲するに似たり。蜀人之を聞きて皆起立す、今に至つて相效ひて微風を傳ふ。迺ち知る變化窮むべからざるを。豈思はんや昔日深宮に居り、嬪嬙左右花の如く紅なりしことを。

此篇「文苑英華」に刻作「司空曙」といひ、注して「又見「杜甫集」」といへり。仇氏は蔡本の之を夔州の詩の内に置きたるを「蜀人聞之」の語ありとて成都の作にひきあげたり。余案するに「蜀人聞之」の語ありとて成都の詩たるの體となすに足らざるのみならず、杜の作なるや否やも疑問なり。余は寧ろ他人の作のまぎれこみしものとおもふ。詩また見るに足らず、故に釋せず。

題壁上韋偃畫馬歌

壁上之韋偃畫馬歌

杜鵑行 題壁上韋偃畫馬歌

韋侯別我有所適。
 知我憐渠畫無敵。
 戲拈秃筆掃驕驄。
 歛見騏驎出東壁。
 一匹齧草一匹嘶。
 坐看千里當霜蹄。
 時危安得真致此。
 與人同生亦同死。

韋侯我に別れて適く所有り、我が渠が畫の敵無きを憐むを知りて、戲れに秃筆を拈りて驕驄を掃ふ、歛ち見る騏驎の東壁に出づるを。一匹は草を齧み一匹は嘶く、坐に看る千里、霜蹄に當るを。時危くして安んぞ真に此を致して、人と生を同じくし亦死を同じくする。

馬ことに元氣よし、當は時間のうへにてぶつつかる意なるべし、ちやうどいま霜蹄で踏みつつあるをいふ、或は適當する、霜蹄にふさはしいといふ義にもみらるべし。【一】時危 時世安穩ならず。【二】安得 希求の時、下旬までかかる。【三】致此 此は馬をさす、致はこちらへ招きいたす。

【題義】韋侯が旅行せんとするとき馬を畫してくれた、それを壁上にかけてみて、之に題した詩。

【詩意】韋君は自分に別れてどこぞへゆかうとしてゐる、自分は彼が畫では敵するもの無いほど名人

【字解】【一】韋侯 京兆の人に、渠は獨に寓居す、馬を畫くを以て名あり、假或は驕に作る。【二】韋侯は敬稱、假をさす。【三】有所適 どこぞへ旅行せんとするなり。【四】渠 「かれ」假をさす。【五】拈 ひれる、取り弄ぶをいふ。【六】秃筆 毛さきの坊主になつたふで。【七】掃 かきながること。【八】驕驄 駿馬。【九】歛 忽ち。【一〇】騏驎 千里の馬。【一一】齧 かむ。【一二】千里 千里の遠地。【一三】當霜蹄 霜蹄とは秋のひづめ、秋は

であることを愛してゐる、彼もそのことを知つてゐるので自分のために戲れにはげちよろけの筆をひねつて驕驄のさまをかきながつてくれた。にはかに東壁の上に騏驎の名馬があらはれ出たのをみとめる。その一匹は草をたべてをり、一匹はいないでをる。いまちやうど霜をおびた蹄で千里の地を踏みつつあるの姿がそのままみられるのである。いま世がまだ太平にならぬ時だ、ほんたうにこんな名馬を招きよせて騎り手といつしよに戰場で生死させることができぬものだらうか、できるならどうかさうしてみたい。」

戲題王宰畫山水圖歌

王宰が畫ける山水の圖に戲れに題する歌

十日畫一水。
 五日畫一石。
 能事不受相促迫。
 王宰始肯留眞跡。
 壯哉崑崙方壺圖。
 挂君高堂之素壁。

十日に一水を畫き、五日に一石を畫く。能事、相促迫するを受けず、王宰始めて肯て眞跡を留む。壯なる哉崑崙方壺の圖、君が高堂の素壁に挂く。

【字解】【一】王宰 蜀の人に、能く蜀の山を畫くといふ。【二】能事 能力を發揮すること、繪畫のことをなす。【三】促迫 さいそくする、日限をいそぐなり。【四】眞跡 眞の筆のあと。【五】崑崙 仙山。【六】方壺 海中の三山を三壺といふ、方丈を方壺、蓬萊を蓬壺、瀛州を瀛壺といふ、壺といふはその

巴陵洞庭日本東 巴陵洞庭、日本の東

赤岸水與銀河通 赤岸の水は銀河と通ず。

中有雲氣隨飛龍 中雲氣の飛龍に隨ふ有り。

舟人漁子入浦瀨 舟人漁子、浦瀨に入る、

山木盡亞洪濤風 山木盡く亞ぐ洪濤の風に。」

尤工遠勢古莫比 尤も遠勢に工なり、古も比する莫し、

咫尺應須論萬里 咫尺應に須らく萬里を論すべし。

焉得并州快剪刀 焉んぞ并州の快剪刀を得て、

剪取吳松半江水 剪取せむ吳松半江の水を。」

此句と次の「山木」の句は倒置なり。【七】山木 山に生じたる樹木。【八】亞 つぐ、畫面にていひ、山木が下方にあり、濤が上部にあるをいふ。【九】洪濤風 風、おほなみを吹くさまをいふ。【一〇】遠勢 遠方をながめた景色。【一一】咫尺 畫幅の面積。【一二】萬里 即ち遠景。【一三】并州 今の山西省の地、切れものであるところ。【一四】快剪刀 きもちよくきれるたちものかたな。【一五】剪取 この二字はこの畫幅についていふとみゆ、畫面に松江に似たところあるによりその部分なきつてとりたいたいふなり、これ題に「戲れに」とある所以なり。【一六】吳松 吳地の松江、松江は萬貫の三江の一、松江府の南四十五里にあり、作者

形、上廣く中狭く下方(しかく)なればなりと。【七】君 王宰をさす。【八】素壁 しろいかべ。【九】巴陵 今の湖南岳州府。【一〇】洞庭湖 の名、巴陵の西にあり。【一一】赤岸 山の名、揚州江都縣にあり。【一二】銀河 あまのがは。【一三】中有 中とは畫面の中央とおほしき處をいふ、この一句は巴陵・赤岸の二句をまとめたる句にて單句なり。【一四】舟人 せんどう。【一五】漁子 れふし。【一六】入浦瀨 瀨もまた「うら」なり、風怒り濤壯なるを以て舟人漁子等みなうらにはひるなり、

嘗て吳に遊び其地の風景を思ひて忘れず、因つて斯の言を發せり。

【題義】王宰のかいた山水の圖をみて戲れに之に題した詩。

【詩意】十日かかつて或る水を蒸がく、また五日かかつて或る石を蒸がく、かくゆつくりしてその仕事に他人からせつかねなければそこで始めて王宰は自分の眞の筆のあとをのこすのである。いやなんと壯なものではないか、君のざしきのしらかべにかけてある崑崙・方壺の圖は。巴陵の洞庭の水から日本東海の水、それに赤岸山あたりの水、それが銀河の水とあひ通じてかかれ、中央部にはそらとぶ龍について雲氣のわきたつてるところがある。また山の樹木は下方にあつてその上方にはすばらしく風だつたおほなみがかかれ、舟人・漁子等はみな浦わににげこんでをる。君は遠景を蒸がくことには尤もたくみで古人にも比ぶべきものがない、山水の圖はかくあるべきで咫尺のせまいうちに於て萬里の形勢あるや否やを論すべきである。君の蒸はあまりにうまいから、自分はどうかして并州のよきされるたちものがたなで松江の水に似たところの半分ほどをきり取つてしまひたいとおもふが、どうだ。」

戲爲韋僂雙松圖歌 戲れに韋僂が雙松の圖の歌を爲る

天下幾人畫古松 天下幾人か古松を畫く、

【字解】【一】韋僂 前にみえた

戲爲韋僂雙松圖歌

畢宏已老韋偃少。畢宏は已に老い、韋偃は少し。
 絶筆長風起、纖末。筆を絶てば長風、纖末より起る。
 滿堂動色嗟神妙。滿堂色を動かして神妙と嗟す。
 兩株慘裂苔蘚皮。兩株慘裂す苔蘚の皮。
 屈鐵交錯迴高枝。屈鐵交錯して高枝廻る。
 白摧朽骨龍虎死。白なることは朽骨摧けて龍虎死し、
 黒入太陰雷雨垂。黒なることは太陰に入りて雷雨垂る。
 松根胡僧憇寂寞。松根の胡僧は寂寞たるに憇ふ、
 龐眉皓首無住著。龐眉皓首、住著無し。
 偏袒右肩露雙脚。右肩を偏袒して雙脚を露はす、
 葉裏松子僧前落。葉裏松子は僧前に落つ。
 韋侯韋侯數相見。韋侯韋侯、數相見る、
 我有一匹好東絹。我に一匹の好東絹有り。

【一】雙松 二本の松樹。【二】畢宏 天寶中の御史にして善く古松をみかくといはる、宏はのちに大曆二年に給事中となり、京兆少尹・左庶子等の官となれり、古松に於ては古風を變ずと稱せらる。【三】絶筆 筆を止めること、かき了る。【四】長風 遠く吹くかぜ。【五】纖末 松の葉すみをいふ。【六】滿堂 滿堂の人。【七】動色 色は顔色、動色は驚いて色をかへること。【八】屈鐵 力がたたくるがね、枝の形容。【九】交錯 まじはる。【一〇】迴 回曲するをいふ。【一一】白 松樹皮の色。【一二】黒 回枝の色。【一三】太陰 積陰なり、極北の地を太陰といふと。【一四】胡僧 西域より來た外國僧。【一五】寂寞 松樹のはえた場所をさす。【一六】龐眉 ふさふ

重之不減錦繡段。之を重んずる減せず錦繡段。
 已令拂拭光凌亂。已に拂拭せしめて光凌亂たり、
 請君放筆爲直幹。請ふ君筆を放つて直幹を爲れ。

さしたまゆ。【一六】皓首 しががあたまた。【一七】無住著 行跡さまりなし。【一八】偏袒 かたはだぬぐ。【一九】露 あらはず、はだしのこと。【二〇】葉裏 地につもつてある葉のなか。【二一】東絹 或は曰く關東の絹なり、或は曰く雲溪の絹なりと、雲溪は梓州鹽亭縣にあり、成都の東にあたる。【二二】錦繡段 畫衛が四悉詩のなかの語、段は一くぎりをいふ。【二三】拂拭 ほこりをはらひぬぐふ。【二四】直幹 まつすぐなみき。【二五】放筆 ほ

【題義】 韋偃が二本の松の樹を畫いたのをみて戯れにその歌をつくる。偃が屈曲した松をたくみに畫いたのをみてまつすぐな幹をかけといふは戯れなり。
 【詩意】 いま天下に古松をよくかくものは幾人あるか、畢宏は年よりになつたし、韋偃はわかい、この二人ぐらゐのものか。偃がかき了ると松の葉すゑから遠く吹く風がおこつてくる、之をみて一座の人人はみななかほ色をかへて神妙と歎美する。その松は二株あつて苔むした皮がむごたらしく裂け、高い枝が下へまがつてかがめた鐵がたがひにまじはつてゐる。苔皮のさけた幹は白くてたとへば朽ちた骨がくだかれて龍虎が死んでゐるかのごとく、鐵の様な枝のさがつてまじはり黒くなつてゐるところはたとへば積陰中に入つて雷雨が垂れさがつてゐるかの様である。松の根もとに胡僧がをり、ひ

つそりしたところにやすんでゐる。その僧はしらがあたままでふさふさした眉をもち、住所不定の僧の様だ。かれは右の肩の方をかたはだぬぎになり、左右ともはだしである。僧の前には葉のなかに松ぼつくりが落ちちつてゐる。韋君よ、自分はあなたとたびたびかほをあはせてゐる、懇意なあひだからだ。自分は錦繡の織物にもまけず大切にしていゐる。東絹を一匹もつてゐる、その絹はほこりをはらはせてさらさらひかる様になつてゐる。どうぞ筆にまかせてまつすぐな松の幹をかいていただきたい。

北鄰

北鄰

明府豈辭滿。藏身方告勞。

明府豈に滿を辭せむや、身を藏して方に勞を告ぐ。

青錢買野竹。白幘岸江臯。

青錢、野竹を買ひ、白幘、江臯に岸く。

愛酒晉山簡。能詩何水曹。

酒を愛す晉の山簡、詩を能くす何水曹。

時來訪老疾。步履到蓬蒿。

時に來つて老疾を訪ふ、步履、蓬蒿に到る。

【字解】【一】北鄰 北となりすんでゐる人のことをいふ。【二】明府 縣令の敬稱、黃鶴の注に蓋し王明府かといへり、案するに其人縣令にして官を辭し閑居せしものならん。【三】豈辭滿 反語によむ、「盈滿を待ちて始て之を辭するに非るしをいふ、出典は謝靈運の辭滿登多秩に本く、謝詩は漢の鄧曼容が故事を用ふ、曼容は官に在るに六百石に滿つるを待たずして之を辭す、盈滿を戒めて之

を辭するは職秩の多少によらぬことなりといふが謝詩の意なり、杜句亦同義なり。(一説に豈辭滿と疑問に訓ますものあり、亦通す) 【四】藏身 退隱する。【五】告勞 公事勞苦なりと告げて之を辭するをいふ。【六】青錢 青色の銅錢。【七】白幘 幘は頭髮をおほふ「づきん」の類。【八】岸 かつむける、幘をうしろさまにかぶりて顔をあらはすなり。【九】江臯 臯は下を水の流れてゐる「たかし」。【一〇】山簡 山濤の子、永嘉三年に襄陽の長官となり酒にのみふける。【一一】何水曹 梁の詩人何遜、遜は天監中に建安王の水曹行參軍兼記室となる、又水部郎となる、因て何水曹とも何水部ともいふ。【一二】老疾 自分の老と疾。【一三】步履 ざうり。【一四】蓬蒿 よもぎふのやど、後漢の張仲蔚が故事、作者その自宅をさす。

【題義】北鄰にすめる某氏のことをのぶ。

【詩意】あなたは縣令ぐらゐで辭職されたのだから盈滿なるを待つて之を辭したわけではなく、早く隱居するのが目的でいまや勞を告げて退棲してをられる。さうして錢をだして野生の竹を買つたり、江ぞひのをかき白いづきをゆがめてかぶつたりしてをられる。あなたは酒を愛することは晉の山簡のごとく、詩のできることは梁の水曹何遜のごとくである。そのおかたが時にはわたくしの病氣をおたづねくだされ、さうりばきでいぶせき宿へおこしになる。(ごしんせつありがたいことにおもひまするの意)

南鄰

南鄰

錦里先生烏角巾。

錦里先生、烏の角巾、

【字解】【一】南鄰 南となり

北鄰 南鄰

園收芋栗不_レ全貧。園に芋栗を收む、全く貧ならず。
 慣看賓客兒童喜。賓客を看るに慣れて兒童喜び、
 得食_レ塔除鳥雀馴。塔除に食するを得て鳥雀馴る。
 秋水纒深四五尺。秋水纒に深し四五尺、
 野航恰受兩三人。野航恰も受く兩三人。
 白沙翠竹江村暮。白沙翠竹、江村の暮、
 相送柴門月色新。相送れば柴門、月色新なり。

朱山人から送つてもらふ。【一〇】柴門 杜家の柴門。

【題義】南鄰の某氏を往訪せしことをしのぶ。

【詩意】南鄰の錦里先生朱山人は隱者のすがたで黒い方形の頭巾をかぶつてゐる。そのはたけには芋や栗がとれるから全く貧乏だといふわけではない。お客すきとみえてその家のこともらも賓客をみながらわたしが訪問すればよろこんでをり、いつもきざはしのそばで餌をやるものか雀などもたべものがたべられるとおもつて人になれてをる。秋の江水がやつと四五尺のところへ二三人ぐらゐのれる野

すむ人のことをいふ、朱山人なる者なり、舊解は作者南鄰へ往訪せる詩ととく、作者別に「過南鄰朱山人水亭」詩あり。【三】錦里先生 錦里は錦江の里、即ち浣花村、先生は朱山人。【四】烏角巾 黒色の方形の頭巾。【五】不_レ全貧 不一に未に作る、是なるに似たり。【六】賓客 杜甫。【七】兒童 朱家の子ども。【八】野航 航はふれ。【九】相送

舟をうかべる、その舟で白沙翠竹といふありさまの江ぞひの村の夕ぐれに送られてくるとちやうど柴門のところの月に月のひかりが新にあらはれた。

【餘論】右は舊解によつて脱けり。然れども余常に疑ふ、此の篇果して作者が朱山人を往訪せる詩なりやと。余はむしろ朱山人が作者の家へ來訪せしを送る詩ならんと考ふるものなり。他人の貧不_レ貧を論ずるも妙なものなり。終りの「相送柴門」は「柴門相送」と同じことにて、もし送られて柴門に到着せしならば「送柴門」などあるべきところなり、「柴門相送」とせば柴門から送りだす義と解すべきに似たり。

來訪の作とする立場より一解を試むべし。

【字解】【一】錦里先生 作者自己をさす、陶淵明が自ら五柳先生と稱し、白樂天が自ら醉吟先生と稱する類。【二】賓客 朱山人をさす。【三】兒童 杜家の兒童。【四】塔除 杜家の塔除。【五】相送 作者が朱山人を送る。【六】柴門 柴門不正返江門の柴門。

【詩意】錦里先生ともいふべき自分は黒い方形の頭巾をかぶり隱者のすがたをしてをる。自分ははたけに芋や栗がとれるからまるつきりの貧乏ではない。子どもはお客をみなれてゐるので客をみては喜ぶ、雀などもいつもきざはし近くで物がたべられるからよく人になれてをる。秋の江水がやつと四五尺、そこへ二三人のれる野舟をうかべる、白沙翠竹の江村の夕ぐれにその舟をうかべて客を送らうと

するとちやうど柴門のところへ新に月があらはれた。

過南鄰朱山人水亭

南鄰朱山人が水亭に過る

相近竹參差。相過人不知。相近くして竹參差たり、相過れども人知らず。

幽花敲滿樹。細水曲通池。幽花敲いて樹に滿つ、細水曲りて池に通ず。

歸客村非遠。殘樽席更移。歸客、村遠きに非ず、殘樽、席更に移す。

看君多道氣。從此數追隨。看る君が道風多きを、此れ従り數、追隨せむ。

【題義】この篇は作者が南鄰の朱山人の水邊の亭によぎりしことをしのぶ。舊編は廣徳二年作者成都に復歸せしときの作とす。仇氏は類を以て此に置きたるなり。

【詩意】我が家と君の家とは近くあつて生えてをる竹さへたがひちがひになつてをる。そこをとほつて訪問しても知る人もない。君が家にきてみると幽邃な花はいつばい樹について横に咲いてをり、ほそい水の流れが曲つて池に通じてをる。自分はやがてかへらうとおもふが遠い村へかへるわけではないので、のみのこしの樽を前にまた席をかへてのみなほす。つらつらみるに君は道家の氣象を多くそなへた人だ、自分はこれからたびたび來て君にしたがつてあそぶであらう。

因崔五侍御寄高彭州一絕

崔五侍御に因りて高彭州に寄す一絕

百年已過半。秋至轉飢寒。百年已に半を過ぐ、秋至つて轉た飢寒なり。

爲問彭州牧。何時救急難。爲に問へ彭州の牧、何時か急難を救はんやと。

【字解】(一) 崔五侍御 侍御史崔某。(二) 高彭州 彭州刺史高適。(三) 百年一句、この詩上元元年秋の作なるべし、時に作者四十九歳なり、已過半とはいひすぎたる語なり。(四) 秋至 秋來れば穀みのりてつがふよかるべき時節なり。(五) 爲問 わがために問へ。(六) 牧 民をつかさどる官をいふ、刺史をさす。(七) 急難 さしせまつた飢寒のなんぎ。

【題義】崔侍御にたのみて高適へ衣食の世話をしてくれとたのみやる詩。

【詩意】自分は百年の半分以上(實は然らず)をすぎた。秋がきたにかかはらずいよいよ飢寒にせまつてをる。わたしのために彭州の長官に「いつこのなんぎを救うてくれるか」とたづねていただきたい。

奉簡高三十五使君

高三十五使君に簡し奉る

當代論才子。如公復幾人。當代、才子を論せば、公が如き復幾人ぞ。

驕驄開道路。鷹隼出風塵。驕驄、道路開く、鷹隼、風塵を出す。

過南鄰朱山人水亭 因崔五侍御寄高彭州一絕 奉簡高三十五使君

行色秋將晚。交情老更親。行色秋將に晚れむとす、交情老いて更に親し。
天涯喜相見。披豁對吾真。天涯、相見て、披豁吾が真に對するを喜ぶ。

【字解】 一、高三十五使君。使君は刺史の敬稱。二、開道路。すすむべき道路が前面にひらけたるをいふ。三、鷹隼一句。たとへなり。四、行色。たびだちの時の様子。五、天涯二句。この二句實境にあらず、會後のことを想像していふなり。六、披豁。胸襟をひらく。七、對。高適が對するなり。

【題義】 高適に寄せた詩。詩によれば適榮任せるに似たり、彭州より蜀州に轉せしをいふか、疑ふらくは作者まさに適を訪はんとせしときの作なるべし。作時詳ならず。

【詩意】 現代に於て才子はと論するならば君の如きものは幾人あらうぞ。いま君は榮轉したので驛驢の前に千里の道路が開かれたごとく、鷹や隼が風塵からぬけだした様なものだ。吾が旅立たんとする今は秋がくれかけてをる。お互の交情は年老いていつそうしたい。今から想像してみてもうれしいことは天のはてで而會して、君が胸をひらいてちがねのままの僕のすがたに對してくれることだ。

和裴迪登新津寺寄王侍郎。【原注】王時牧蜀

何恨倚山木。吟詩秋葉黃。何の恨か山木に倚りて、詩を秋葉の黃なるに吟す。

蟬聲集古寺。鳥影度寒塘。蟬聲、古寺に集まり、鳥影、寒塘を渡る。

風物悲遊子。登臨憶侍郎。風物、遊子を悲ましむ、登臨、侍郎を憶ふ。

老夫貪佛日。隨意宿僧房。老夫、佛日を貪る、隨意に僧房に宿せむ。

【字解】 一、裴迪。詩人にして王維の親友なり。二、新津寺。新津は縣名、成都府に屬し、その西南にあり。三、王侍郎。侍郎の官の王某、其人未詳し。四、牧蜀。蜀州の刺史たるをいふ。五、何恨。何の恨あつてか。六、遊子。裴迪をさす。七、僧房。新津の寺中のへやをいふ。

【題義】 裴迪が新津の寺にのぼりて侍郎王某に寄せたる詩の意を和してつくる。王は時に蜀州の長官たり。

【詩意】 (此篇の解余自信なし。臆見をのぶ。) あなたは如何なる恨みあつてか山の木に倚つて、秋の葉の黄ばんだところで詩を吟せられるのか。またそこでは多くの蟬のこゑがふる寺にあつまり、寒い色をしたつつみのうへを鳥の影がとほる。そんな景色があなたを悲しくさせ、そのうへ高い處へのぼつたにつけて王侍郎のことなどおもひだされた。あなたの恨みはそんなことのためであらう。このおやちはあなたとはちがひ、佛の日の光をひどく愛してゐるから、意のままに僧房にとまりこんで佛の教でもきくであります。

贈蜀僧闍丘師兄 【原注】太常博士均之孫。

蜀僧闍丘師兄に贈る 【原注】太常博士均の孫なり。

大師銅梁秀。籍籍名家孫。大師は銅梁の秀なり、籍籍たり名家の孫。

嗚呼先博士。炳靈精氣奔。嗚呼、先博士、炳靈、精氣奔る。

惟昔武皇后。臨軒御乾坤。惟昔武皇后、軒に臨みて乾坤を御す。

多士盡儒冠。墨客藹雲屯。多士盡く儒冠、墨客、藹として雲屯す。

當時上紫殿。不獨卿相尊。當時、紫殿に上るもの、獨り卿相の尊きのみならず。

世傳闍丘筆。峻極逾崑崙。世に傳ふ闍丘が筆、峻極、崑崙に逾ゆと。

鳳藏丹霄暮。龍去白水渾。鳳藏れて丹霄暮れ、龍去つて白水渾る。

青熒雪嶺東。碑碣舊製存。青熒たり雪嶺の東、碑碣、舊製存す。

斯文散都邑。高價越瓊璠。斯文、都邑に散す、高價、瓊璠に越ゆ。

晚看作者意。妙絕與誰論。晩に看る作者の意、妙絶、誰と論せん。

吾祖詩冠古。同年蒙主恩。吾が祖、詩古に冠たり、同年、主恩を蒙る。

豫章夾日月。歲久空深根。豫章、日月を夾む、歲久くして空しく深根あり。

小子思疎濶。豈能達詞門。小子、思疎濶なり、豈に能く詞門に達せむ。

窮秋一揮淚。相遇即諸昆。窮秋一たび涙を揮ふ、相遇へは即ち諸昆なり。

我住錦官城。兄居祇樹園。我は住す錦官城、兄居、祇樹の園。

地近慰旅愁。往來當丘樊。地近くして旅愁を慰む、往來、丘樊に當る。

天涯歇滯雨。稔稻臥不翻。天涯、滯雨歇み、稔稻、臥して翻らず。

漂然薄遊倦。始與道侶敦。漂然、薄遊倦む、始めて道侶と敦くす。

景晏步脩廊。而無車馬喧。景晏れて脩廊に歩す、而も車馬の喧しき無し。

夜闌接軟語。落月如金盆。夜闌にして軟語に接す、落月、金盆の如し。

漠漠世界黑。驅驅爭奪繁。漠漠、世界黒く、驅驅、爭奪繁し。

惟有摩尼珠。可照濁水源。惟有摩尼の珠有り、濁水の源を照す可し。

【字解】(一)蜀僧闍丘師兄、蜀の僧闍丘某なり、師は僧を尊びていふ、兄は年長者としていふ、この僧は闍丘均が孫なり、均は成都の人に於て文章を以て稱せられ、景龍中に安樂公主の殿により太常博士に拜せらる、公主誅せらる、均も坐せられて循州の司倉に

贈蜀僧闍丘師兄

疑せられて卒す。【二】大師 僧を尊びていふ。【三】銅梁 山の名、涪江の南に在り、土地の名山をあぐ。【四】秀 山川の秀氣を
 あつめたる人物。【五】籍籍 世人のうはさきにのぼるさま。【六】名家孫 閻丘均の孫なるをいふ。【七】先博士 均をさす、先は先
 世。【八】炳靈 かがやいた神靈。【九】精氣奔 精氣はすぐれた氣、奔とは傳はるをいふならん。【一〇】武皇后 則天武后。
 【一一】龍軒 軒は殿陸のてすりをいふ、朝廷の玉座にのぞまるるを龍軒といふ。【一二】御 支配すること。【一三】乾坤 天地、世
 界。【一四】多士 多くの美士。【一五】墨客 文士。【一六】滿 むらがる貌。【一七】雲屯 くものあつまるごとく多くあつま
 る。【一八】上紫殿 りつばなごてんにのぼる。【一九】不測 それに限らぬをいふ。【二〇】閻丘筆 均が文章、文と筆と對すると
 きは、韻をふむを文といひ、ふまざるを筆といふ。【二一】峻極 たかくけはしきことのきはみ。【二二】崑崙 山の名。【二三】鳳
 巖、龍去、この二語は均が歿せしをいふ。【二四】丹霄臺 あかきそらも夕暮の如くくらくなる。【二五】白水潭 東京賦に龍飛、白
 水の語あり、庾信が齊靈王碑に鳳沈、丹穴、龍亡、黑陵の語あり、杜詩の二句は意を取りて黑陵を白水とせしまでなり、丹霄も白水も
 君の居らるる附近をさしていふ、潭は「にござる」、二句、均歿して朝廷光彩なきをいふ。【二六】青榮 あなくかがやく、碑文の光輝を
 いふ。【二七】雪嶺東 雪嶺は雪山、松州嘉城縣東にある高山、その東とは蜀の地をさす。【二八】碑碣 碣は天然石のはかじり、
 碑は身分ある人に、碣は仕官せざる者に用ふ、開元中には高僧弘忍が塔碑の文を作りしをいふ、又蜀の牛頭山下、瑞聖寺の唐崖碑の
 文を撰せりといふ。【二九】斯文 均が文章。【三〇】瓊璫 美玉なり。【三一】晚看 作者自己の晩年に於て之を看るをいふ。
 【三二】作者意 均の文の作家としての意趣。【三三】吾祖 作者の祖父杜審言。【三四】同年 均と同じ年時に於て。【三五】主恩
 主は武后。【三六】豫章 「くす」の木の類、審言の材の大をたとへていふ。【三七】夾日月 夾は「はさむ」、樹の高大なるをいふ。
 【三八】夢深根 根のみは深いが幹枝がしげり大きくならぬをいふ、孫としての自己の振はざるをいふ。【三九】小子 わかもの、作者
 謙遜していふ。【四〇】思疎澗 詩思綿密ならず。【四一】達詞門 文章のいりくちに達する。【四二】窮秋 あきのすゑ、この僧に
 てあひし時節をいふ。【四三】相遇 僧とあふ。【四四】諸昆 昆は後嗣、子孫をいふ、諸昆は蓋し羣從兄弟の關係のごとくなるをい
 ふ。【四五】錦官城 成都の西城。【四六】兄 僧をさす。【四七】紙樹園 須達長者、園を施し、紙陀太子樹を施して佛の説法の處
 とす、之を紙樹園といふ、略して紙園といひ、また須達の別名給孤獨を取りて給孤獨園といふ、こゝは寺のことに用ふ。【四八】谷丘
 美 丘は「ながし」、美は「まがき」、蓋し田野村落の地にあたるをいふ。【四九】天涯 蜀地をさす。【五〇】滯雨 ながあめ。【五一】
 稔稻 うるしれ。【五二】薄遊 しばらくあそぶ。【五三】道侶 道徳のとも、僧をさす。【五四】登晏 日のくるること。【五五】
 僧廊 長い廊下。【五六】而無車馬喧 陶淵明が句なり。【五七】軟語 しづかなはなし、佛典の語。【五八】落月 曉月をいふ。
 【五九】漢漢 ひろくつらなる貌。【六〇】驅驅 人人の争ひ走るさま。【六一】摩尼珠 圓覺經に見ゆ、清淨なる珠、蓋し法性の圓覺
 透徹塵垢に染まざるをたとへていふ。【六二】濁水源 人間界汚濁の源。

【題義】 蜀の僧閻丘某に贈れる詩。某は均が孫にして、均は作者の祖父杜審言と同じく武后に仕へし
 人なり。

【詩意】 あなたは銅梁山川の秀氣の集つてうまれた人で、やかましい名家の孫だ。ああ先世の太常
 博士のかがやいた神靈から精氣が奔りだして傳はつたものだらう。昔武皇后は玉座のてすりのとこ
 ろにのぞまれて天地を支配された。時に多くの美士があつたがそれは皆儒冠をつけた人人であり、文
 士は雲のあつまるやうに多くあつた。そのころ紫殿にのぼつたものは卿相などの尊い人人には限ら
 なかつた。世に傳ふる所では閻丘君の「筆」といはば、その高いことは崑崙の山にもこえるほどだと
 いうたものだ。君が没してからは鳳がかくれて丹きそらが暮れ、龍が去つて白水がにごつた様に朝廷
 にはかに光彩を失つてしまった。雪嶺の東に於ては君の碑碣の文の舊製がかがやいてのこつてゐ
 る。その文章が都邑に散ずるとその高價なことは瓊璫の美玉にまさるほどだ。自分は晩年にはじめて

作家たる君の意趣を看たが、その妙絶なることは何人との之をかたりあはうか、かたるべき人もない。わたしの祖父審言は詩は古人にもまさつてゐたが、君とは同じ年に武后から御恩をうけた。彼の材の巨大さは「くす」の木が日月を夾めるがごとくであつたが、歳月久しくしていたづらに根が深くはつてゐるだけで幹や枝はしげらぬ。自分は詩思が綿密でないからどうして文章の入り口にも達するこゝとができよう。ただ窮秋にあつて一たび感動して涙をふるふのは兄弟の様なあなたにであうたためにはかならぬ。わたしは錦官城に住んでゐる、あなたは祇園の寺に住んでをられる、ところが近いのでたびの愁をなぐさめることができ、往來するにも路が村落の地方にあつてをる。この地で長雨もやみ、うるしねは臥したまうごかぬ。自分はただよへる生活をして他郷に遊ぶことにあきてゐるのではじめて道徳の友と交りをおつくる様になつた。日がくれて長廊下をあるくがすこしも車馬のやかましいおとは無い。夜たけなはになつてしづかな話に接してゐるといつしか夜もあけ落ちかかる月は黄金の盆のやうになつてゐる。他の世界は漠漠としてまつくらで、俗人はかけすりまはつて名利の争奪をしげくやつてをる。このとき俗界の濁つた水の源を照すことのできるものは、ただあなたのもつてをられる摩尼の珠があるばかりである。」

泛溪

溪に泛ぶ

落景下高堂。進舟泛迴溪。
誰謂築居小。未盡喬木西。
遠郊信荒僻。秋色有餘淒。
練練峰上雪。纖纖雲表霓。
童戲左右岸。罟弋畢提攜。
翻倒荷芰亂。指揮徑路迷。
得魚已割鱗。採藕不洗泥。
人情逐鮮美。物賤事已睽。
吾邨靄暝姿。異舍雞亦棲。
蕭條欲何適。出處庶可齊。
衣上見新月。霜中登故畦。
濁醪自初熟。東城多鼓鼙。

落景に高堂より下り、舟を進めて迴溪に泛ぶ。
誰か謂ふ築居小なりと、未だ盡さず喬木の西。
遠郊信に荒僻なり、秋色、餘淒有り。
練練たり峰上の雪、纖纖たり雲表の霓。
童は戯る左右の岸、罟弋畢く提攜す。
翻倒して荷芰亂れ、指揮して徑路迷ふ。
魚を得て已に鱗を割く、藕を採つて泥を洗はず。
人情、鮮美を逐ふ、物賤しければ事已に睽く。
吾が邨、靄姿靄たり、異舍、雞亦棲む。
蕭條何くに適かむと欲する、出處庶はくは齊しくすべし。
衣上、新月を見る、霜中、故畦登る。
濁醪自ら初めて熟す、東城に鼓鼙多し。